

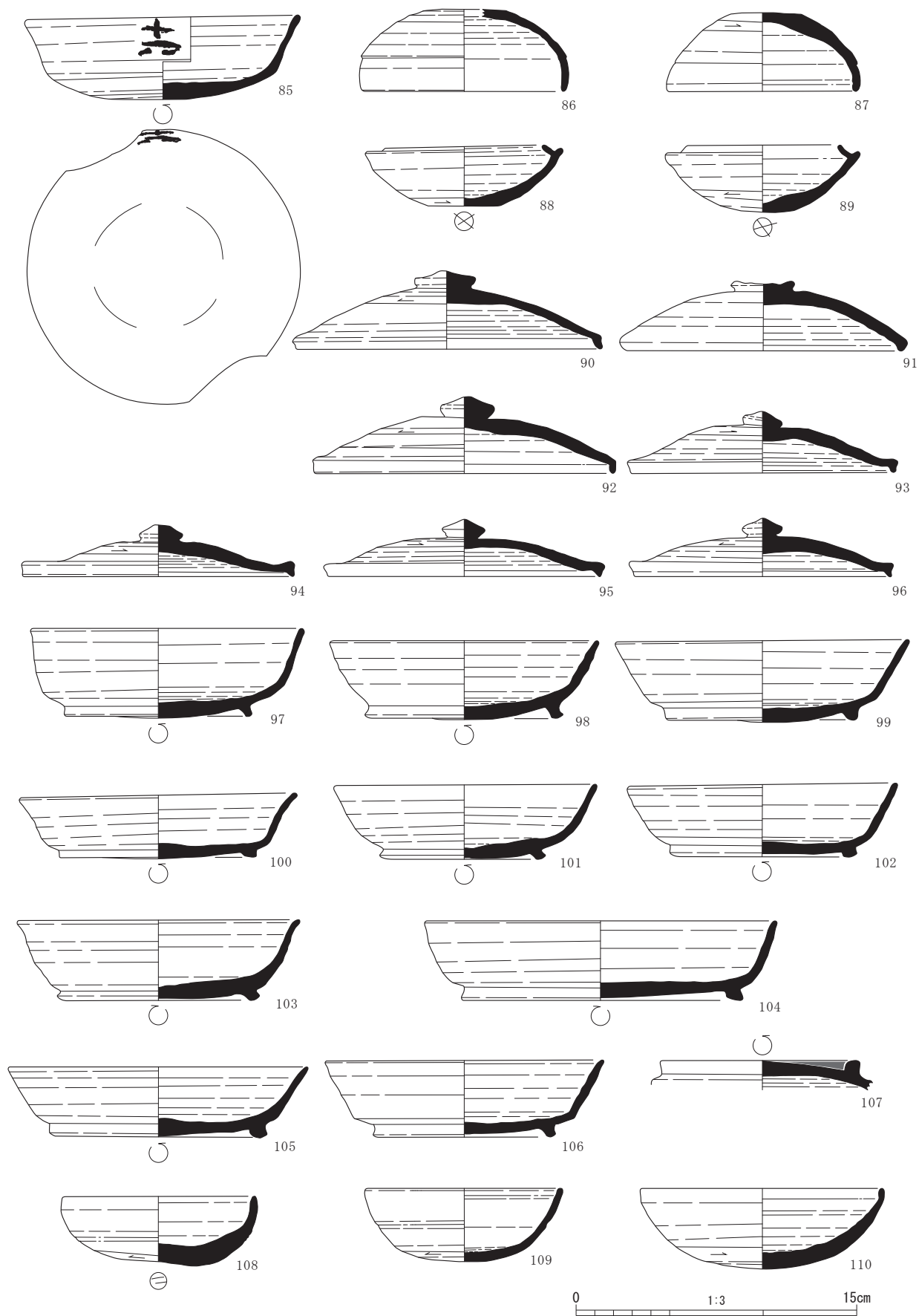


Fig. 127 V層北西部 出土遺物 (1)

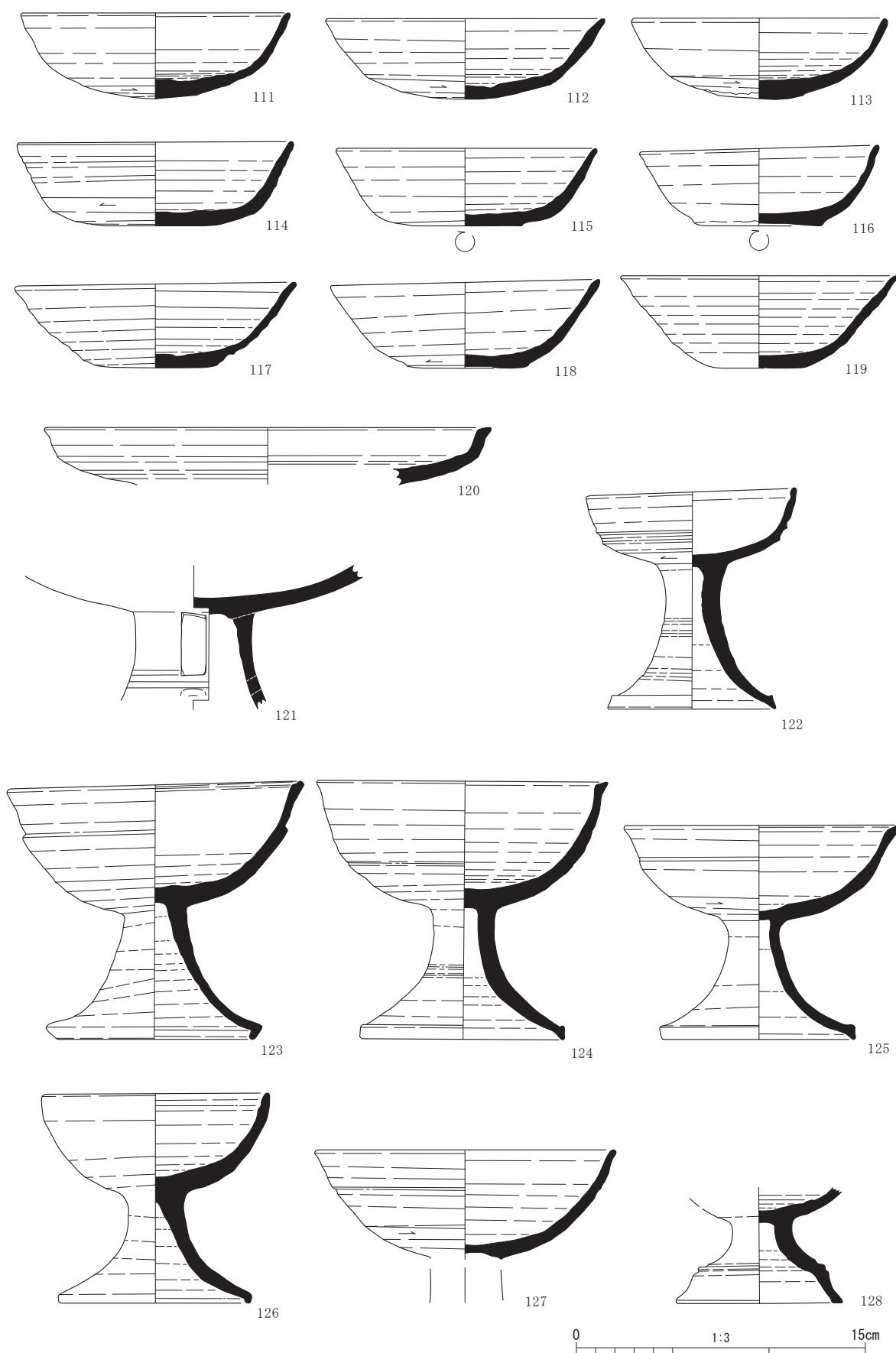


Fig. 128 V層北西部 出土遺物 (2)

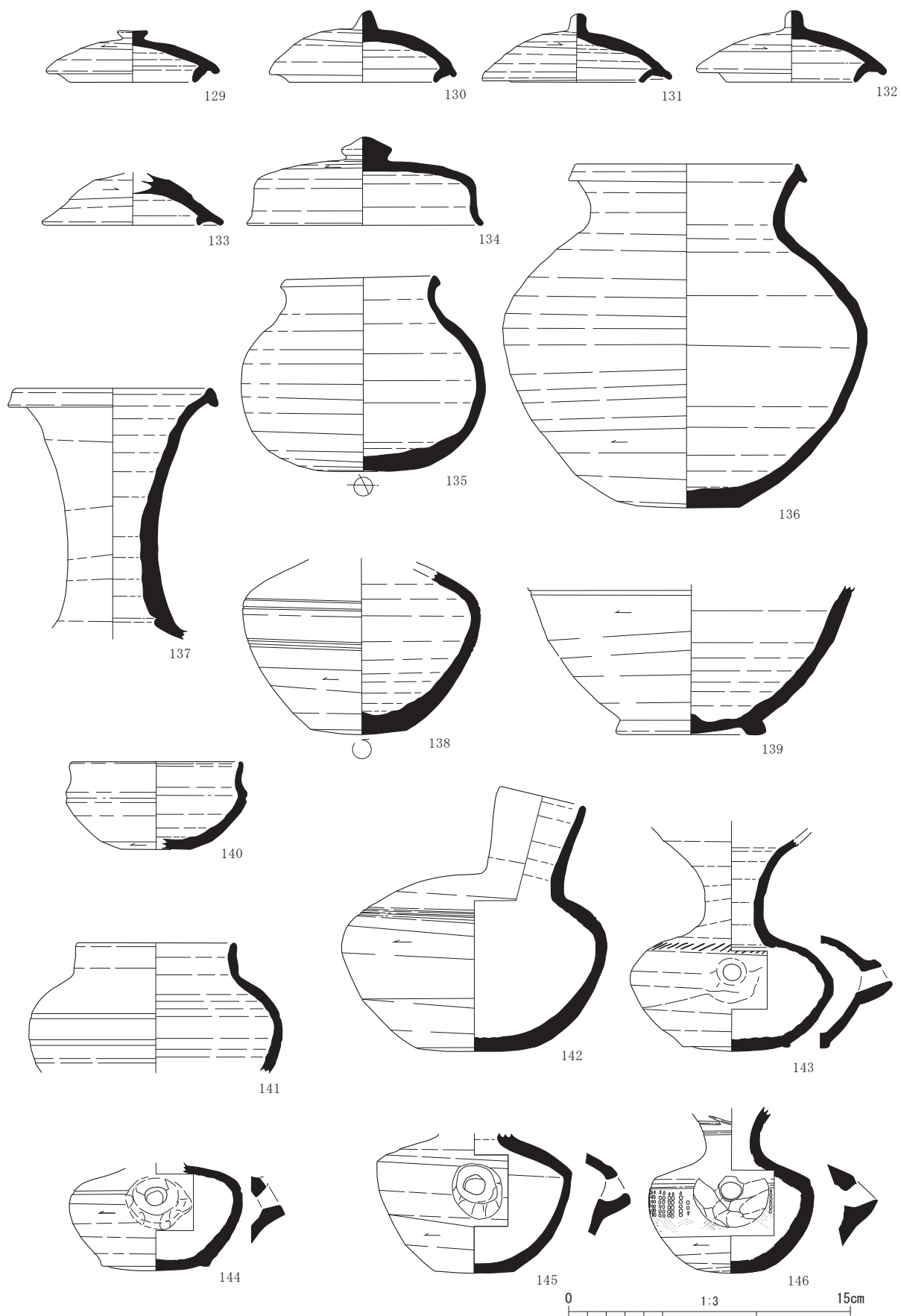


Fig. 129 V層北西部 出土遺物 (3)

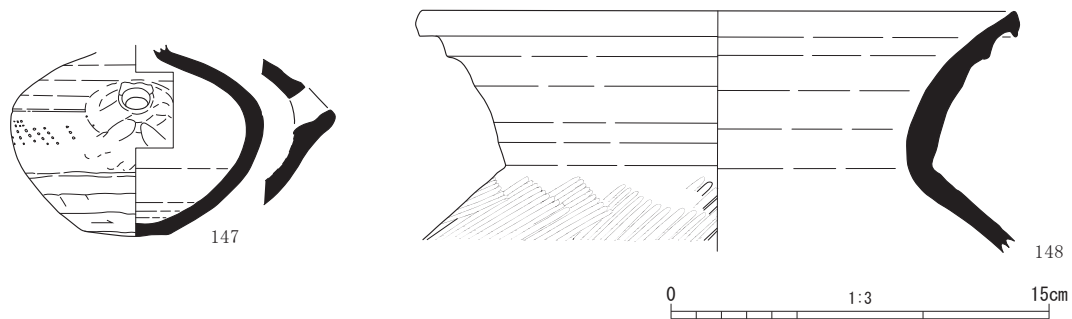


Fig. 130 V層北西部 出土遺物 (4)

165～168は甗である。169～173は小型模造品である。169・170は碗の外面体部に人面墨画と考えられる墨画が描かれているが内容は不明である。171は小型の高坏である。外面は指ナデ調整、内面はハケ調整が施される。172・173は小型の壺である。172は口縁部が欠損している。174は小型の甗である。175～178は手捏ねの鉢である。178は形状が箱型である。179～182は小型の碗である。183・184は製塩土器である。ともに口縁部が尖っている。

土製品 (Fig. 135) 185～188はV層北西部より出土した土製品である。185は支脚と考えられる。186は土錘である。形状は円筒状である。本調査ではD区で検出された伊場大溝全体でみても土錘の出土量は少ない。187・188は土馬である。187は馬の背から尾にかけて残存している。188は足のみで動物の種類の判別は困難であるが、本調査では土馬が多数出土していることから土馬の可能性が高い。

石製品 (Fig. 135) V層北西部では189～191の石製品を示す。189は軽石を多面的に削られている。浮きとして加工された可能性がある。190・191は砥石で、190は流紋岩質凝灰岩製の砥石である。重量があるため地面などに置き、使用に合わせて砥面を使い分けていた可能性がある。2箇所敲打による凹みが確認されるため、砥石以外の用途に使用されていた可能性が高い。191は凝灰岩製の砥石で、上半が欠損している。側面4面を砥面として使用している。

木簡 (Fig. 136) V層北西部より木簡は4点出土している。梶子遺跡において過去出土した木簡は発見順で番号が付与されているため、本調査も発見順の番号を付与した。192を26号木簡、193を28号木簡、194を29号木簡、195を30号木簡とした。第5章で詳述するためここでは概要のみを記述する。

192は、薄板状の木材に墨書が記されている。文字として判読は困難であり、文字数も不明である。両側面が欠損している。上下端部の形状から全体の形状は長方形ではない可能性がある。193は、板材に12文字記されている。下部が欠損しているため、続いて文字が記されていたと考えられる。12文字目の判読は困難であるが残存部の文字に年号と考えられる「天平十六」の文字が確認されるため「年」と推察できるが、「年」にあたる文字が欠損により不明瞭である。194は板材に17文字記されている。右側面が欠損しているため文字がさらに記されていた可能性がある。195は平串状の板材上部に7文字記されている。やや等間隔に折られた痕跡が確認でき、廃棄する際に折られ

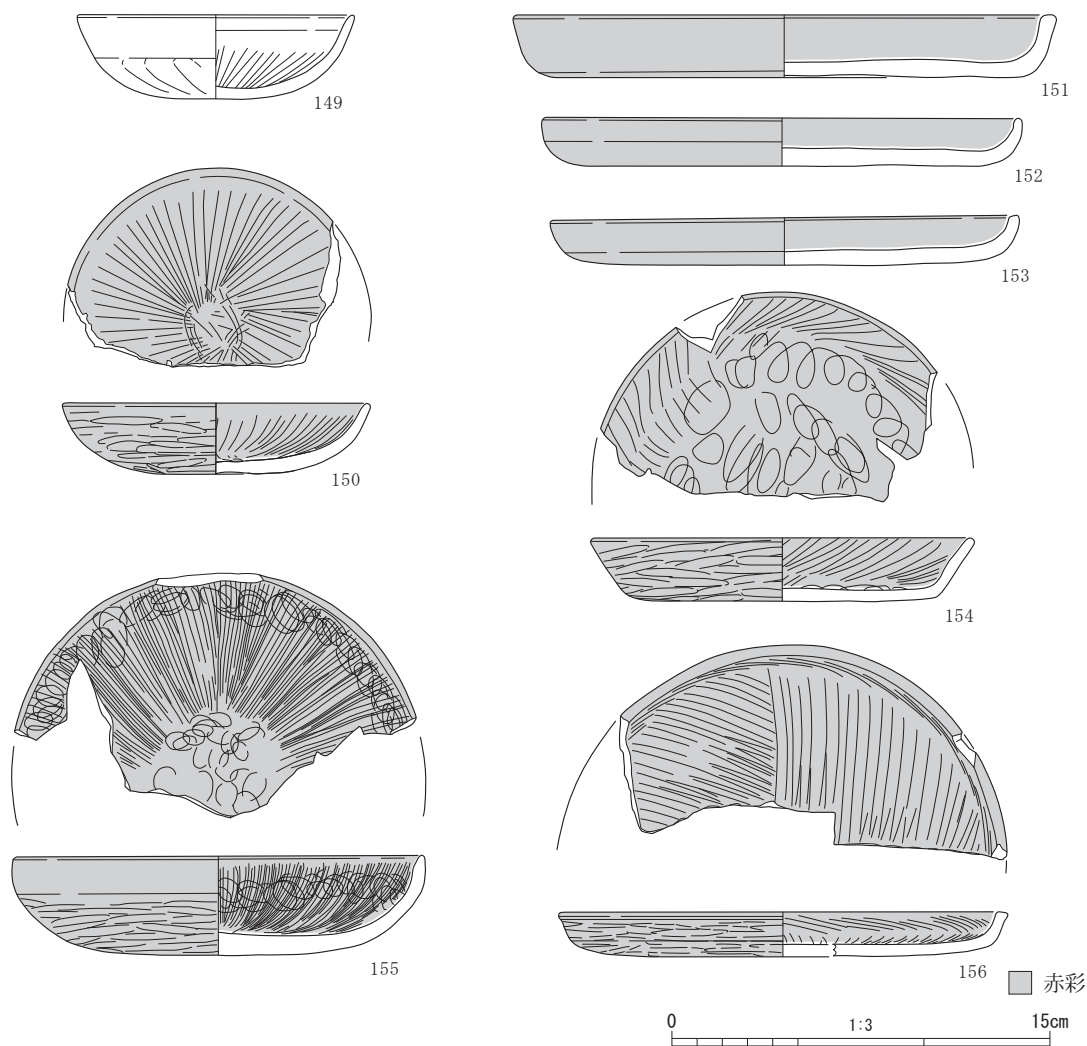


Fig. 131 V層北西部 出土遺物 (5)

たと推定される。

木製品 (Fig. 136 ~ 146) 伊場大溝北西部より出土した木簡以外の木製品である 196 ~ 263 を示す。斎串や舟形などの祭祀具が多数出土している。そのほか、曲物や農具、Y字形木製品、組物、建築部材など多岐にわたる木製品が出土している。

196 は絵馬で、墨書で牛が描かれている。上部中央に孔が開いている。中央が縦方向に折れており、左下半が欠損している。197・198 は斎串である。上部は山形に加工され、下部は鋭い山形に加工されている。197 は上部に墨書で人面が描かれており、両側面に突出した部分が確認できる。199 ~ 201 は人形である。すべて下部が欠損しており、全体の形状は不明である。199・200 は側面に頭部を表現するための抉りが確認されており、199 は頭部を、200 は肩部を強調するように加工されている。201 は一方の側面のみ抉りが確認される。202 ~ 204 は舟形である。202・204 は中央船底に円形の孔が開いている。202 は2箇所、204には上部に方形の孔が確認される。203 は右側面を欠損しており、上部に円形の孔が確認される。205 は、用途は不明であるが、祭祀具関連の木製品と考えられる。上半両側面が鋸刃状の加工が施され、下半は円柱

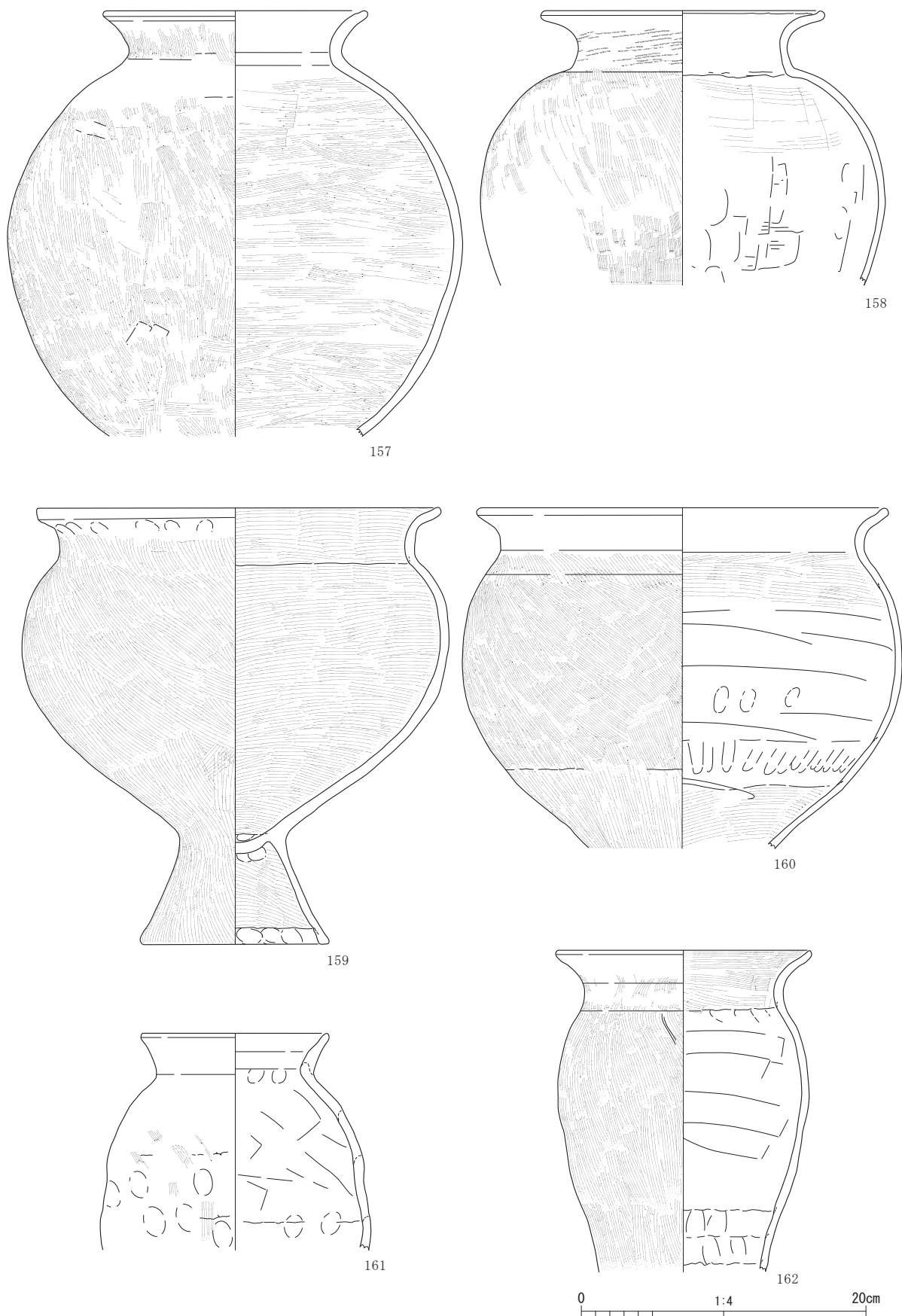


Fig. 132 V層北西部 出土遺物 (6)

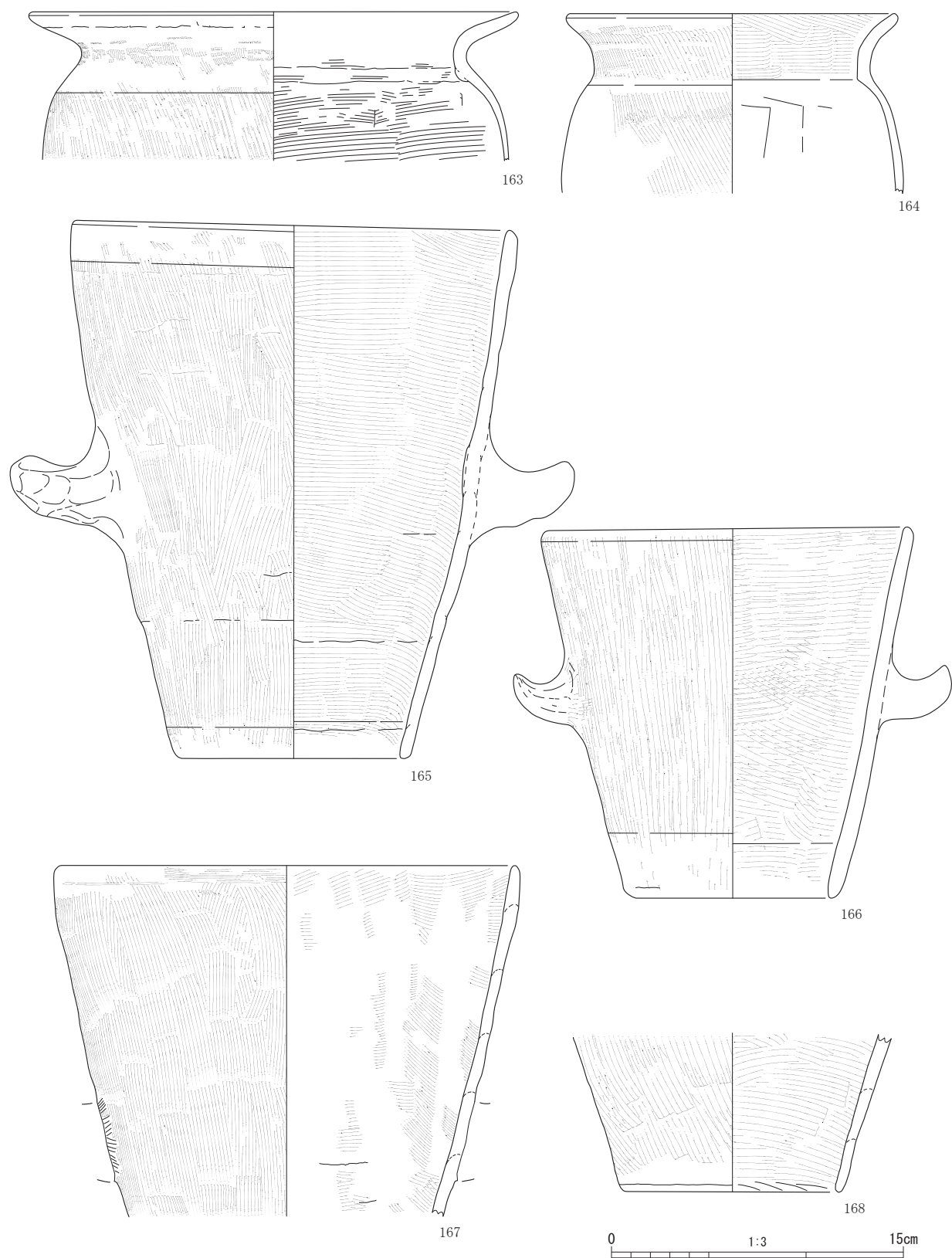


Fig. 133 V層北西部 出土遺物 (7)

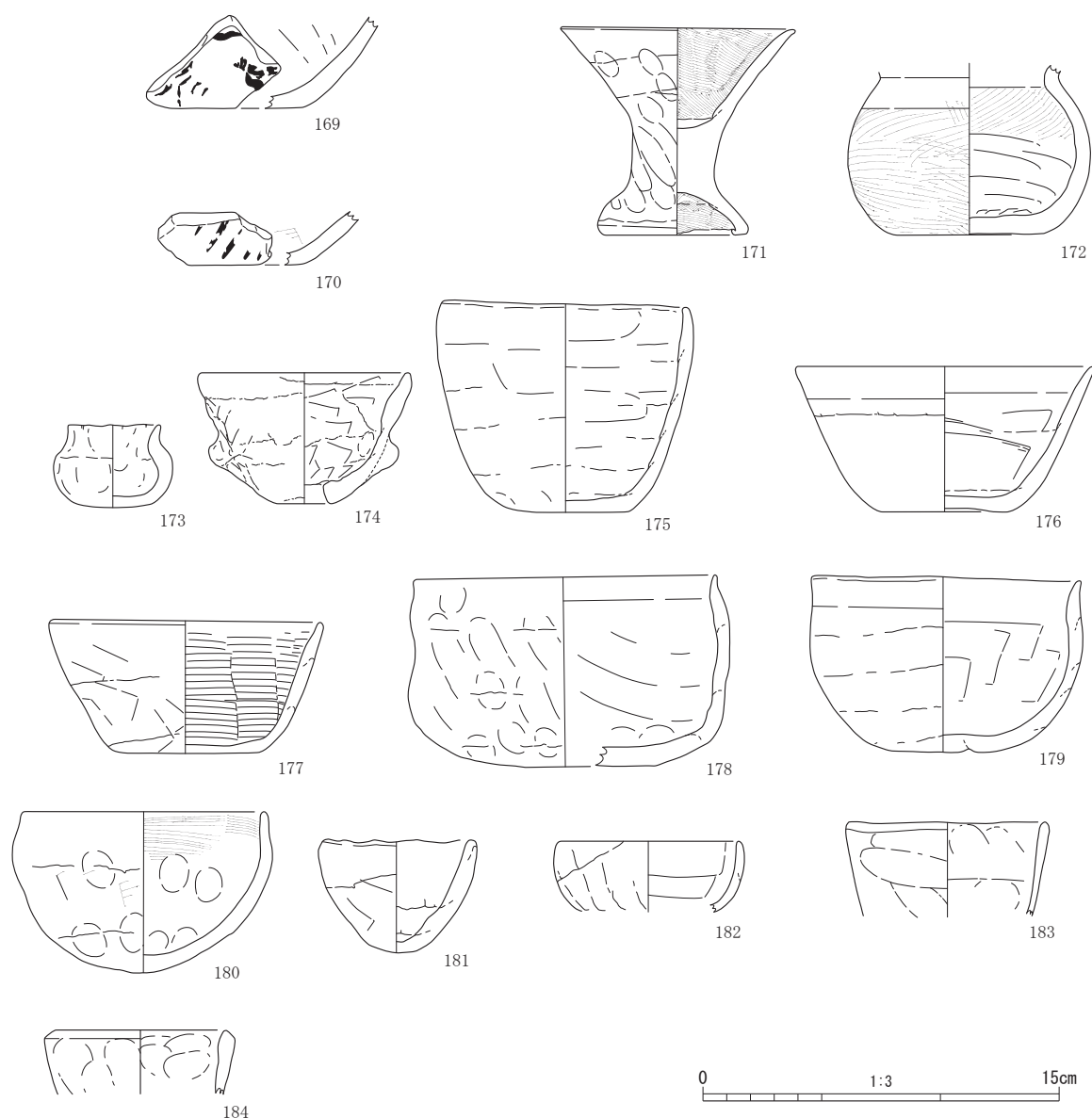


Fig. 134 V層北西部 出土遺物 (8)

状のように加工されている。

206～208は工具などの柄である。206は斧柄である。207は鎌柄で、下部が欠損している。鎌刃を装着させるための筋状の装着孔が確認される。208は組み立て式の柄と考えられる。全体的に丁寧な加工がなされており、下部に別の柄を差し込むためと考えられるU字型の挟りが削り出されている。柄尻は湾曲する形状である。209は芯持丸木材を用いた横槌である。

210～212は木錘である。形状により2種類に分類することができる。1つは、210の半割材の上部中央に方形の孔を空けた形状で、もう1つは、211・212の芯持丸木材中央全周に深い挟りを入れ、中央を補足した形状である。213・214は加工板で挟りが確認される。213は片側に方形の挟りが、214は両側面2箇所挟りが確認される。215は鋤の把手の一部で、半環状の把手。217は鋤で刃部に挟りが確認される。218は鋤である。柄が欠損しており、身部には鉄刃を装着させるための削り出しが確認される。

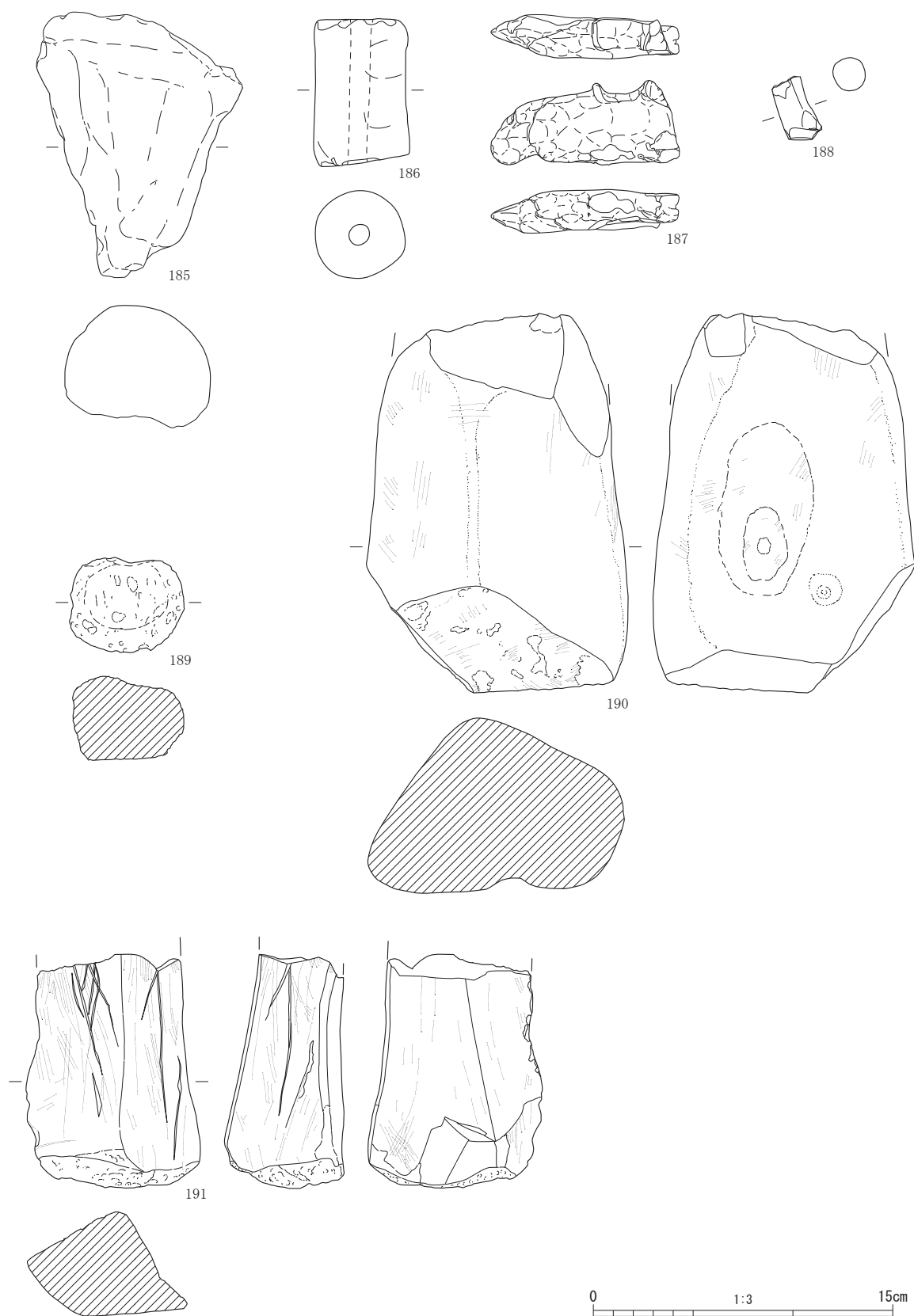


Fig. 135 V層北西部 出土遺物 (9)

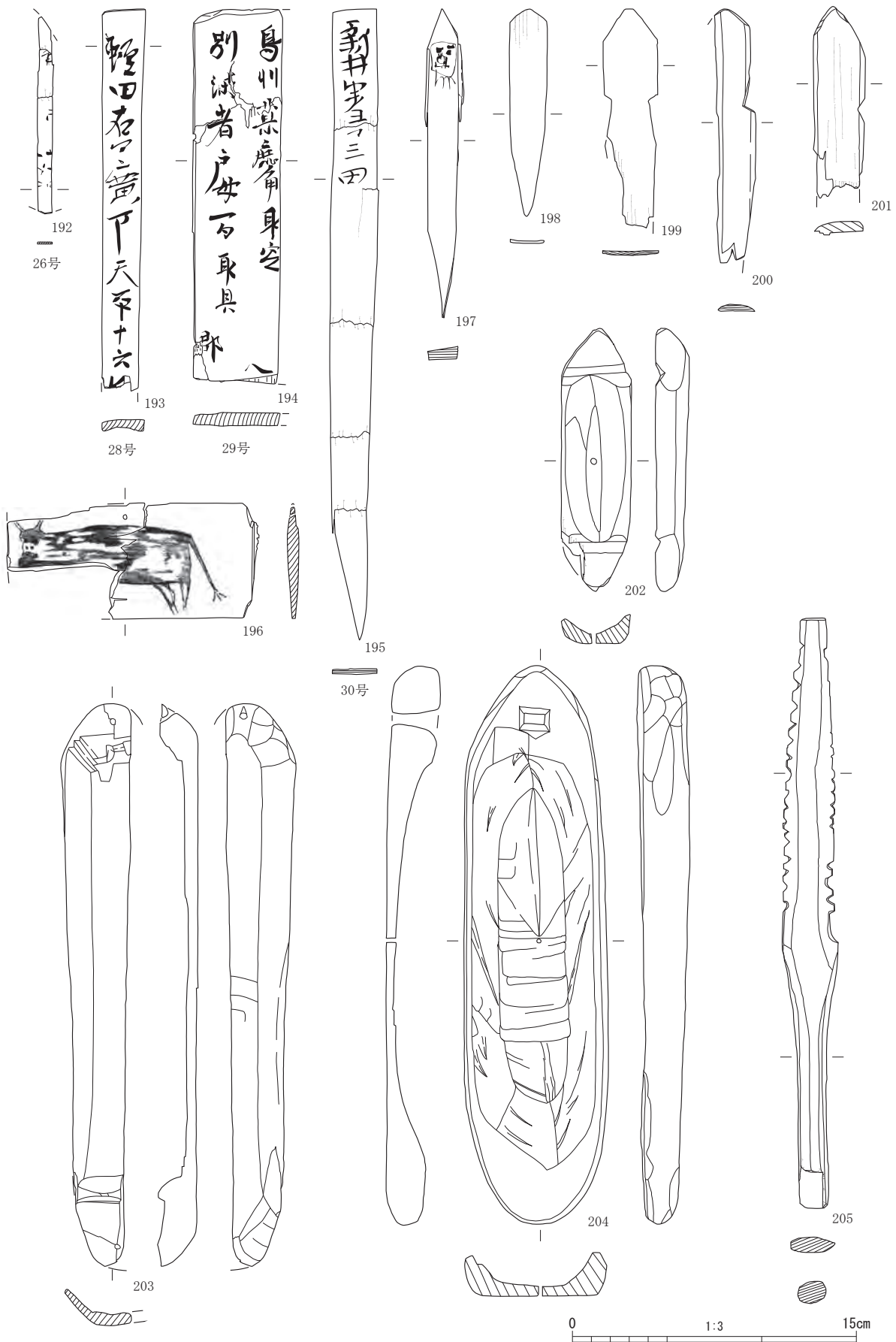


Fig. 136 V層北西部 出土遺物 (10)

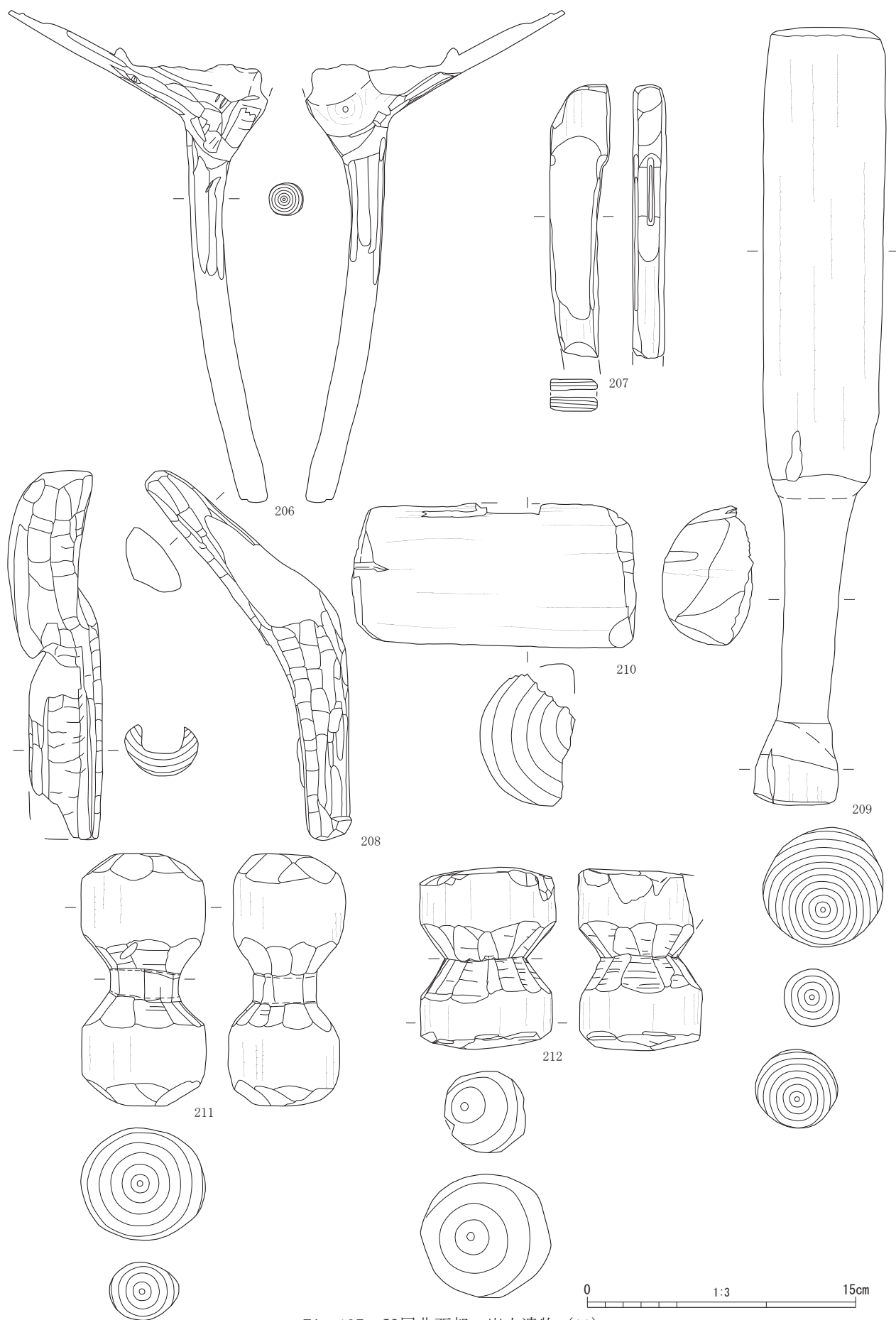


Fig. 137 V層北西部 出土遺物 (11)

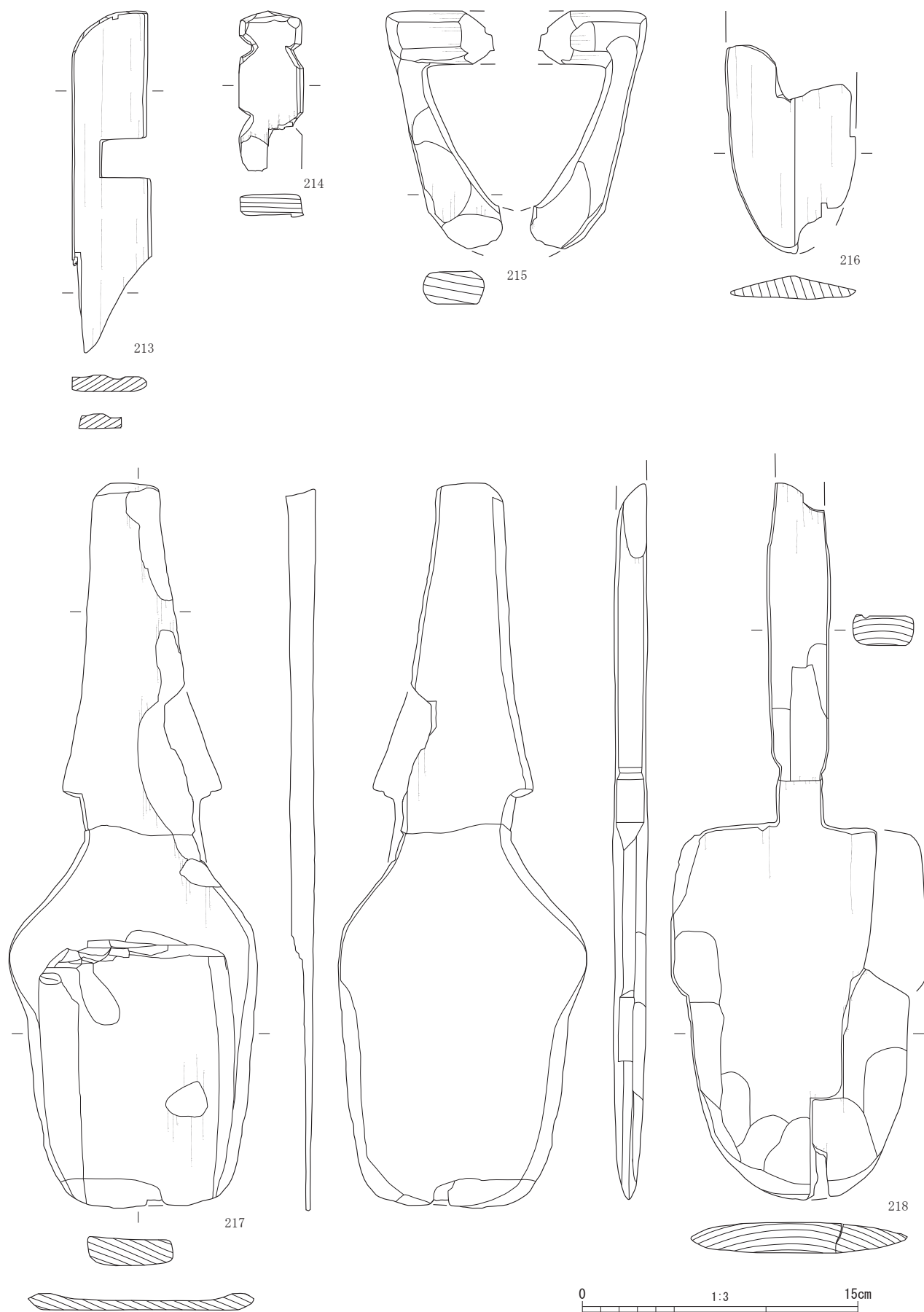


Fig. 138 V層北西部 出土遺物 (12)

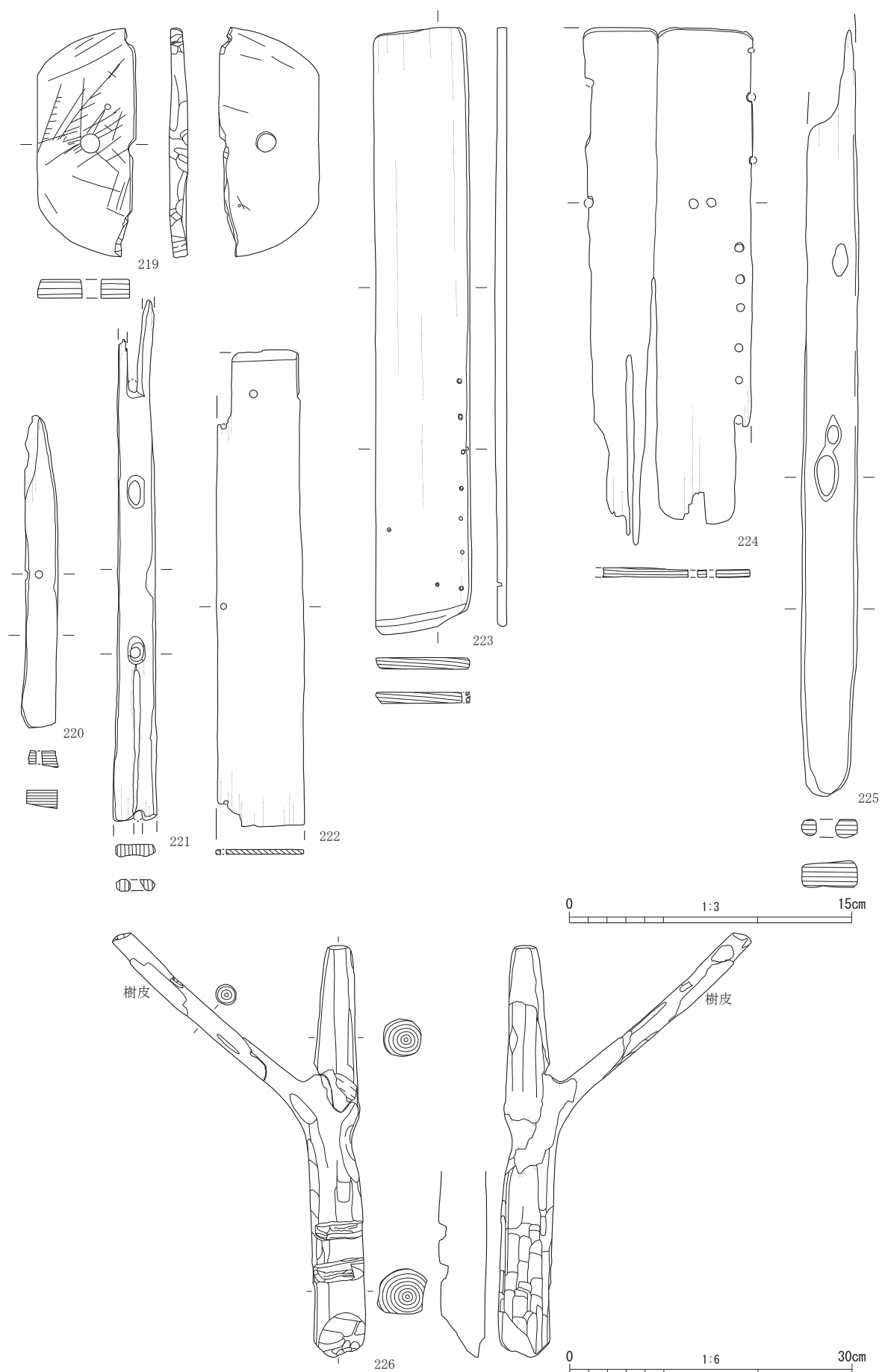


Fig. 139 V層北西部 出土遺物 (13)

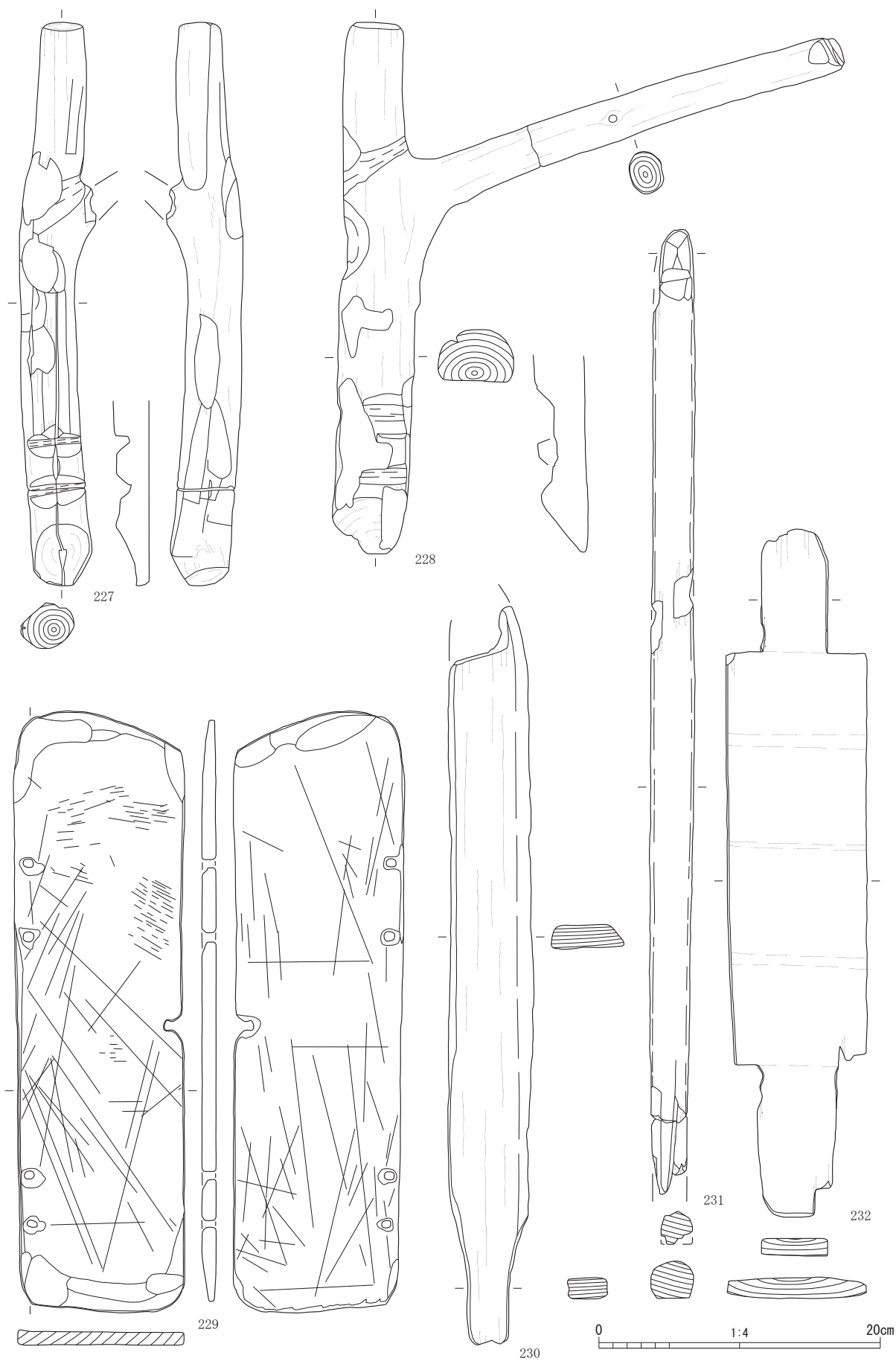


Fig.140 V層北西部 出土遺物 (14)

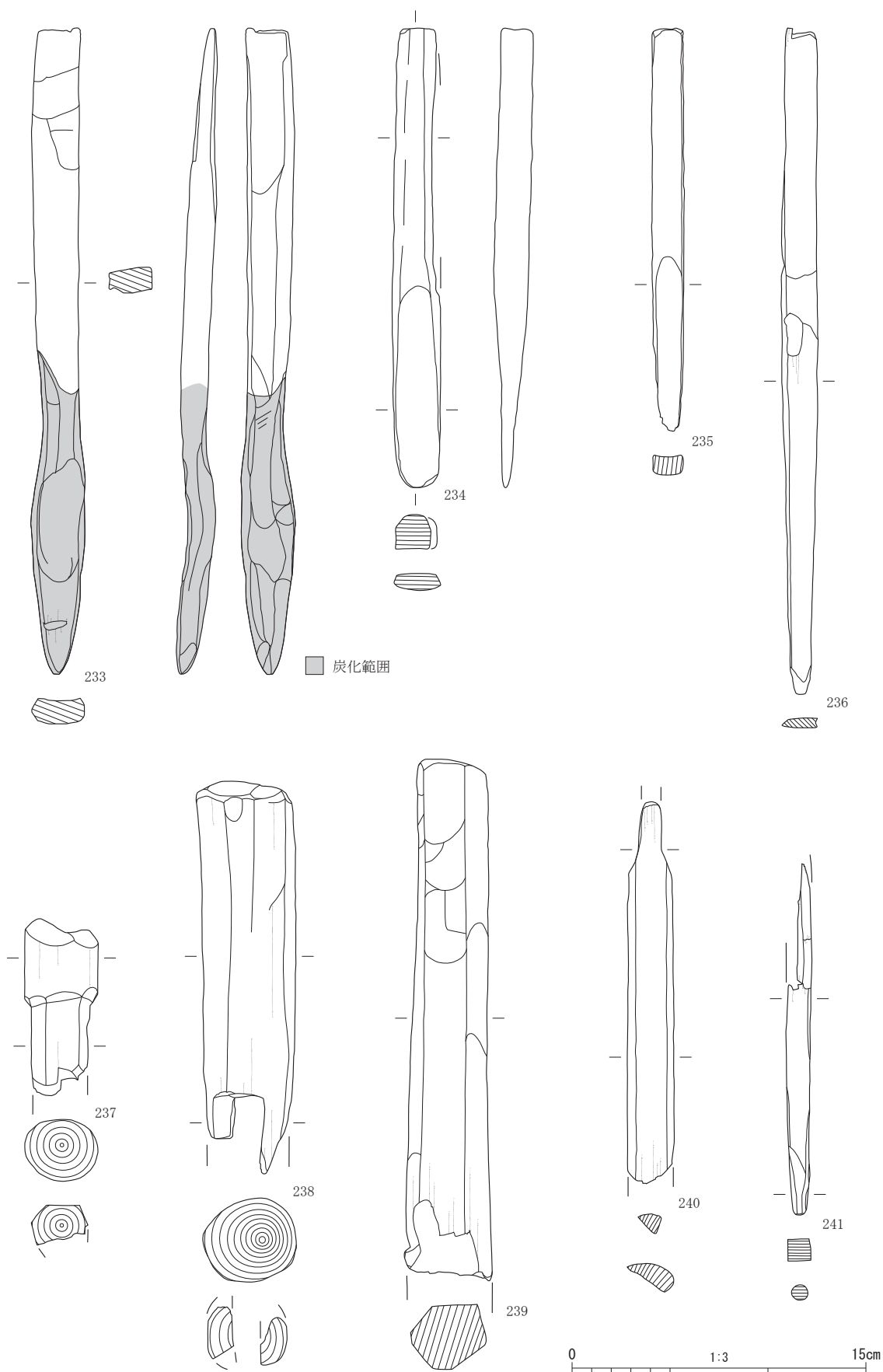


Fig. 141 V層北西部 出土遺物 (15)



Fig.142 V層北西部 出土遺物 (16)

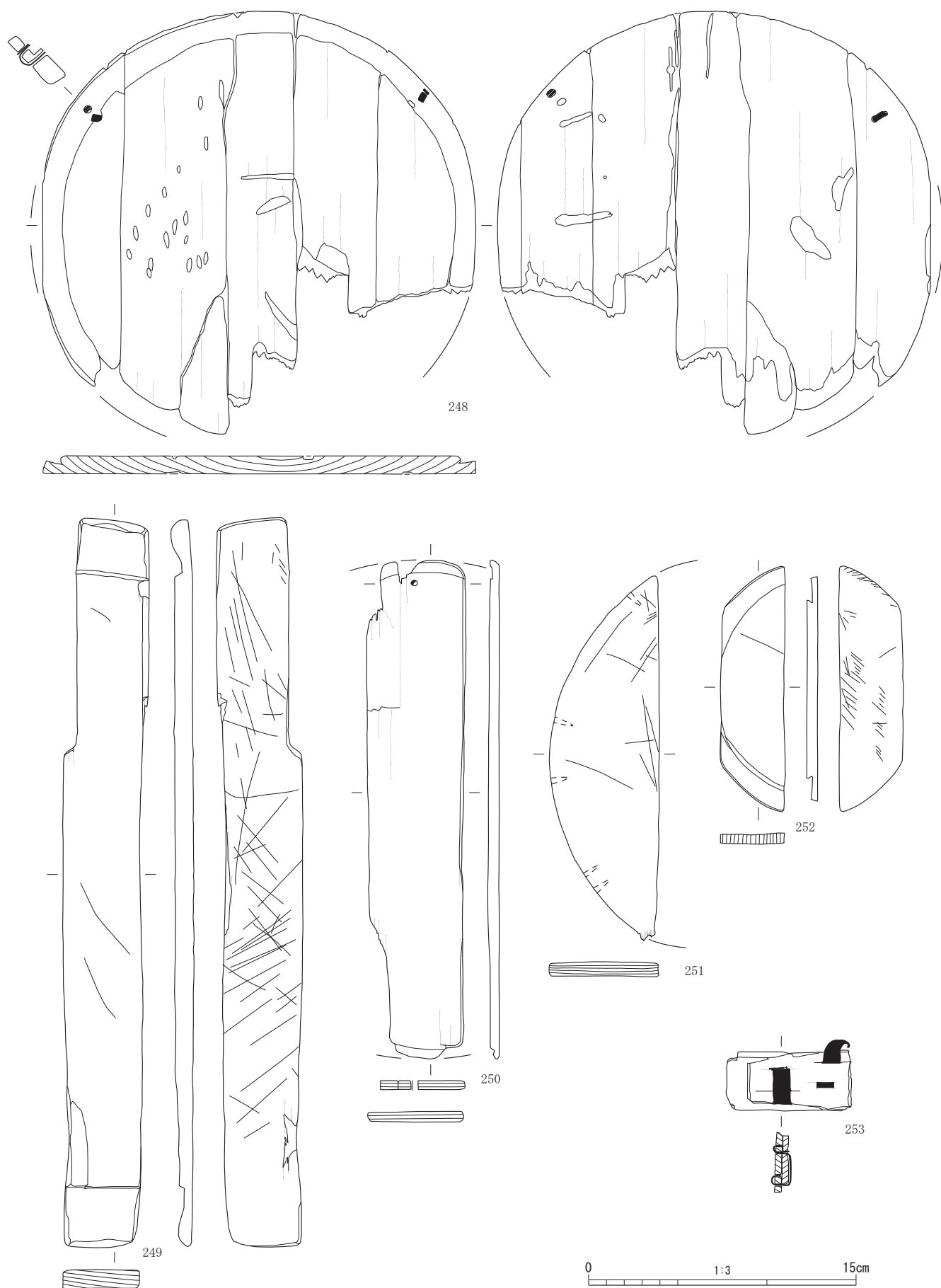


Fig. 143 V層北西部 出土遺物 (17)

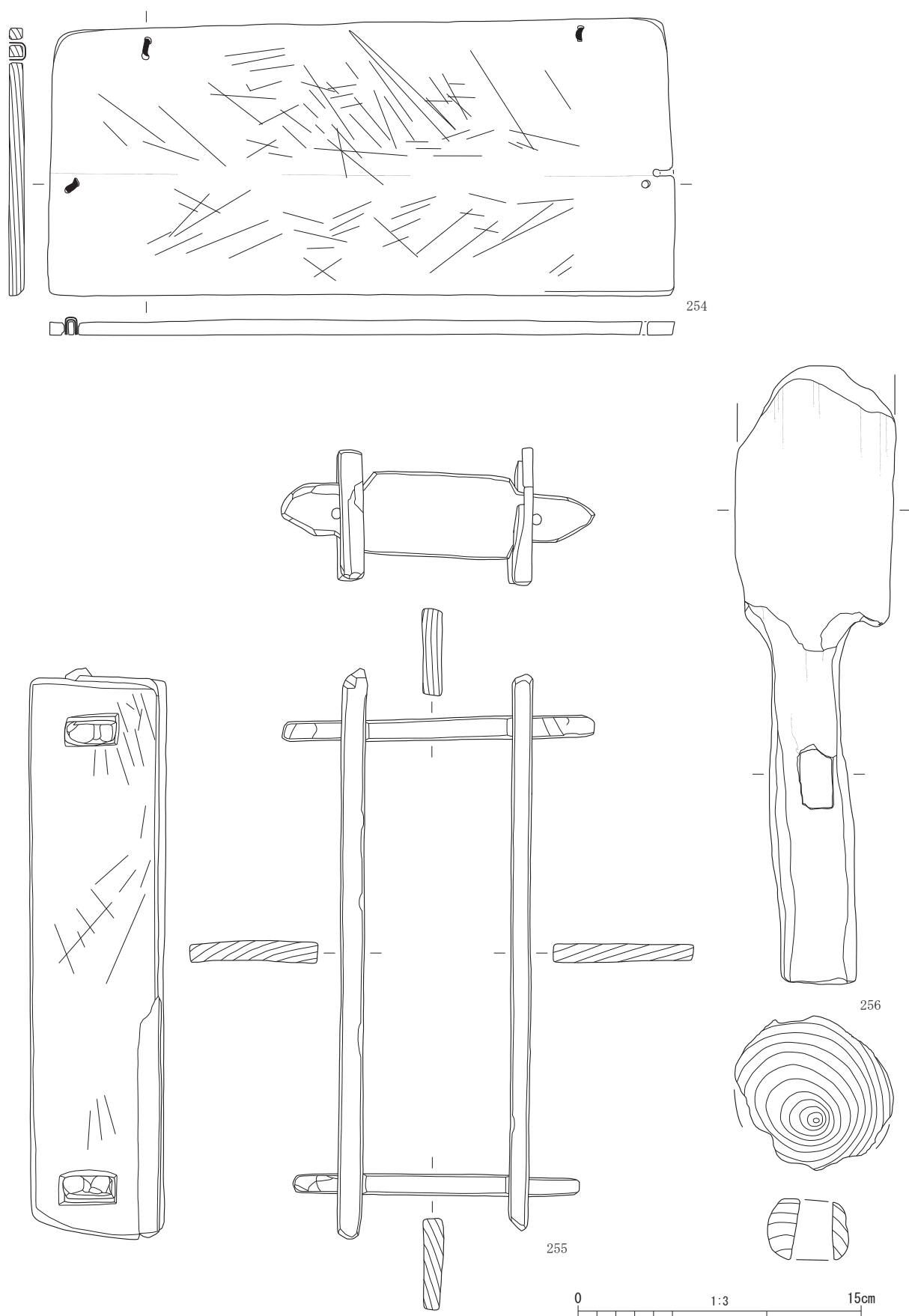


Fig.144 V層北西部 出土遺物 (18)

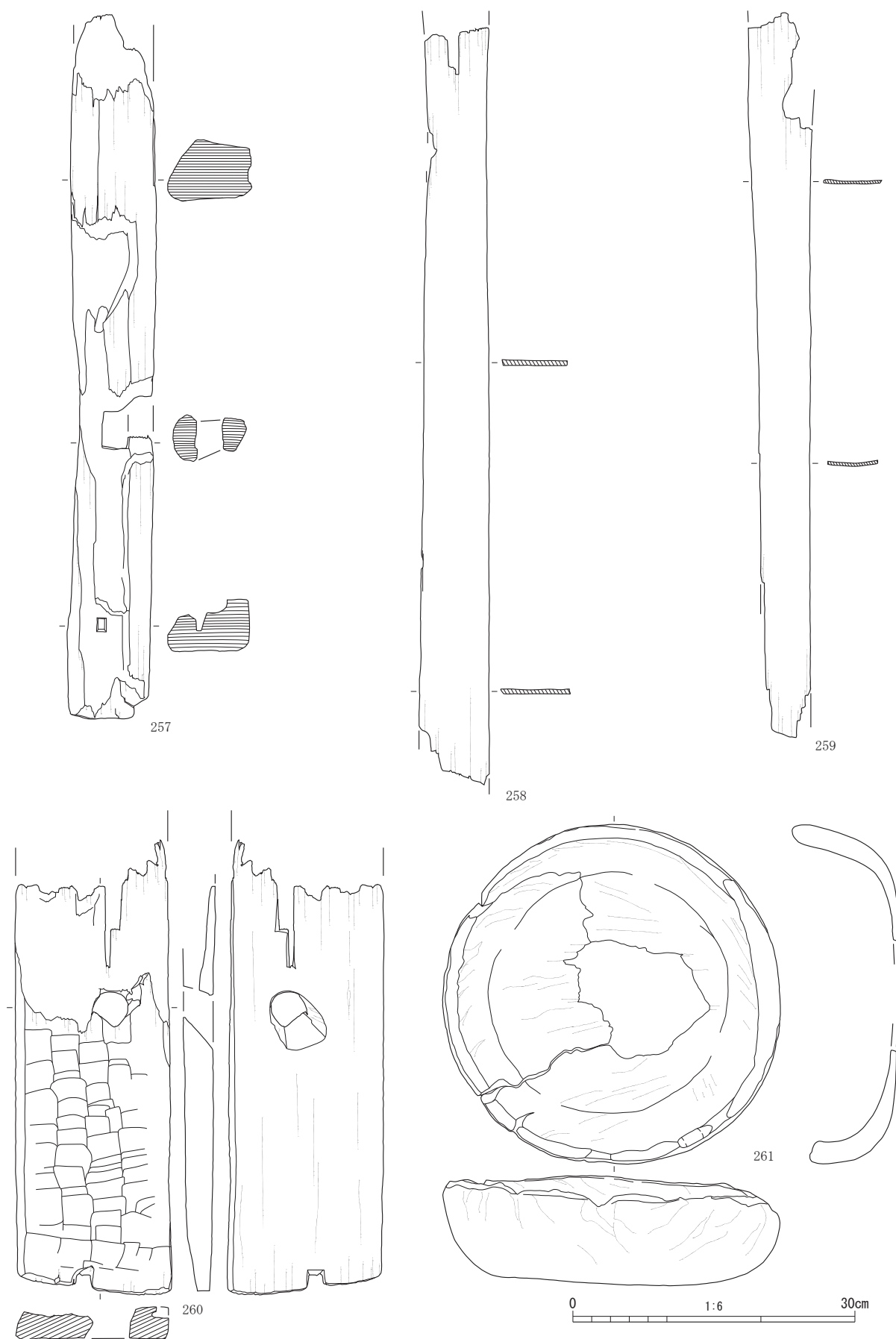


Fig. 145 V層北西部 出土遺物 (19)

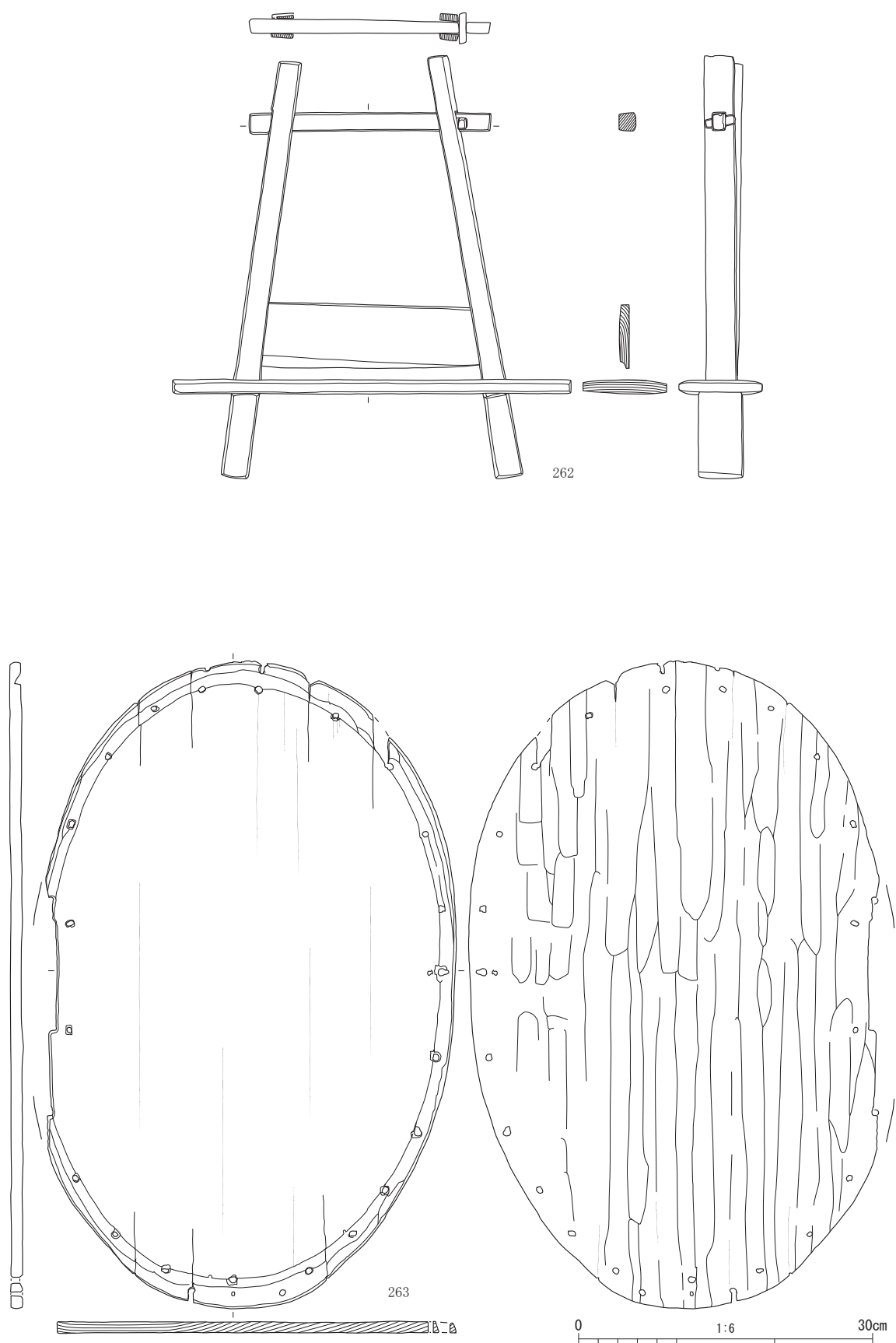


Fig.146 V層北西部 出土遺物 (20)

219～225は有孔板材である。219は右側面上部・中央・下部に浅い抉りが確認される。223・224は、外周に孔が空けられているため、折敷の可能性はある。226～228はY字形木製品である。すべて枝部逆側と枝部上部に擦痕が、下部に2箇所への抉りが確認される。228のみ2箇所の抉りを正位とすると枝が右側に延びる。229は有孔板材である。230は加工板で、下部が両側面を削られ細くなる。231は加工棒で、上部に抉りが確認される。232は木柵の部材と考えられる。3箇所帯状の擦痕が確認される。

233～247は用途不明の加工棒、加工板である。233～236はへラ状に加工された加工棒である。233は下半が炭化している。237～244は加工棒である。239は多角形に面取りされている。242は上部が炭化している。245～247は加工板である。247は下半側面が炭化している。

248～252は曲物の底板である。251は側面に木釘が一部残存する。253は曲物の側板で、樹皮で2箇所結合されている。254は方形の蓋板と考えられる。3方向に樹皮で結合されていた痕跡が確認される。255は差し込み式の木柵である。差し込まれている部分には木釘状のもので固定されていた痕跡が確認される。2枚の有孔板は曲物の底板を二次転用している。256・257は建築部材である。257は方形の孔、抉りが確認される。258・259は70cm以上の板材である。260は大型の有孔板で、斜めに孔が確認される。261は大型の鉢で底部が欠損している。262はイーゼル形状の用途不明組物である。上部右側に留め具が打ち込まれており、その留め具を外さなければ分解できない構造となっている。263は大型の曲物の底板である。楕円形で外周に孔が空けられている。側面一部が欠損しているが、欠損後に空けたと考えられる孔が2箇所確認できるため、欠損後も使用されていたと推定される。

②V層南東部 (Fig. 147～163)

須恵器 (Fig. 147～151) 264～339はV層南東部より出土した須恵器である。器種は、坏蓋や坏身が主体的であるが高坏や壺類、甕などが出土している。そのうち、墨書土器が7点出土している。

264は摘蓋で、内面に墨書で2文字記されている。欠損によりすべて確認できないが、実際の文字数は多い。欠損により不明瞭であるが1字は「川」と考えられる。265～268は有台坏身の底部に墨書が記されている。265は、3文字記されており、「貴大」は判読できるが、最後の1文字は判読できない。266は、3文字記されており、「止由」は判読でき、残りの1文字は「良」と考えられる。267は、1文字記されているが、判読できない。268は、習書されている。多くの文字が記されており、「部カ大部」、「丈」、「矢田部」、「人人」や墨痕が確認される。269は無台碗で側面に墨書で3文字記されている。1文字目は判読できないが残りの2文字は「麻呂」と記されている。

270～302は坏蓋と坏身である。有台坏身が多数を占める。270・271は7世紀代の特徴を示す坏蓋と坏身であることからVII層の混入品と考えられる。272は返り蓋で、同じくVII層からの混入品と考えられる。273～283は摘蓋である。摘部が扁平なものから宝珠型のものが確認される。283は内面全体に墨痕や摩滅した痕跡が確認され、硯として転用されている。284～299は有台坏身である。285～291は底部が高台より突出した形状で292～299は底部が突出しない形状である。293～299は体部が鋭く屈曲する形状である。299は、他の有台坏身と比較して口径が大きい。300～302は

無台坏身である。301 は、底部が扁平で、体部で屈曲している。303 ～ 321 無台碗である。303 ～ 310 は体部から口縁部に向かって丸みを帯びながら立ち上がる形状である。311 ～ 319 は底部が扁平で、体部から口縁部に向かって直線的な形状である。320 は、体部から口縁部に向かって立ち上がったのち口縁部が外反する形状で、一連の無台碗の中では特異な形状である。322・323 は皿である。324 は鉢で口縁部が外反する。325 ～ 327 は高坏である。327 は、脚部が他の高坏と比較して低い。

328 ～ 335 は壺類である。328 ～ 329 は広口壺である。330 ～ 332 は長頸壺である。330 は脚部が細く、体部に列点文が施されているため、Ⅶ層からの混入品と考えられる。331 は体部の形状から長頸壺と考えられる。332 は肩部が鋭く屈曲する形状で、底部が欠損している。333 ～ 335 は短頸壺である。334・335 は小型で頸部の括れが弱い。336 は、底部を欠損した陶臼である。337・338 は平瓶である。337 は口縁部外面に沈線が廻る。339 は甕の口縁部のみ残存している。

土師器 (Fig. 152 ～ 155) 340 ～ 398 はⅤ層南東部より出土した土師器である。出土量は須恵器に比べ少ないが、小型模倣品や製塩土器が多数出土している。

340・341 は模倣坏で、340 は坏身、341 は有台坏身の模倣品である。341 は内外面ともに赤彩が施されている。342 ～ 351 は皿である。343 ～ 350 は内外面ともに赤彩が施されている。347 ～ 351 は外面に丁寧なミガキが施されており、内面は暗文が確認される。348 ～ 351 の暗文は内面中央は一筆書きで無造作に描かれており、口縁部内面に近い部分は放射状に文様が描かれている。352 ～ 354 は台付皿である。352 ～ 354 は内外面ともに赤彩が施されている。354 は他の台付皿と比較して脚部が高い。

355・356 は外反口縁壺である。ともに外面はハケ調整がなされ、内面は板ナデ調整が施されている。355 は頸部の径が広い。357 ～ 359 は甕である。外面はハケ調整がなされており、内面には板ナデ調整が施されている。360・361 は甗である。361 の外面は板ナデ調整が施され、上半側面に円形の孔が確認される。362・363 は把手付鉢である。外面はハケ調整が、内面は板ナデ調整が施される。364 ～ 382 は小型模造品である。364 ～ 374 は手捏ねの碗である。375・376 は把手付碗である。形状は甗形に類似するが、底部が閉塞している。377 は鉢形である。378 は甗形である。379 ～ 382 は小型の壺である。383 ～ 398 は製塩土器である。いずれも内面は指ナデ調整がなされており、布目の痕跡は確認されない。393 はやや大型で碗状の形状である。395 は煤が付着している。

土製品 (Fig. 156) 399 ～ 404 はⅤ層南東部より出土した土製品である。399 は、陶質の土馬で、右脚が欠損している。鞍や手綱、鼻革など細部まで表現されている。鐙があったと考えられる痕跡が確認されるが欠損により明確ではない。400 は、土馬の脚部と考えられる。401・402 は土製の支脚である。402 は、支脚の破片と考えられる。403・404 は皮袋形土製品である。403 は、両側の突起が絞り込まれている形状をしている。出土時、内部に 0.8 ～ 1.8cm の大きさの形状の不揃いな丸石が 13 点内包されていた。完形で出土しており、形状的に廃棄後に混入する可能性は極めて低いことから意図的に入れられた可能性が高い。404 は、断面形が袋状でないことから製作方法が異なると考えられる。

金属製品 (Fig. 156) 405 ～ 409 はⅤ層南東部より出土した金属製品である。405 ～ 407 は鉄製の刀子である。407 は、茎部に木質が残存する。408 は、鉄製の鎌で、刃部はやや湾曲した弦月形で、

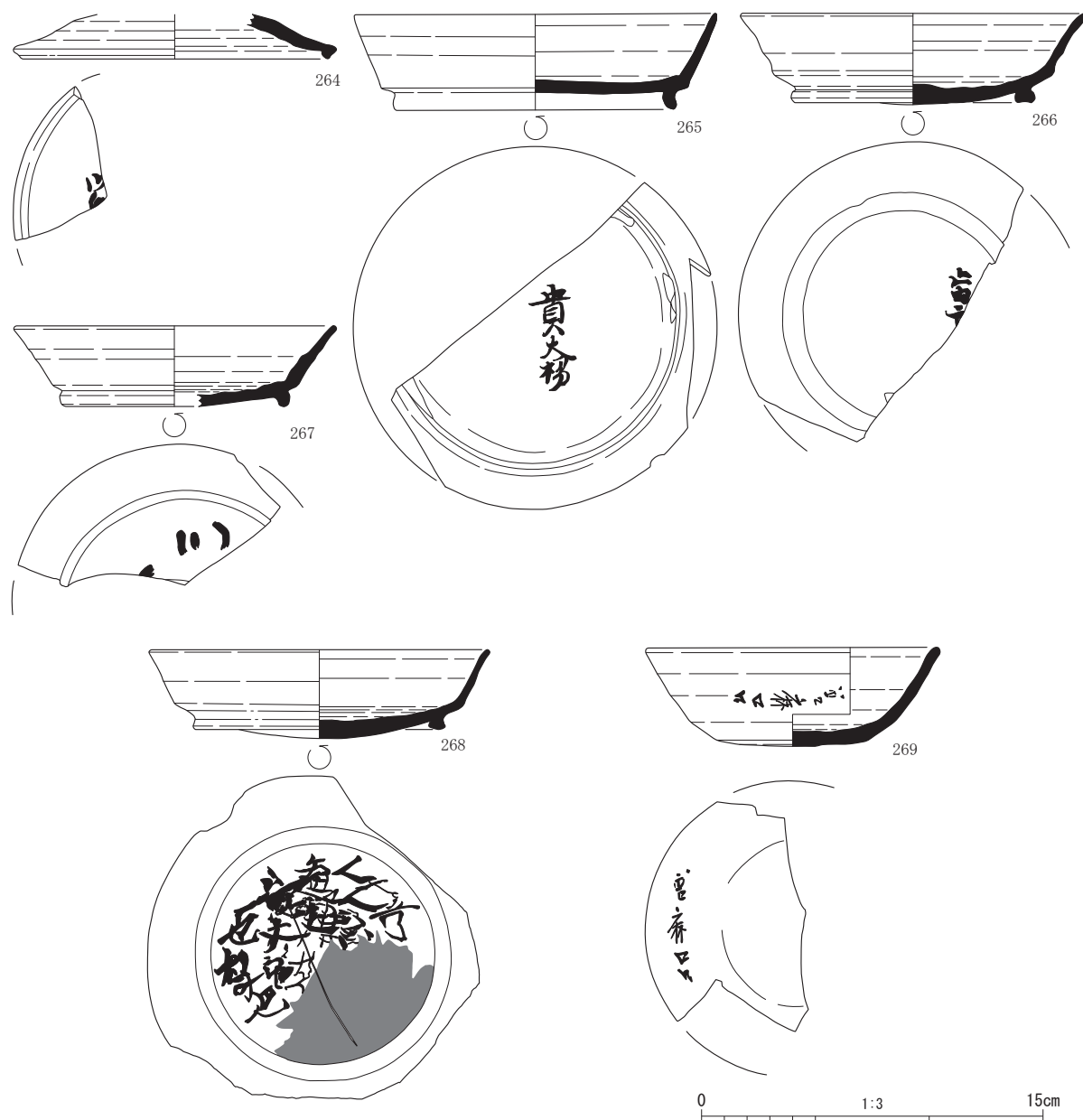


Fig. 147 V層南東部 出土遺物 (1)

基端を折り曲げる形状である。柄に装着孔を空け、基部を装着する鎌の形状と考えられる。409は、鉄製の有頸有茎鎌である。鎌身部は欠損している。

石製品 (Fig. 156) 410・411はV層南東部より出土した石製品2点を示す。410は、砂岩製の凹石で、両面に敲打による凹みと砥面が1箇所確認される。411は、砂岩製の砥石で2面を砥面としている。

木簡 (Fig. 157) V層南東部より木簡は4点出土している。北西部で出土した木簡と同じく、発見順で番号を付与した。412を23号木簡、413を25号木簡、414を27号木簡、415を31号木簡とした。第5章で詳述するためここでは概要を記述する。

412は、縦に長い板材上部中央に「三家部国売」の5文字記されており、下部に孔が空けられている。413は、幅の狭い板材に「郷戸主矢田マ手古末」の9文字が記されているが、上下部ともに

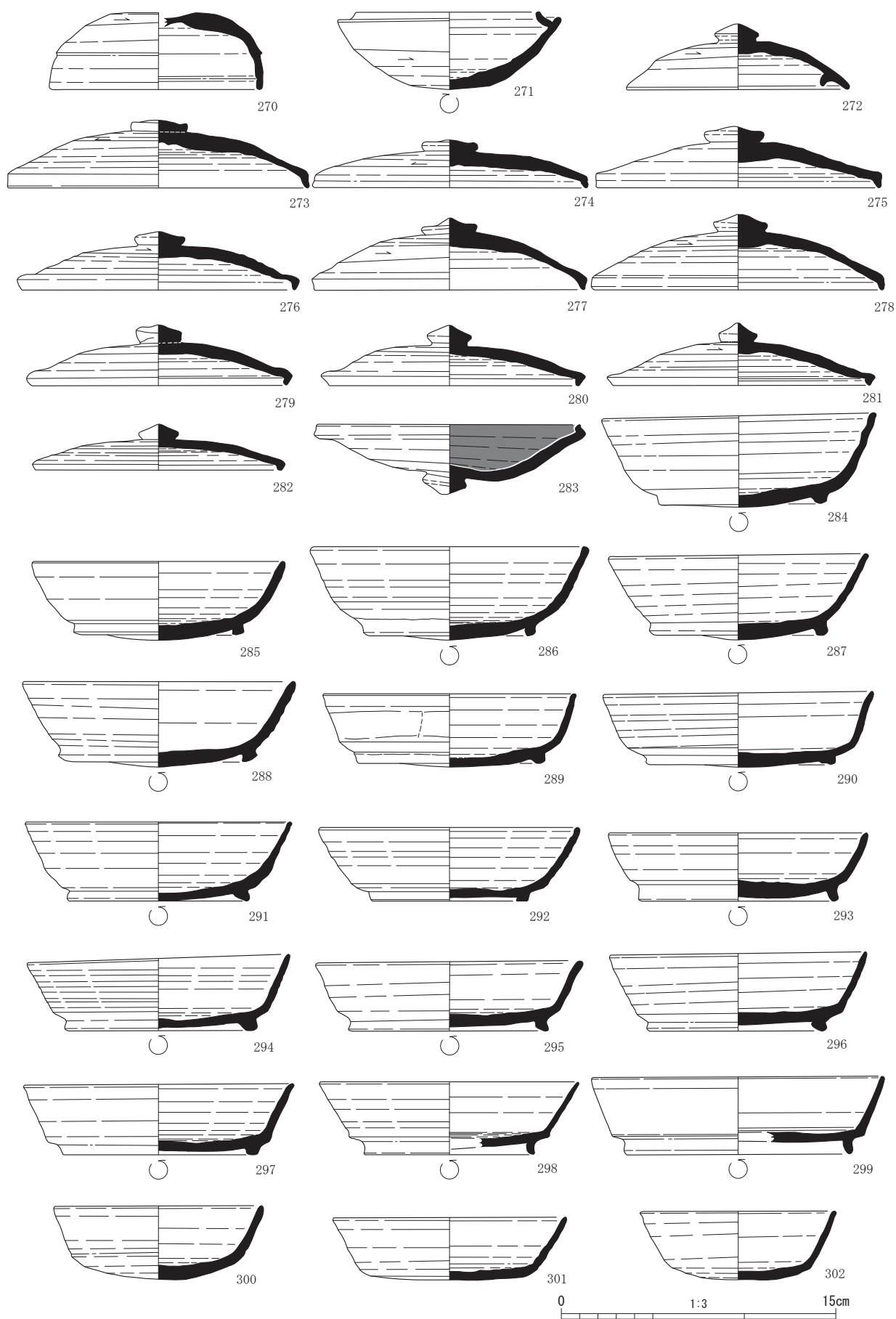


Fig. 148 V層南東部 出土遺物 (2)

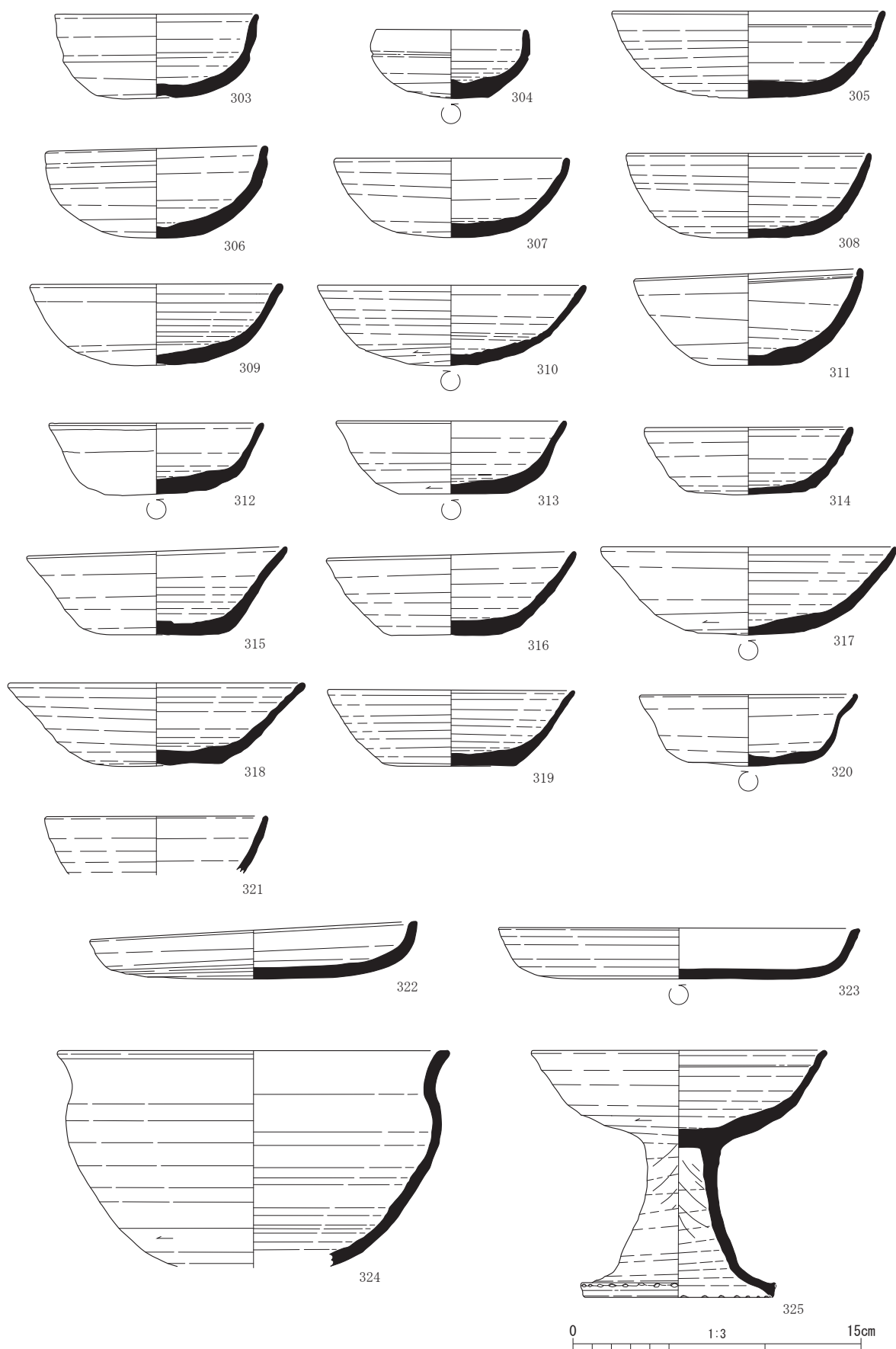


Fig. 149 V層南東部 出土遺物 (3)

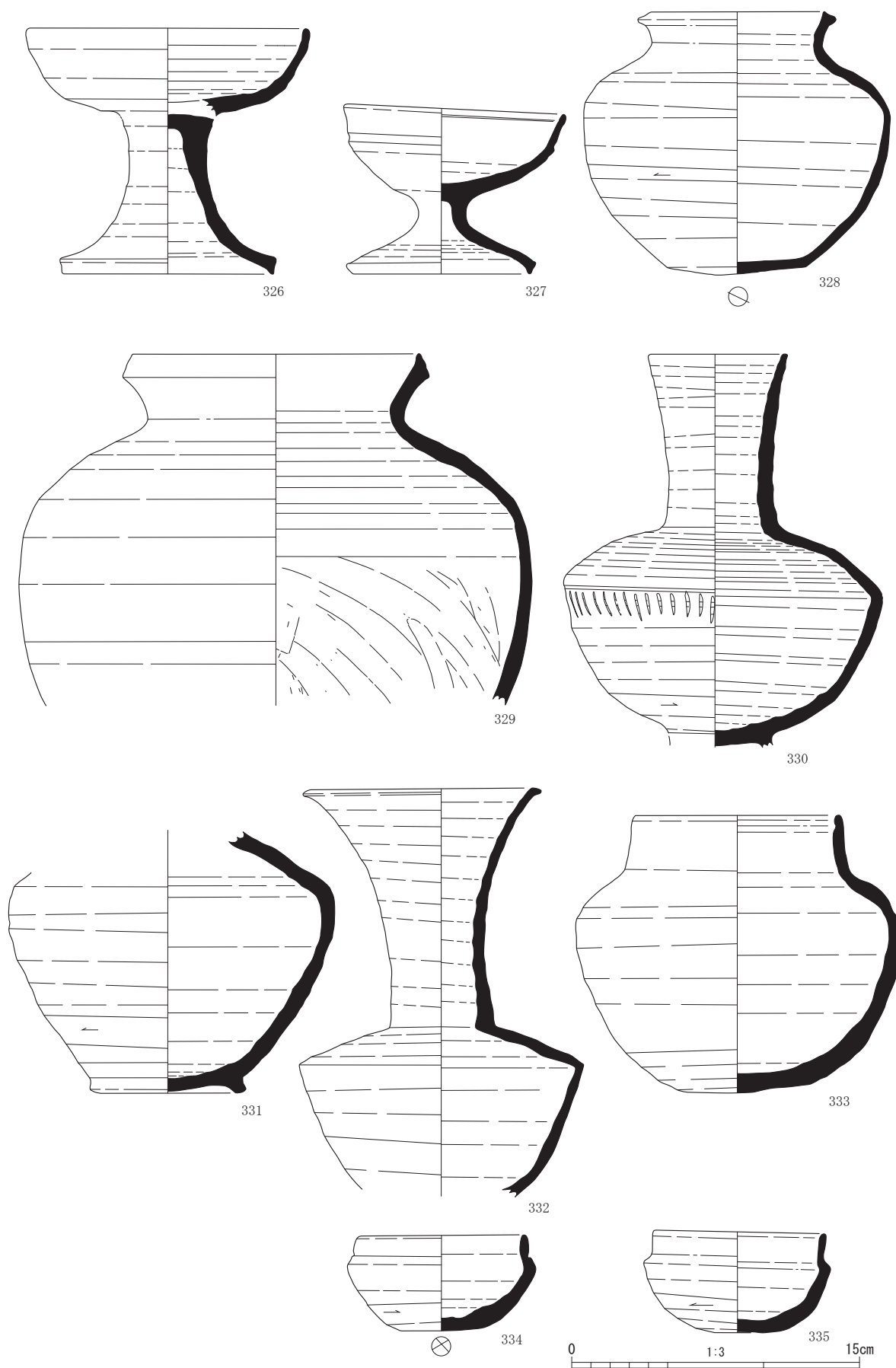


Fig. 150 V層南東部 出土遺物 (4)

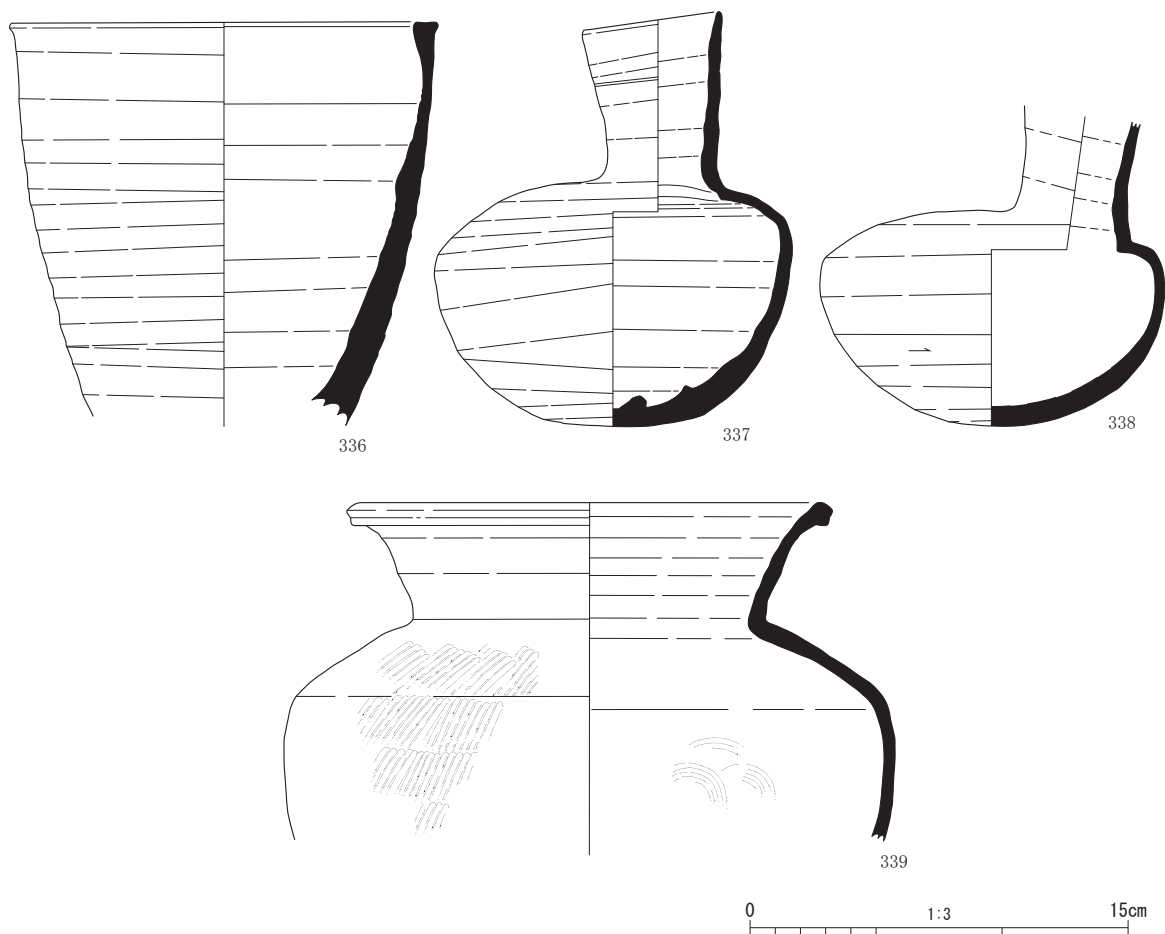


Fig. 151 V層南東部 出土遺物 (5)

欠損しており、全体の文字は不明である。414は、板材に「従輕守若子三川」、「米」と記されているが、他は欠損により判読できない。上下部ともに欠損しており、全体の文字は不明である。415は、上部からやや幅が狭くなっていく形状の板材で、上部中央に「竹田郷道田里」と記されており、下部左側に「戸主」と記されている。

木製品 (Fig. 157 ~ 163) 416 ~ 449はV層南東部より出土した木製品である。北西部に比べ、出土量は少ない。特に祭祀具が少なく、舟形が1点のみ出土している。そのほか、曲物や農具、Y字形木製品、建築部材が出土している。

416は舟形である。下半を欠損しているため形状は不明瞭であるが、上部にV字状の袢りが確認される。417は連歯下駄である。歯が根本まですり減っているため、使用限界を迎え廃棄されたと推定される。418は横槌である。柄の部分が上部より緩やかに細く削り出される。上部に使用による欠損が確認される。419・420は鎌柄である。419は上部が欠損しており、全体の形状は不明であるが柄尻に山形の突起が削り出されていることから鎌柄と考えられる。420は下部が欠損しているが、鎌刃の差し込み孔が確認される。

421・422は木錘である。421は一連の木錘より小型で断面形状が三日月形である。別の用途に使

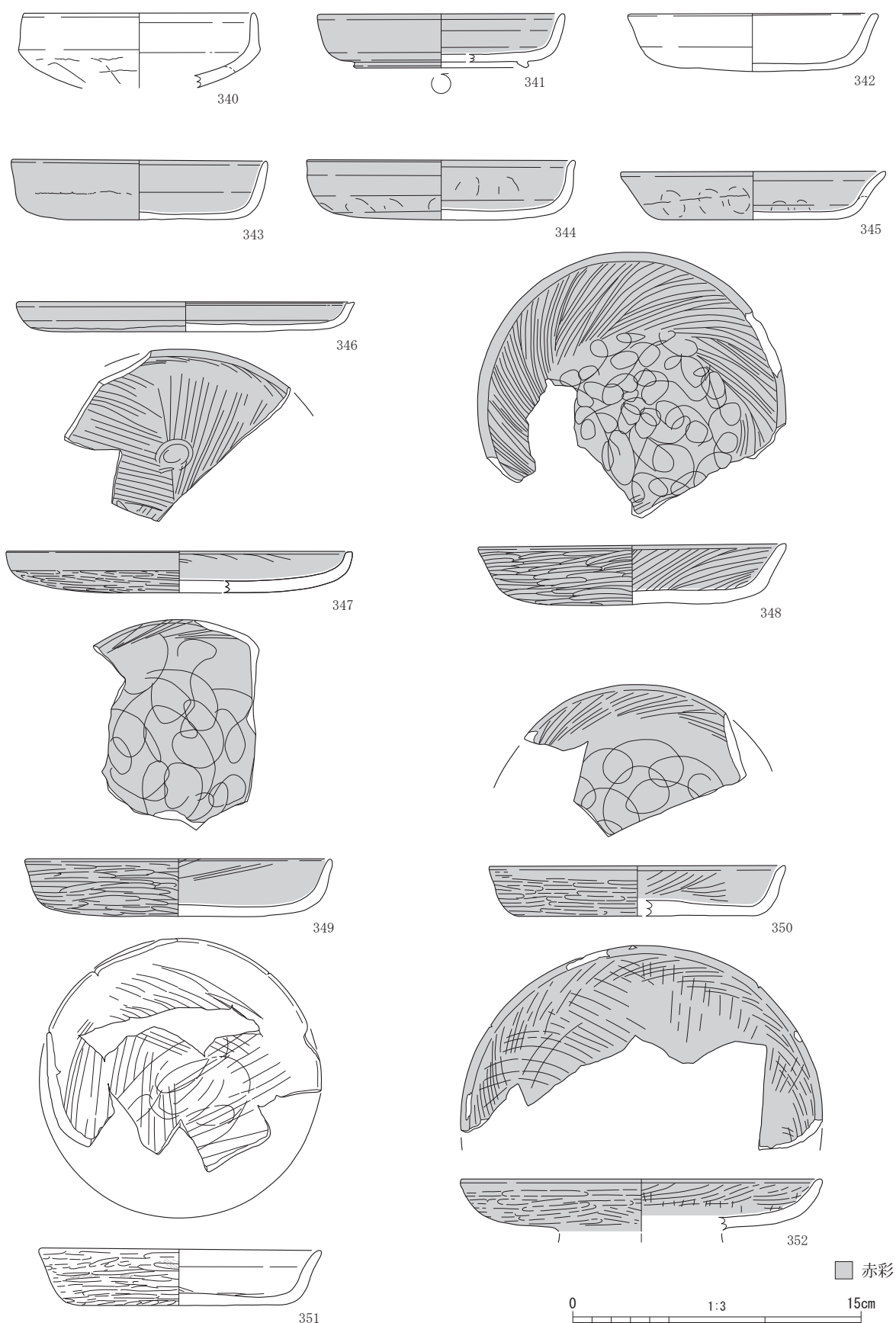


Fig. 152 V層南東部 出土遺物 (6)

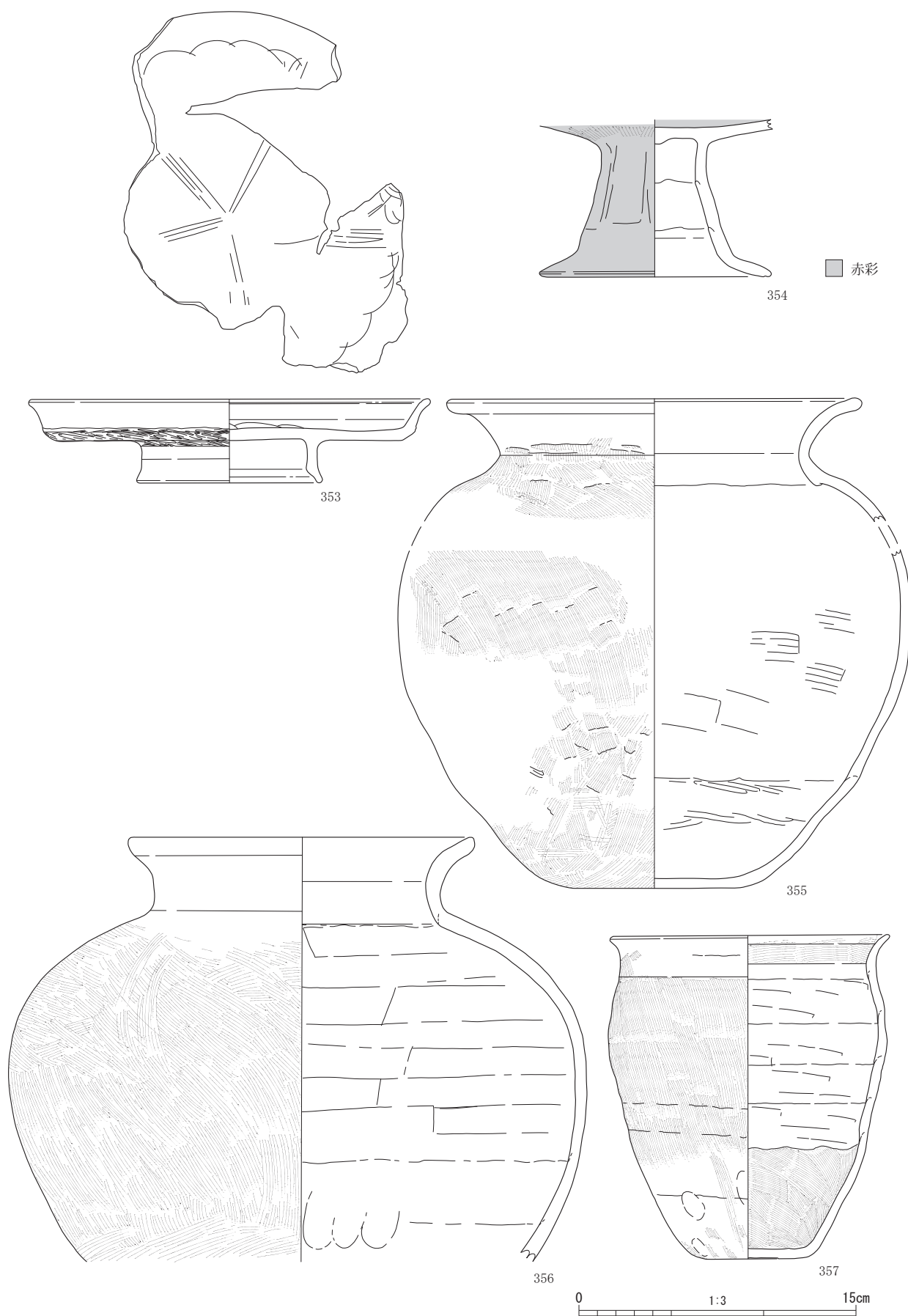


Fig. 153 V層南東部 出土遺物 (7)

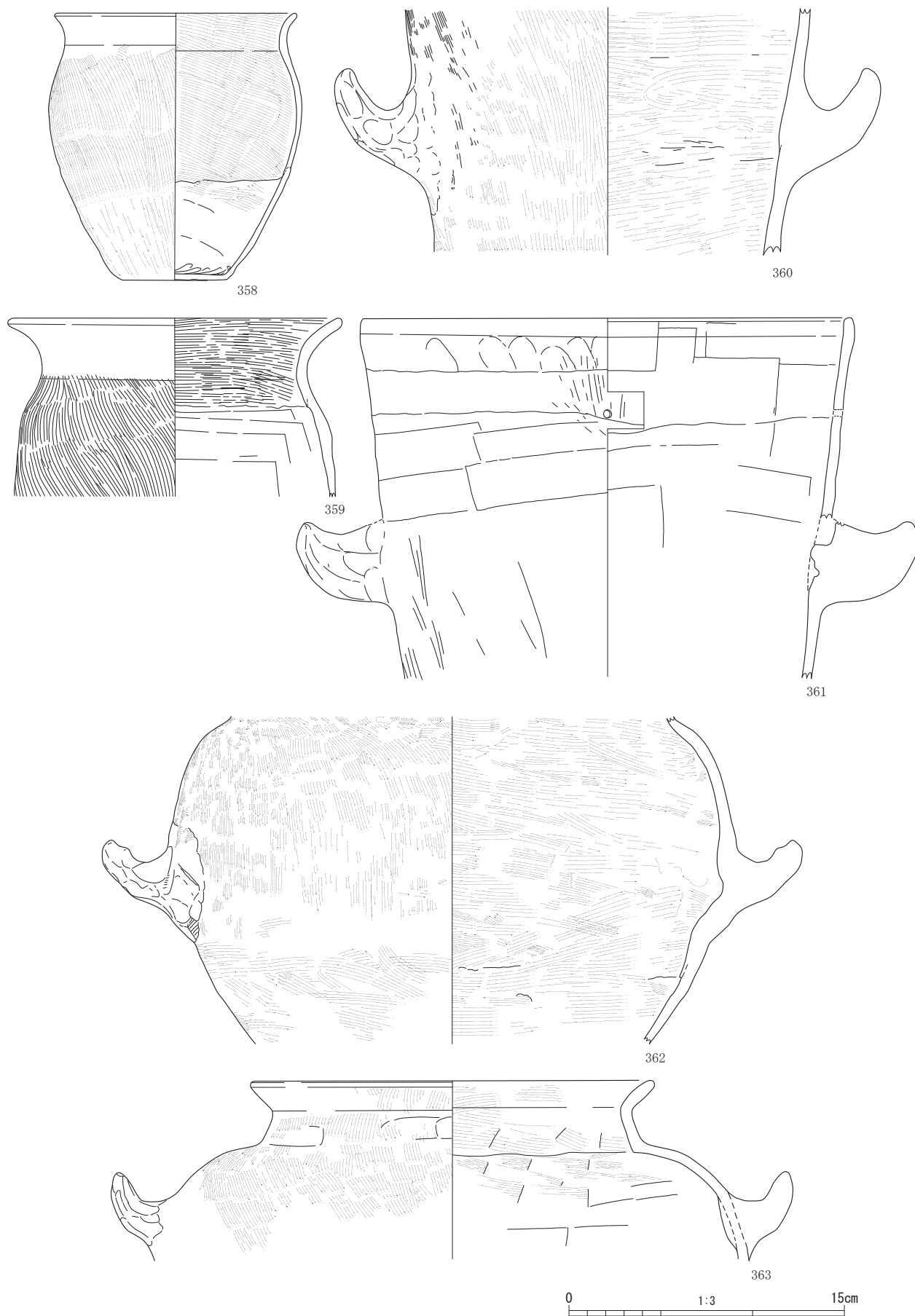


Fig. 154 V層南東部 出土遺物 (8)

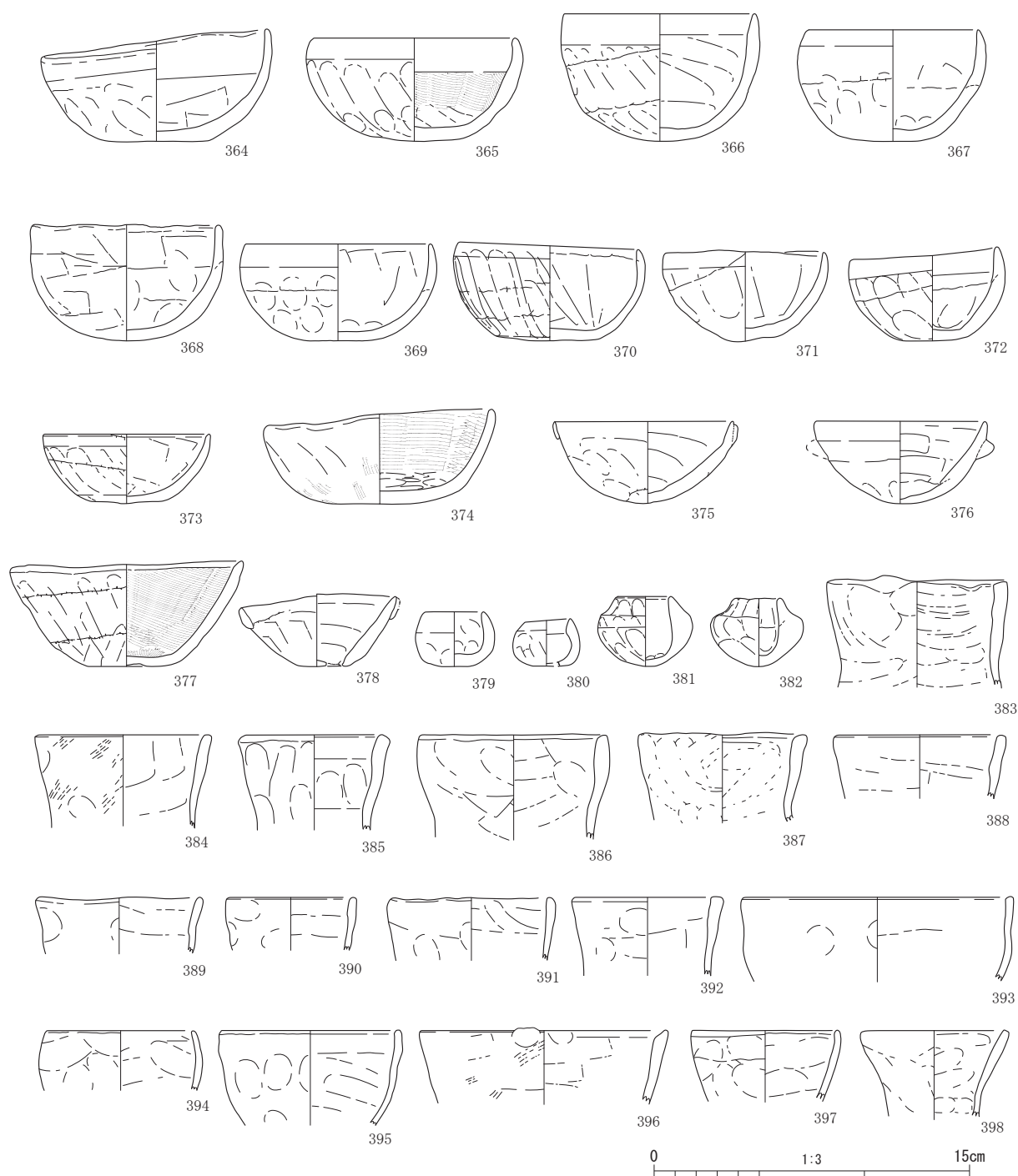


Fig. 155 V層南東部 出土遺物 (9)

用されていた可能性があるが、形状、穿孔箇所が他の木錘と類似するため木錘とした。423・424は農具である。423は馬鍬で4箇所方形の孔が空けられており、うち1箇所は歯が残存している。424は、ナスビ形の鍬である。425・426は用途不明の有孔板の部材である。425は中央に方形の孔が空けられている。426は、上部に方形の孔が空けられており、下部はL字状の挟りが確認される。427は箴杵と考えられる加工材である。等間隔に印が確認され、上部には木釘が残存する。下部は欠損により不明瞭であるが木釘が打ち込まれていたと考えられる孔が確認される。側面に溝が削

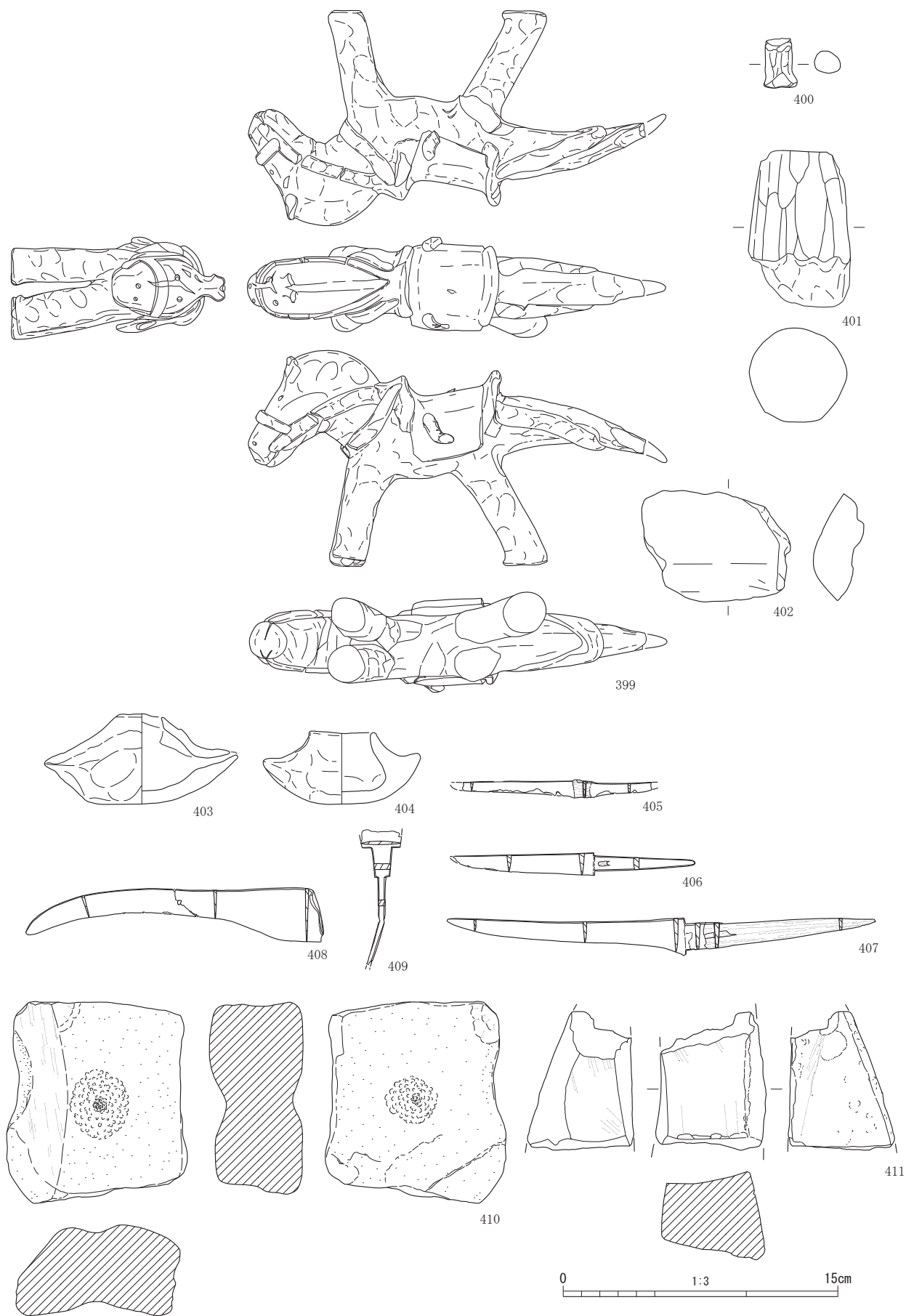


Fig.156 V層南東部 出土遺物 (10)

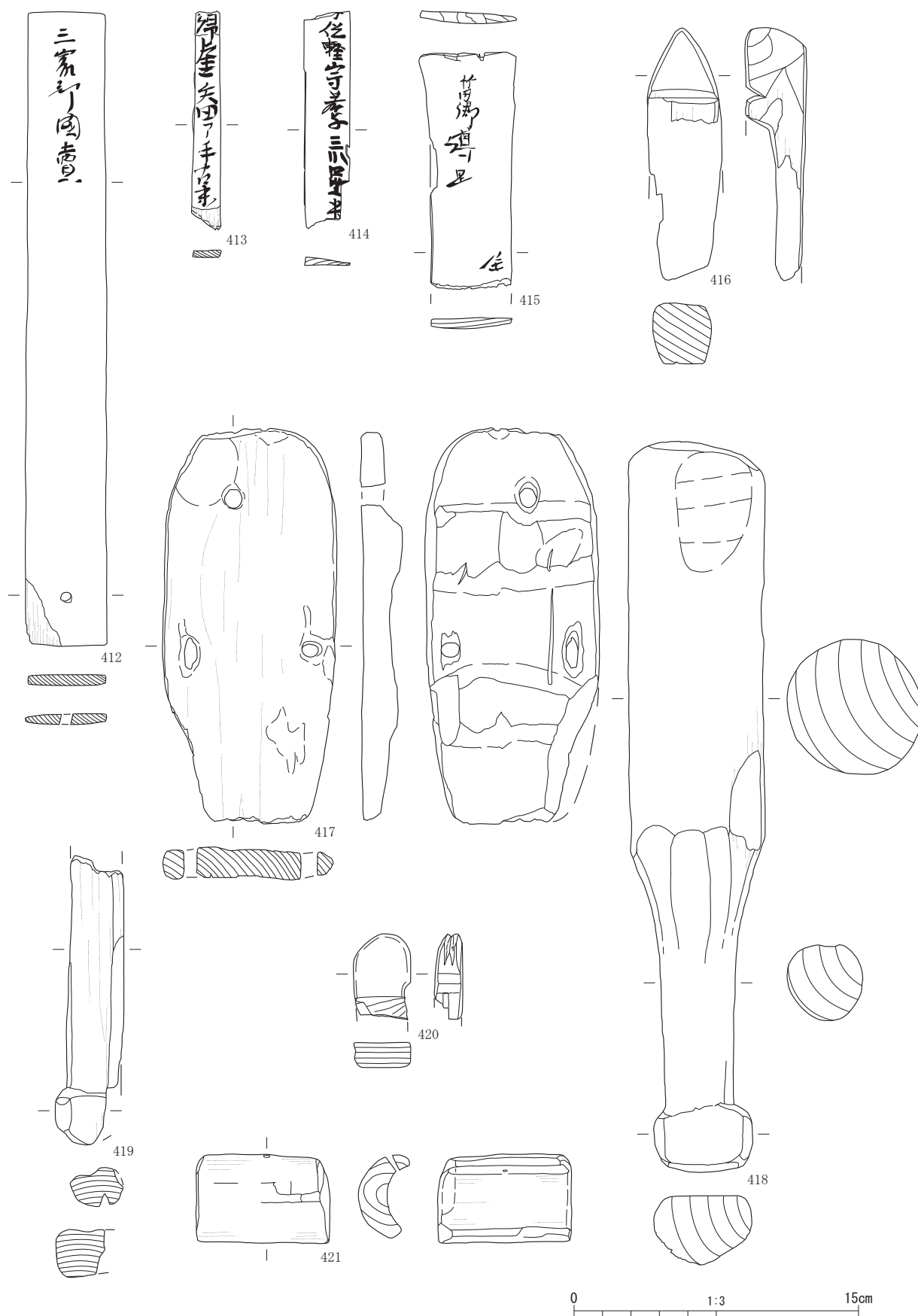


Fig. 157 V層南東部 出土遺物 (11)

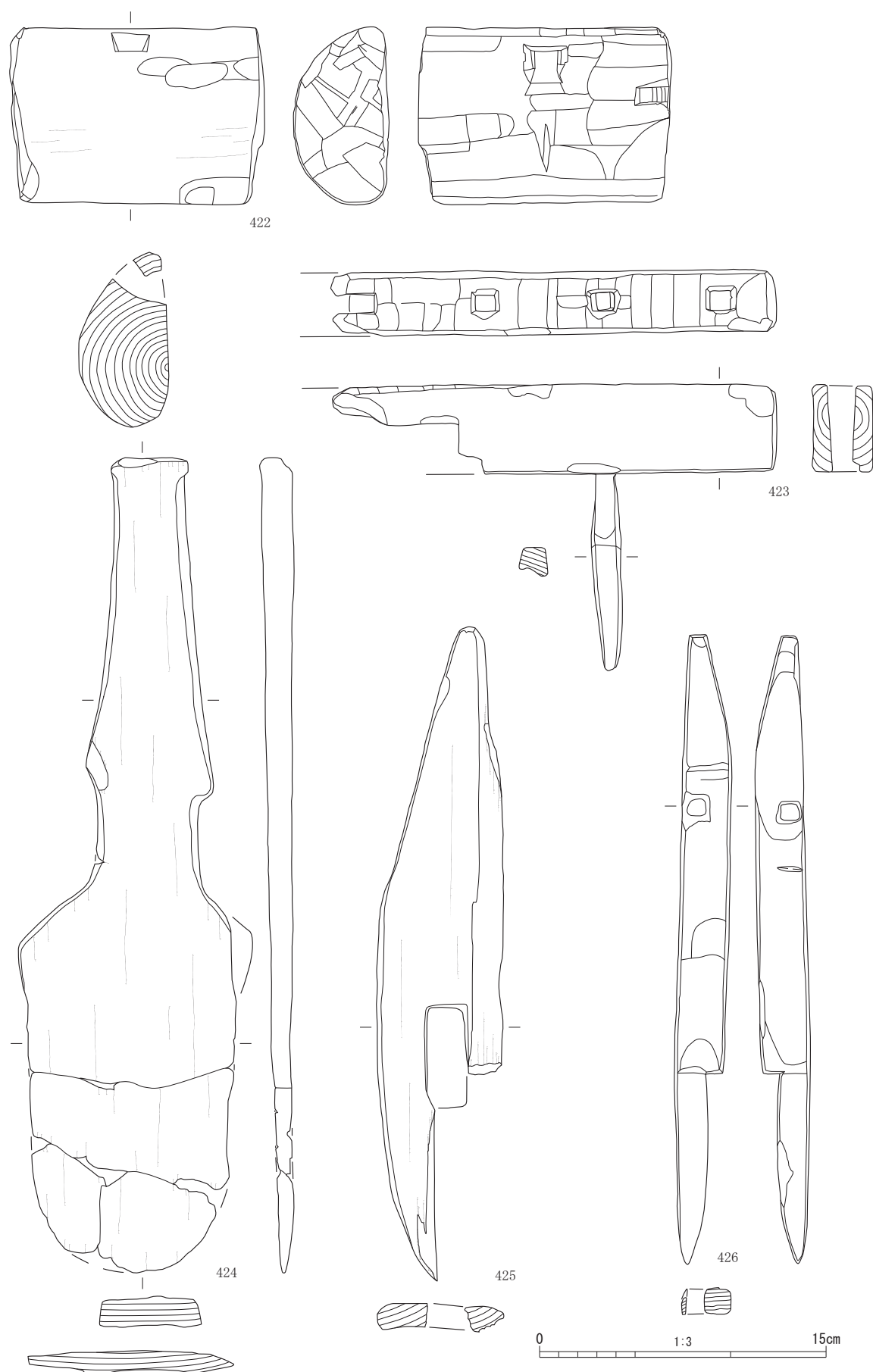


Fig.158 V層南東部 出土遺物 (12)

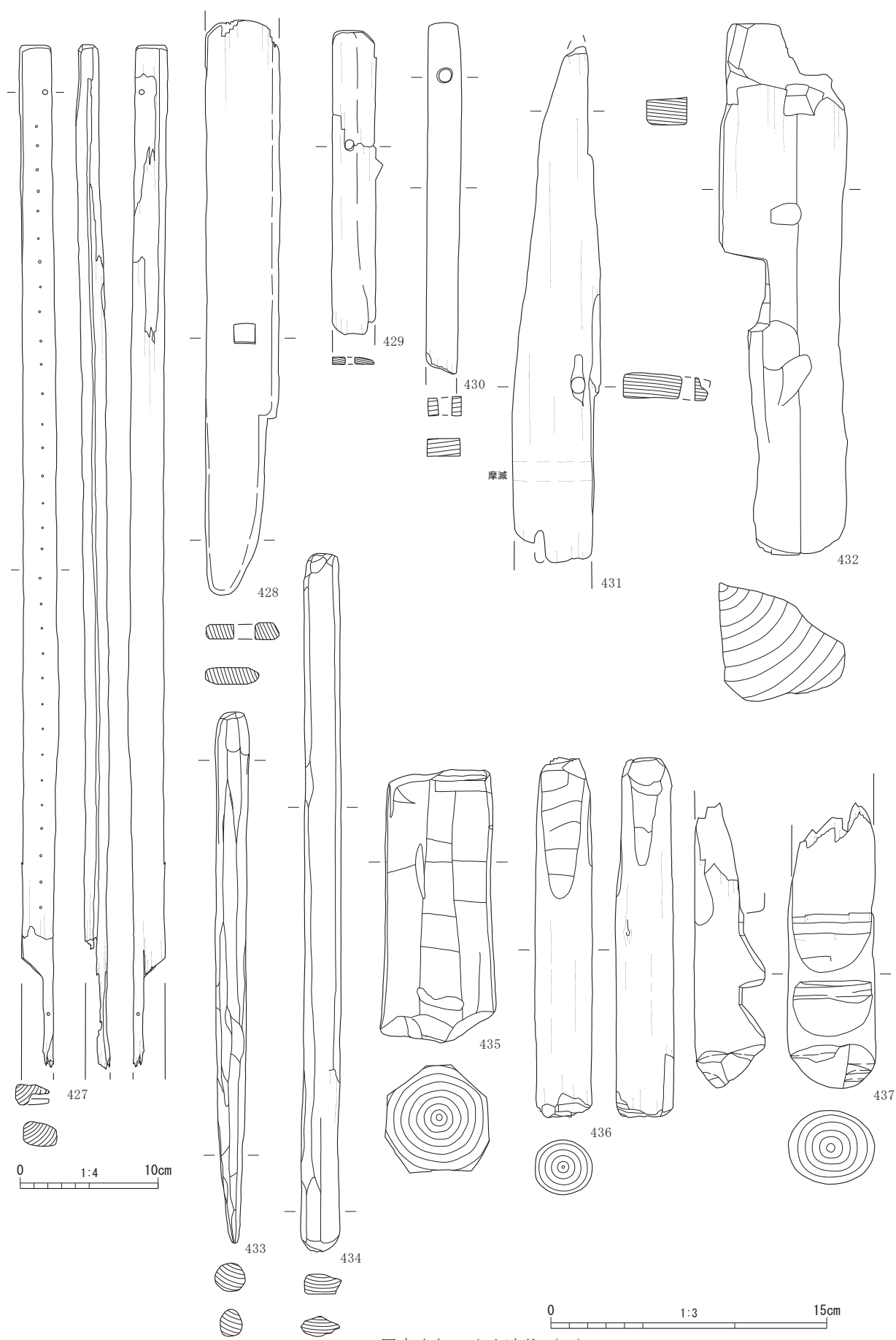


Fig. 159 V層南東部 出土遺物 (13)

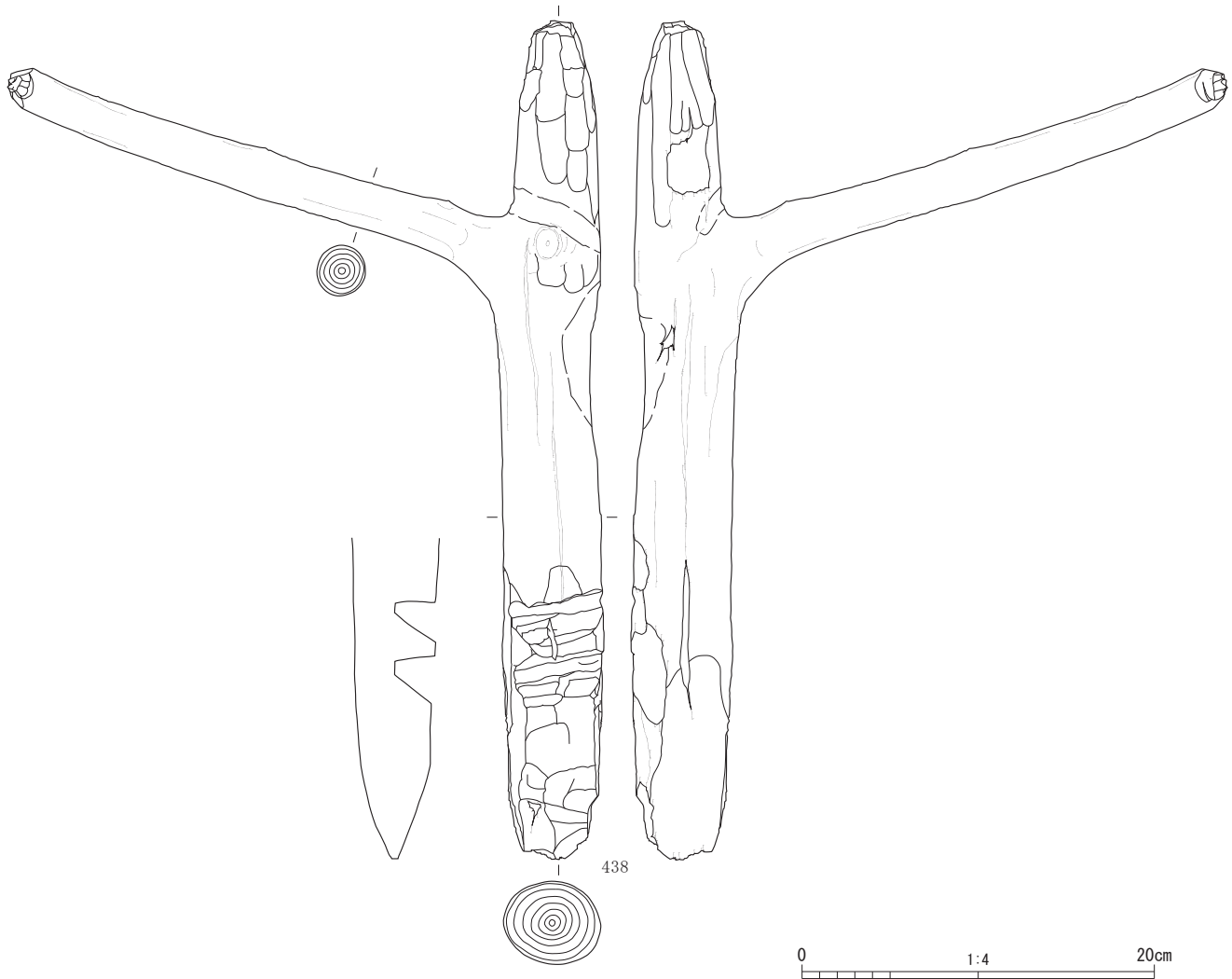


Fig. 160 V層南東部 出土遺物 (14)

り出される。428～431は有孔板材である。428は上部を欠損しており、方形の孔が空けられている。L字状の抉りが確認される。431は下部を欠損しており、円形の孔が空けられている。横方向に擦られた痕跡が確認される。432はミカン割材を用いた部材の一部と考えられる。不明瞭であるが、側面に抉りが確認される。433～436は加工棒である。433は断面形状を円形になるよう削り出されている。下部先端は尖る。435は上面、底面が削り出されており、全周が多角形に削り出されている。437・438はY字形木製品である。437は下部のみ残存しており2箇所抉りが確認される。438はほぼ完形で出土しており、幹部上部に帯状の、枝部逆側に擦痕が確認される。枝部先端の削り出しが確認される。下部は2箇所の抉りのほか、方形に削り出されており先端が正面、背面より削り出され尖る。

439～446・449は曲物である。439～445は曲物の底板である。439は2箇所に樹皮が残存しており、炭化範囲も確認される。443は側面に木釘が打ち込まれている。445は多くを欠損しているが楕円形の底板である。446・449は曲物の側板である。449は大型の板材で上下端部がやや薄く加工がな

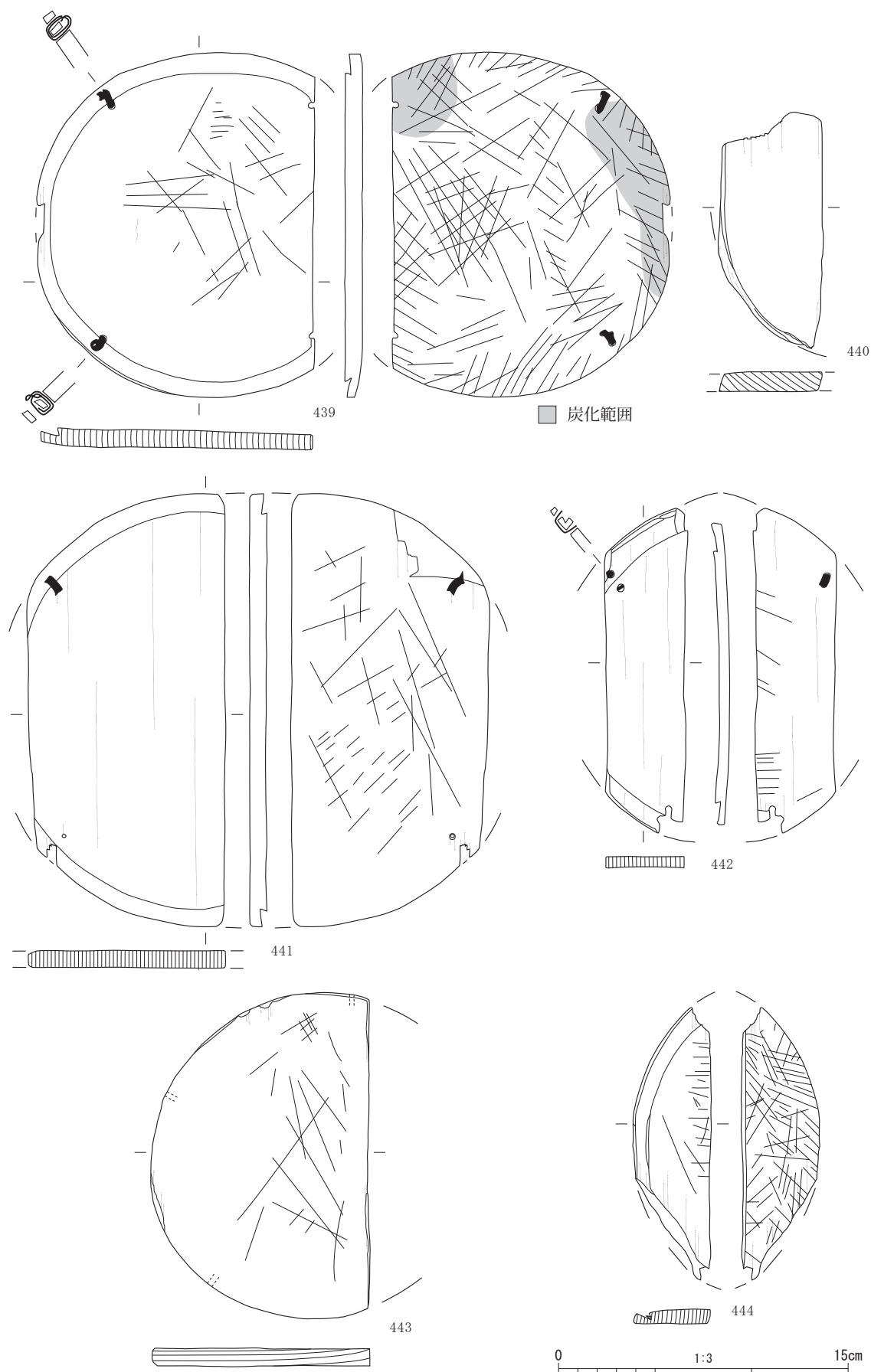


Fig. 161 V層南東部 出土遺物 (15)

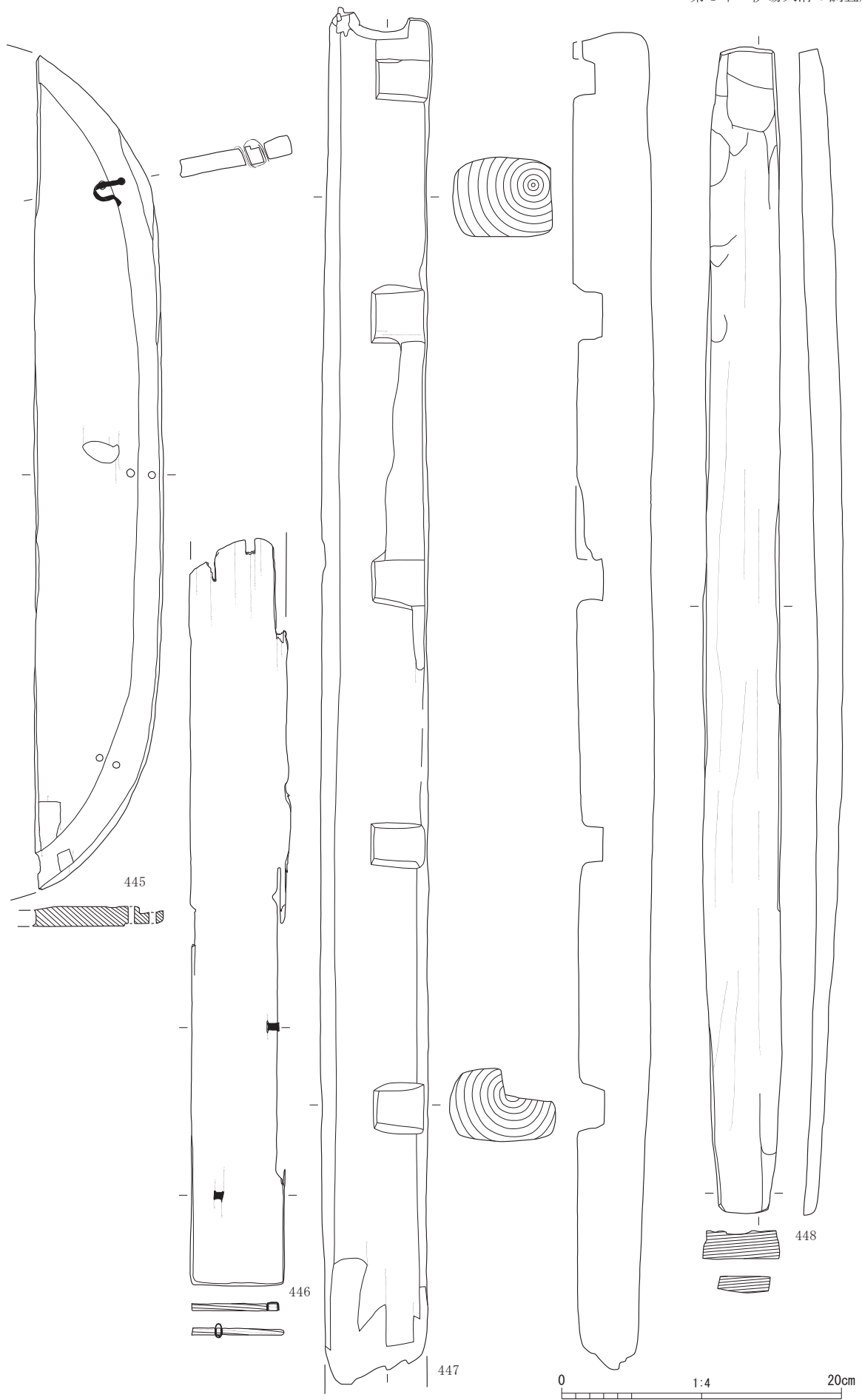


Fig. 162 V層南東部 出土遺物 (16)

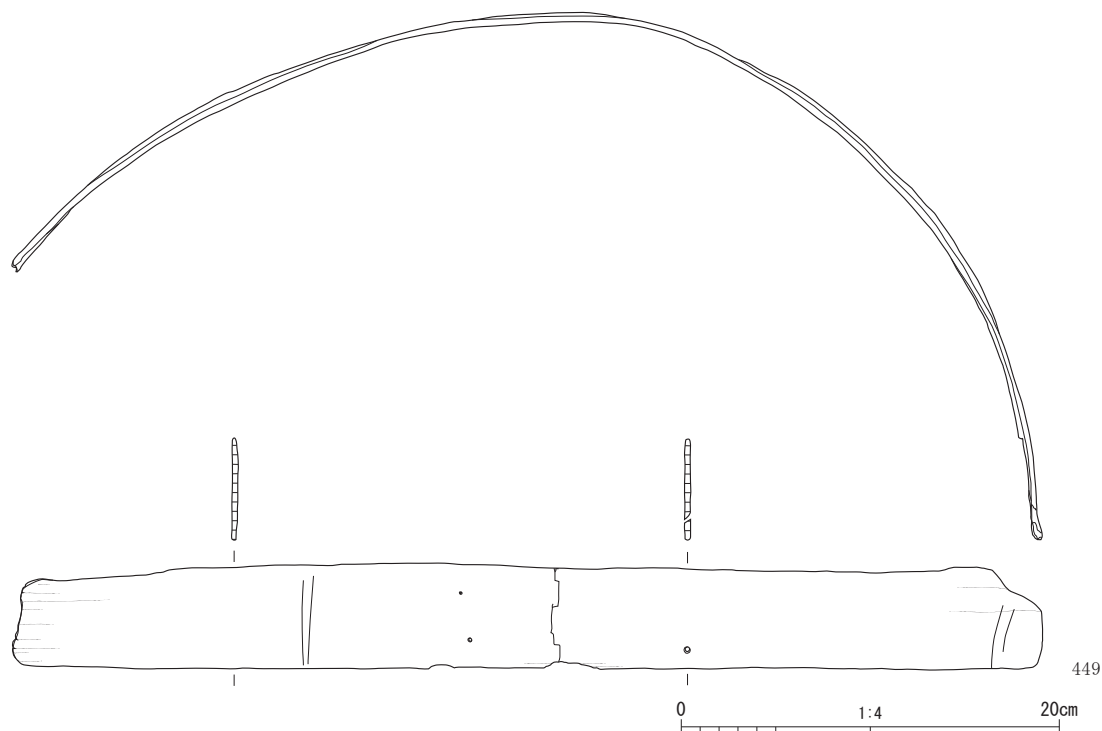


Fig. 163 V層南東部 出土遺物 (17)

される。447 は建築部材と考えられる大型の部材で、5 箇所等に等間隔で方形の凹みが削り出されている。

(8) 小結

V層は下層のⅦ層の規模と比較すると、溝の幅や深さが縮小する。これはⅦ層形成時の豊富な水量が減少し、激しい水流が収束した結果によるものと考えられる。また、遺物の出土状況は、調査区北西部で溝の両岸の広範囲に分布するが、調査区南東部は南岸に集中し北岸及び底面では調査区北西側と比較すると少ない。墨書土器は、大溝北西部に1点、大溝南東部にSS03出土を合わせると8点出土しており、大溝南東部に多数出土する傾向がみられる。人名や役職名と考えられる文字が記されている墨書土器がほとんどであった。木製祭祀具は大溝南東では1点のみの出土であるが、大溝北西部では多数出土しており、伊場大溝の上流部と下流部では様相が異なる。大溝全体の出土量を比較すると、南東部が多い傾向がみられる。Ⅶ層の集落的な遺物の様相と異なり、木簡や墨書土器などの文字資料、斎串や人形、舟形などの祭祀遺物が出土し、官衙的な性格の遺物が増加する傾向がみられる。共伴する遺物が周囲に出土していないが、年号とみられる文字、「天平十六」(774年)が記されている木簡が出土しており、V層堆積年代と考えられる時期(8世紀前葉～8世紀中葉)と一致する。

本調査でも、官衙的な性格の遺物が多数出土しているため、伊場大溝南岸側の周辺に敷智郡家中枢施設が存在していたと推定される。また、墨書土器、木製祭祀具の出土量が伊場大溝北西部・南東部では異なり、伊場大溝の上流域、下流域では様相がことなる区画が存在していたと指摘できる。

6 伊場大溝Ⅳ層の調査

(1) 概要

Ⅳ層は、奈良時代後半～平安時代前半（8世紀後葉～10世紀前葉）に堆積した層である。下層であるⅤ層の堆積土と比較すると植物遺体が少なく、やや粘性の強い堆積土である。大溝内での埋没が進み、Ⅴ層と比較すると溝幅が狭くなり、深度も浅くなる。堆積状況がⅤ層と類似するため、Ⅴ層と同じく水流が停滞していた環境であったと考えられる。ただし、植物遺体がⅤ層より減少するため、植生についてはⅤ層とⅣ層では環境の変化が見受けられる。

土器集積遺構（SX01）1箇所、貝塚5箇所、これらは大溝北西側の南岸において検出している。大溝北西部南岸で検出されるSX01では、大量の墨書土器を含む灰釉陶器などの遺物が出土しており、大規模な遺物の投棄が想定される。また、木簡などの文字資料もSX01から多数出土している。SX01内にも貝塚は検出されており、貝塚内にも多数の遺物が含まれている。

(2) 伊場大溝の形状

Ⅳ層の大溝は、上層のⅢ層、下層のⅤ層の大溝と幅や流路の形状はほぼ変わっていない。川床は、上流では南寄りに位置し、下流へ向かうに従い川幅の中央に移動していく。深さは標高-0.73～-0.42 mで、下流に向かって深さを増していく。川岸から川底にかけての傾斜は、北西側は南岸が急で北岸は緩やかになっている。中央部近辺で傾斜が逆転し、南岸が緩やかになり北岸が急になる。大溝内の水流が停滞していたためⅤ層と比較して植物遺体は減少するが、褐灰色粘質系シルト土が堆積していったと考えられる。

(3) 遺物の出土状態

遺物の出土傾向 Ⅳ層では本調査区における伊場大溝より出土した遺物で全体の約半数を占める。遺物の出土状態は、Ⅴ層と同様に大溝南岸に集中する傾向がみられる。特に北西部南岸に位置するSX01からの出土量がⅣ層全体の出土量の圧倒的多数を占める。特に墨書土器の出土量が顕著である。このような遺物出土の傾向から南岸の周囲に数智郡家に関連する施設が存在していたことがうかがえる。

土器 Ⅳ層では、大溝北西部に集中して出土している。前述したSX01より多量の土器が出土しており、特に、灰釉陶器、墨書土器が多数出土している。北岸では土器の出土は散在的である。大溝の南東部では北西部と比較して全体的な出土量は少なく、南岸寄りに出土する傾向がみられる。このような傾向から大溝南岸、特にSX01を中心とした墨書土器など官衙的性格の強い土器が集中的に投棄していたことが想定される。

木製品 大溝のほぼ全域から出土している。ただし、多数の木製品はSX01から出土している傾向がうかがえる。出土遺物は、斎串や舟形などの祭祀関連の遺物や鍬、鎌柄など農具のほか、櫛、曲物などが出土している。特に曲物の底板が多数出土しており、その中で「足」の刻書が記されている底板（1082）が確認される。

木簡 本調査ではIV層から木簡4点のほか、曲物の底板に刻書が記されている文字資料1点が出土している。そのうち、SX01から4点(1079・1080・1081・1082)出土しており、残りの1点(1752)もSX01に近接した位置で出土している。うち、1080は紀年銘入り木簡で「延喜十三年」の文字が記されている。延喜十三年(913年)はIV層の堆積した年代と一致する。

その他の遺物 金属製品では銅製の印鑑(485)が出土しており「子」が反転して鋳出されている。また、鉄製の鎌刃が出土しているほか、刀子が木製の柄とともに良好な形で出土している。石製品では、砥石のほか紡錘車が出土している。

(4) 遺物集積

SX01 (Fig. 166) 伊場大溝北西部南岸で検出した遺物集積遺構である。北西調査区外へ範囲が及ぶため、全体の把握は出来ない。確認されている範囲で北西・南東方向に34m、北東・南西方向に約6～9mの帯状に遺物が出土している。SX01の範囲内に貝塚(SS04、SS05、SS06)が、木製構造物であるSX02が確認されている。大溝南岸に遺物が集中することから南岸より投棄され累積していったと考えられる。このことを踏まえると、北西部の調査区外に延びる大溝内において多数の遺物が投棄されているものと推定されるが、本調査区北西に隣接する梶子21次調査においてIV層は一部のみの調査にとどまっており全容は把握できない。

本調査で出土した墨書土器のほとんどがSX01より出土している。金属製品では銅印、木簡などの文字資料が出土しており、敷智郡家に関連する祭祀行為やそれに関連した遺物の投棄場所であった可能性がある。なお、SX01では、位置ごとに遺物の密度に差異がみられるか検討するため、BEグリッドを西部、BFグリッドを中央部、BGグリッドを東部の3箇所に分割して遺物を掲載している。

出土遺物の概要 SX01では大量の遺物が出土しており、北西寄りでは遺物の密度が高く、南東に向かうに連れ低くなる傾向である。出土した遺物は、須恵器や灰釉陶器、土師器、土製品、金属製品、木製品、木簡など多岐にわたる。その中でも墨書土器が多数出土している。また、獣足皿や獣足壺や銅印などの遺物が出土している。8世紀後葉～10世紀前葉の土器が出土しており、時期幅は広い。

① SX01 西部

墨書土器 (Fig. 167～193) 須恵器、灰釉陶器、土師器ごとに分け、文字でまとめて遺物を掲載している。ほとんどが1文字書きされた墨書土器であり、「得」、「足」が多数を占める。1文字書きの墨書土器より少数であるが、「得上」、「朋万」などの2文字書きの墨書土器も多数出土している。

1・2は墨書が記されている須恵器である。1は有台皿で外面底部に「太」が記されている。2は有台碗で外面体部に「足」が記されている。

3～277は墨書が記されている灰釉陶器を示す。12～47は「得」の墨書が記されている。12～29は碗で体部に正位で「得」が記されている。30は碗の内面に「得」が記されている。31は底部、及び体部に「得」が記されている。32は体部に「得」「大」の2文字が記されている。33は底部に「得」が記されているが、体部の墨書は判読できない。35は無台碗の体部に「得」が記されている。43・47は「得」が逆位に記されていると考えられる。48～54・60・61は碗の体部に「得上」が記

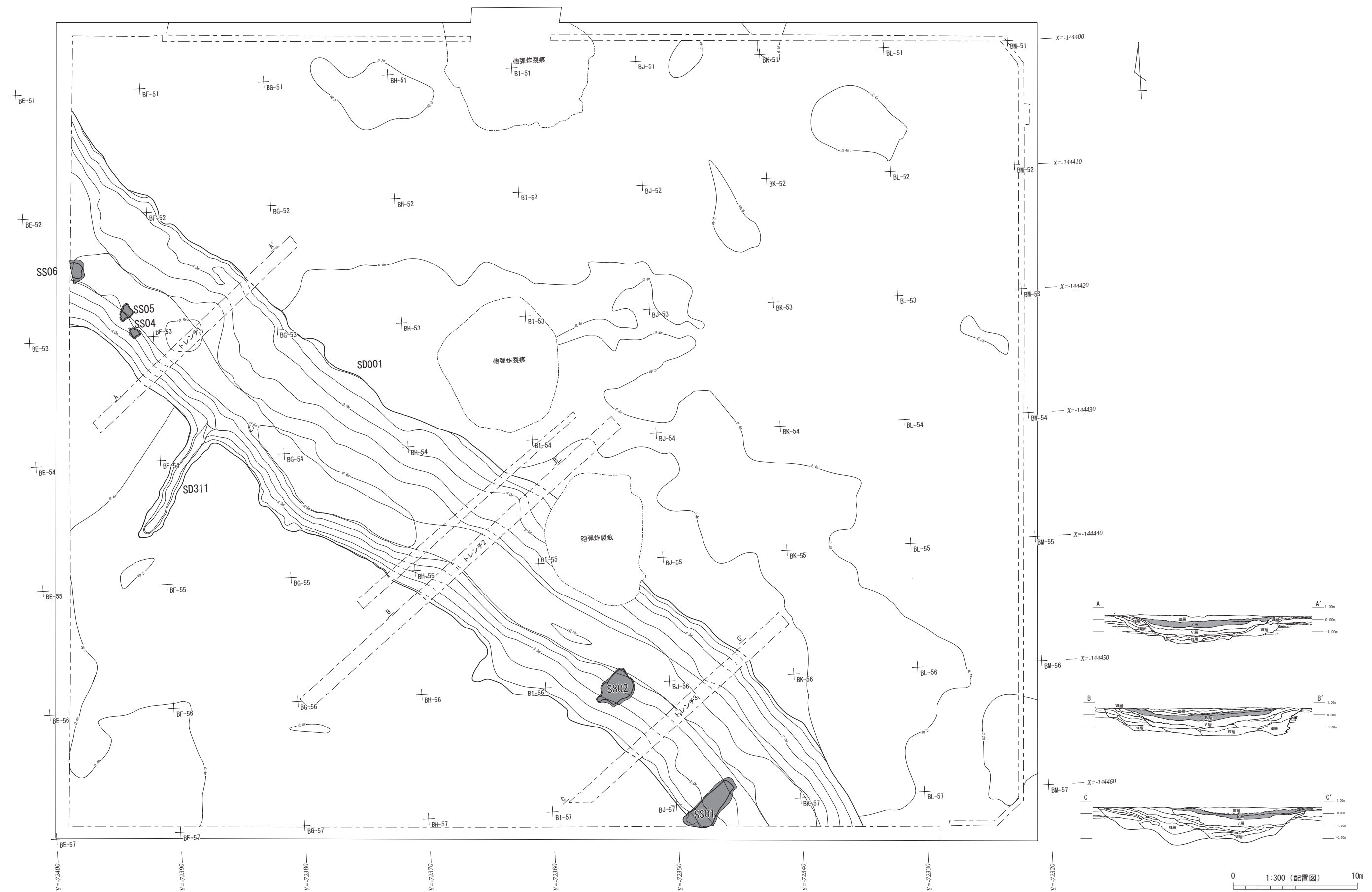


Fig. 164 D区 伊場大溝IV層

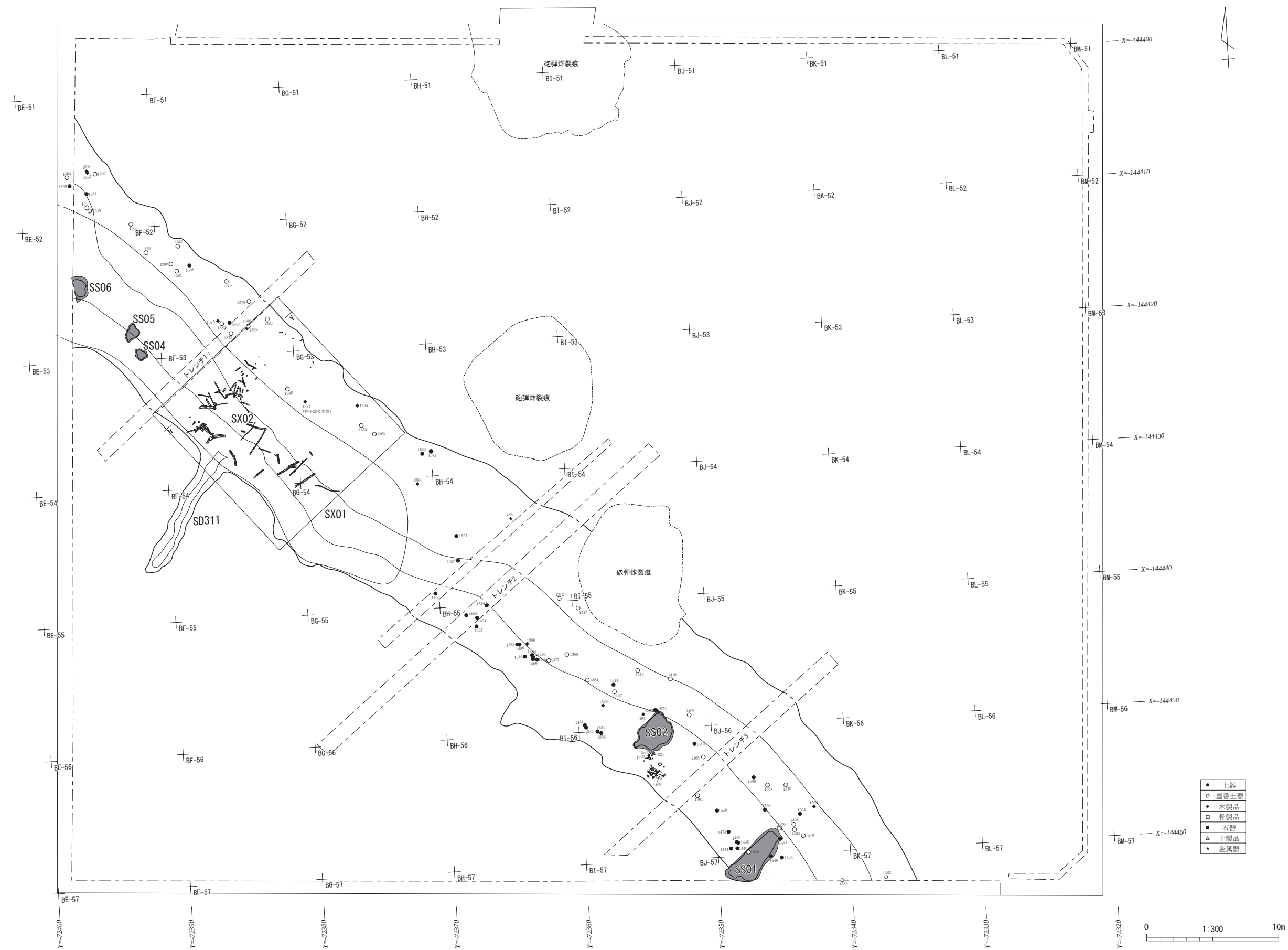


Fig. 165 D区 IV層における遺物出土位置



Fig. 166 SX01 出土位置図

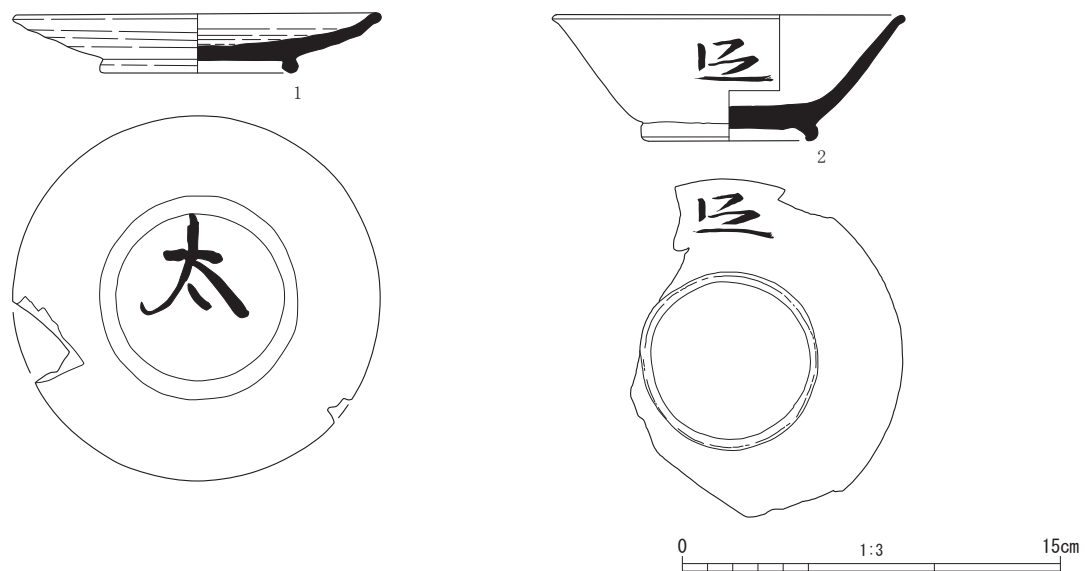


Fig. 167 SX01 西部 出土遺物 (1)

されている。55～59は「得上」と考えられる墨書が記されている。

63～124は「足」の墨書が記されている。63～100は体部に正位で「足」が記されている。66・70は「足」が記されているが、ほかの文字と比較して筆跡が特徴的である。101～103は体部に逆位で「足」が記されている。103は底部全面及び、体部の一部に墨痕が確認される。104・105は「足」が横位に記されている。106～117は碗の底部に、118～121は皿の底部に「足」が記されている。122～124は「足」のほか別の文字が記されている墨書土器を示す。122は体部に「足」、「万」が、底部に「万」の3文字が記されている。123は欠損により文字の判読は出来ない。124は「三」が記されている。125～132は欠損により不明瞭であるが「足」と記されている可能性がある。

133～138は碗の体部に「朋万」が記されている。133～136は正位で、137・138は逆位で記されており、138は底部にも「朋万」が記されている。139～141は碗に「四万」が記されている。139は体部に正位で1箇所、140は正位で2箇所確認される。141は体部は明瞭でないが、底部に「四万」が記されている。142・143は碗の体部に「五万」が記されている。144は無台碗の体部に「六万」が記されている。145は体部及び、底部に「加万」が記されている。146・147は欠損により判読はできないが2文字目の「万」が確認される。

148～160は碗に「牟」が記されている。154・155は底部に、156～159は底部のほか、体部にも「牟」が記されている。160は底部の文字は判読できない。161は無台碗に「牟」と考えられる文字が記されている。

162は底部に「和」が記されているが、体部の文字は欠損により判読できない。163もまた欠損により判読は難しいが「和」または「利」の可能性がある。164～168は碗に「仁」が記されている。167・168は内面にも記されている。169～173は碗の体部に「有」が記されている。169は正位で、170～173は逆位で確認される。174・175は碗の底部に「平」が記されている。175は体部に欠損により不明瞭であるが「得」と考えられる文字が記されている。176は碗で、施釉部の墨が消えており不明瞭であるが「平」と推定されるが断定はできない。177・178は碗の体部に「加」が記さ

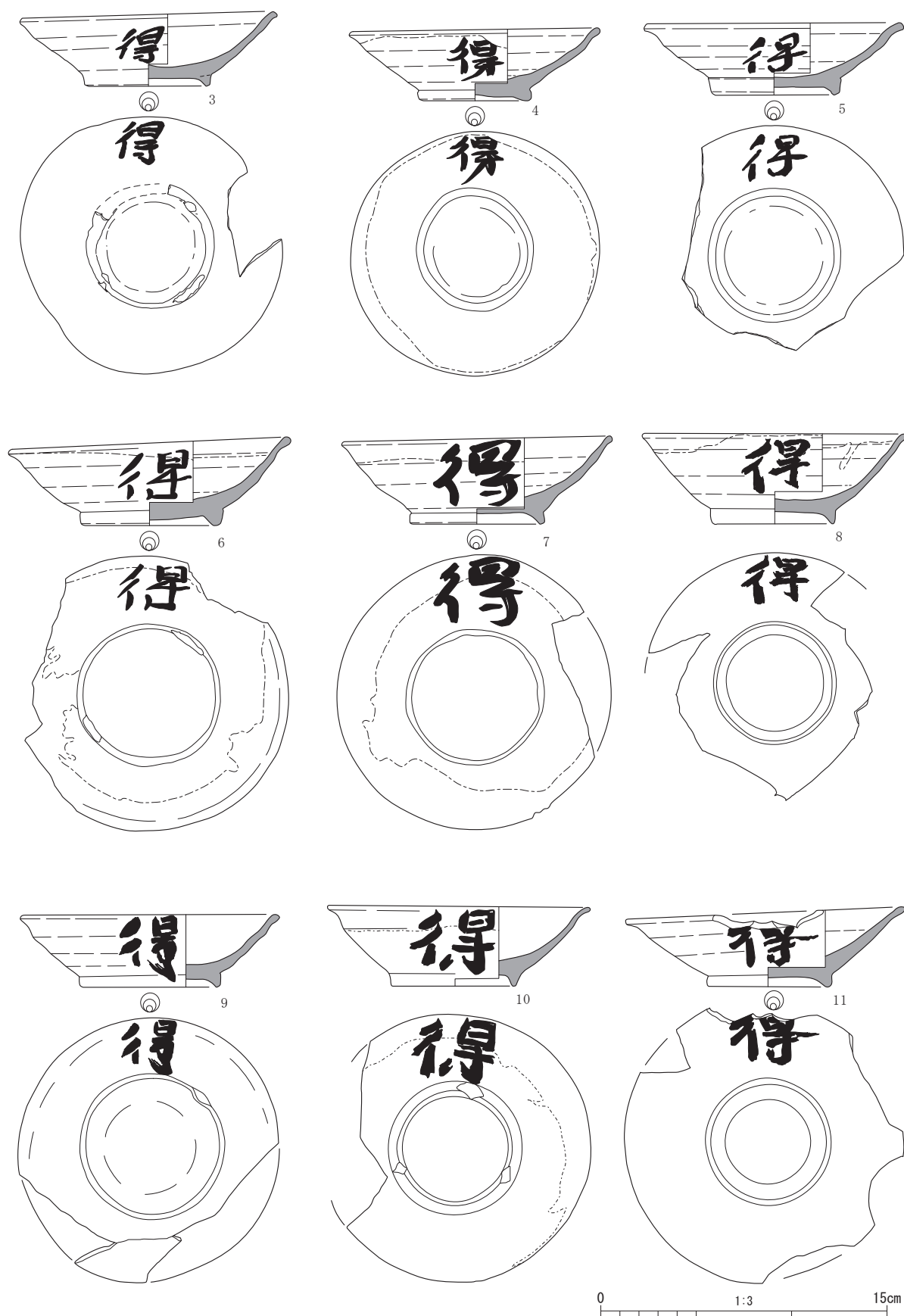


Fig. 168 SX01 西部 出土遺物 (2)

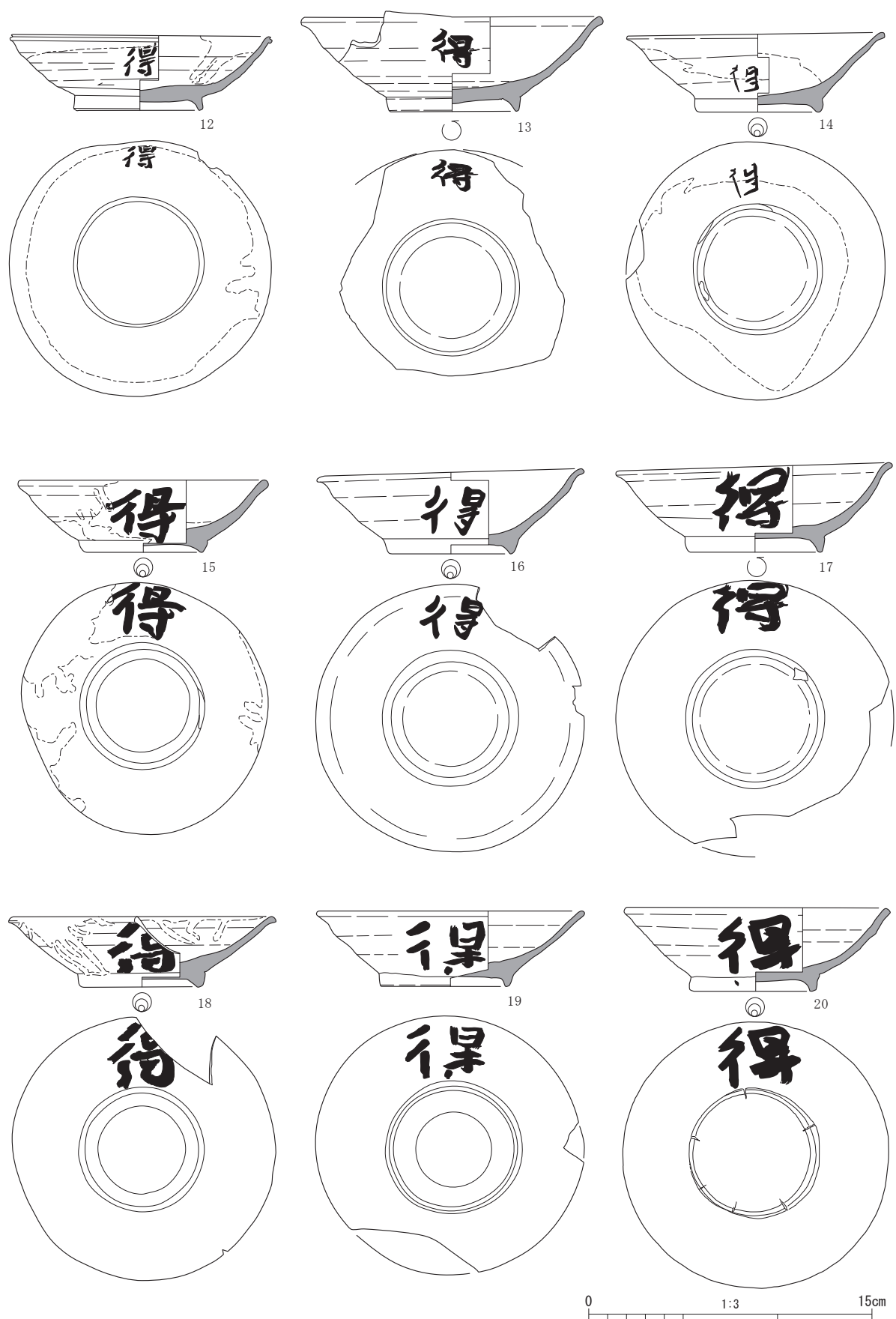


Fig.169 SX01 西部 出土遺物 (3)

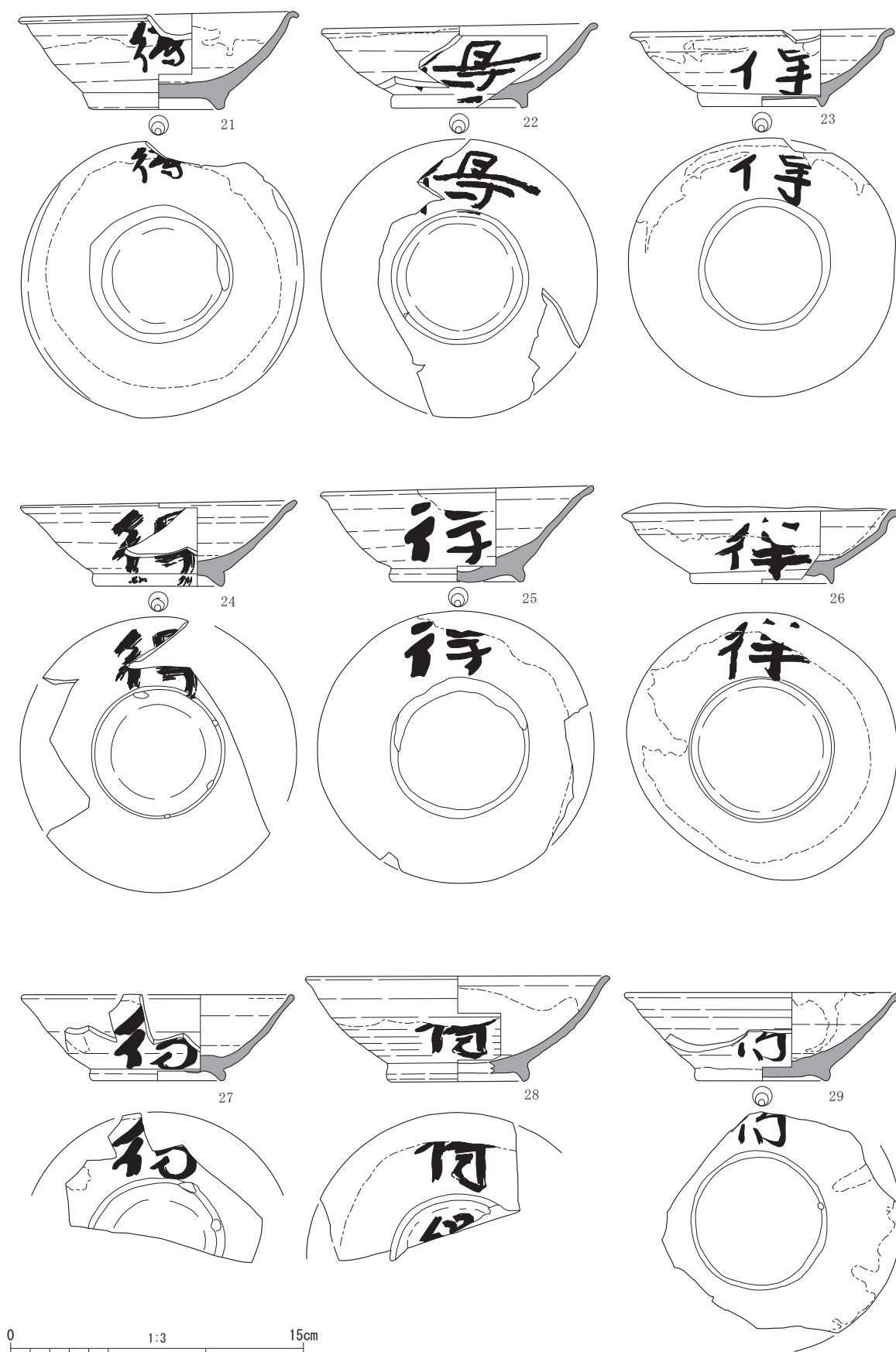


Fig.170 SX01 西部 出土遺物 (4)

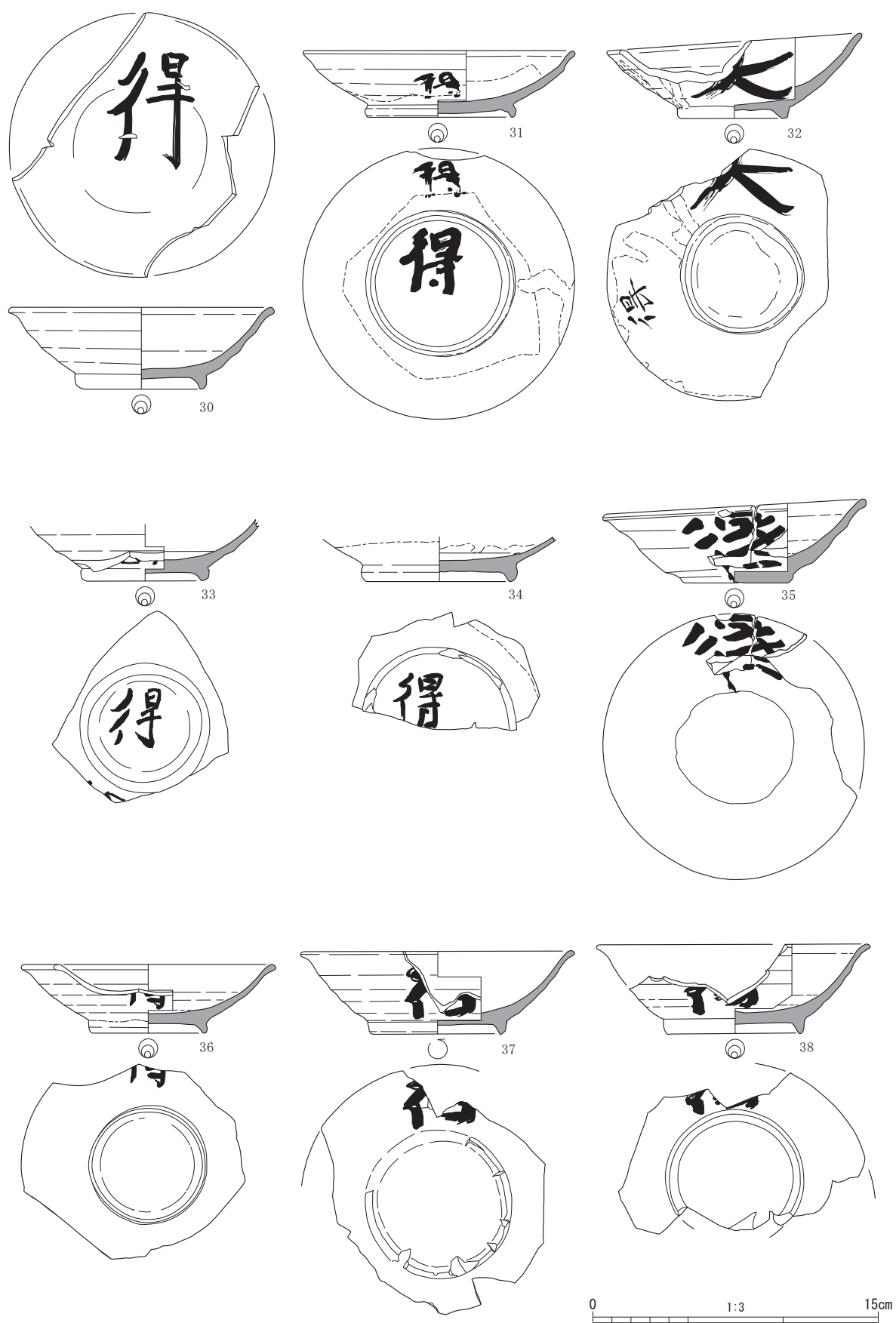


Fig.171 SX01 西部 出土遺物 (5)

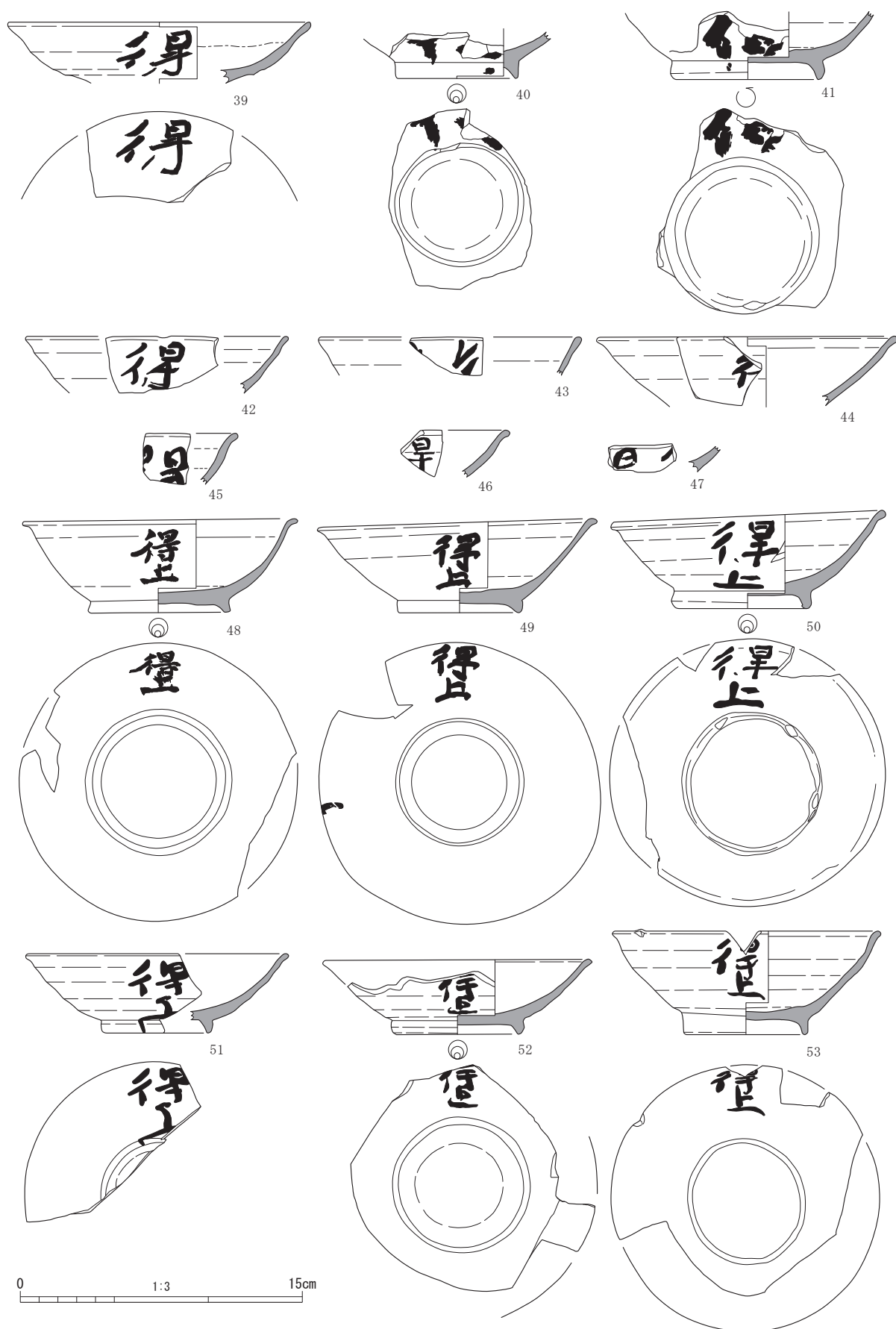


Fig.172 SX01 西部 出土遺物 (6)

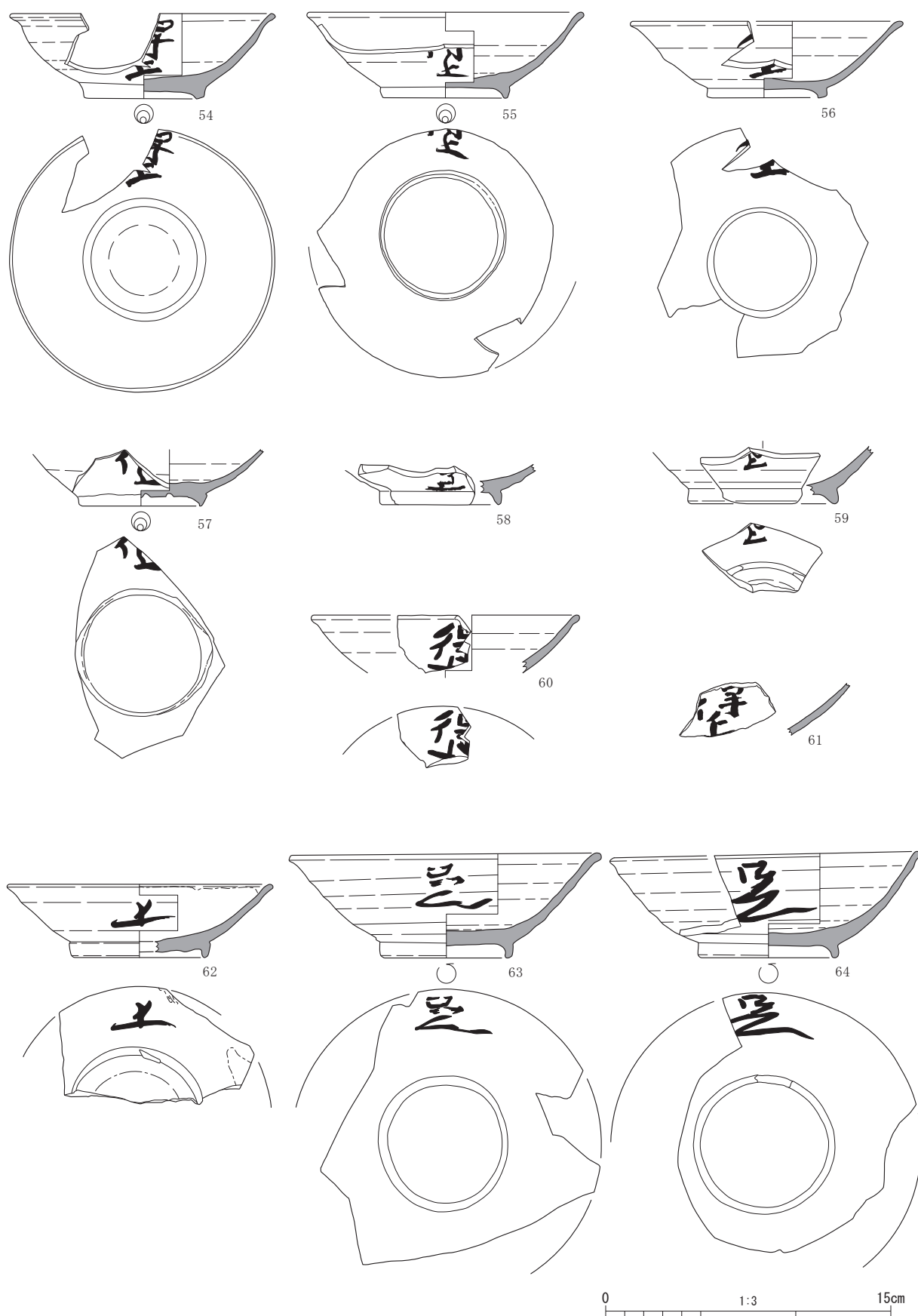


Fig. 173 SX01 西部 出土遺物 (7)

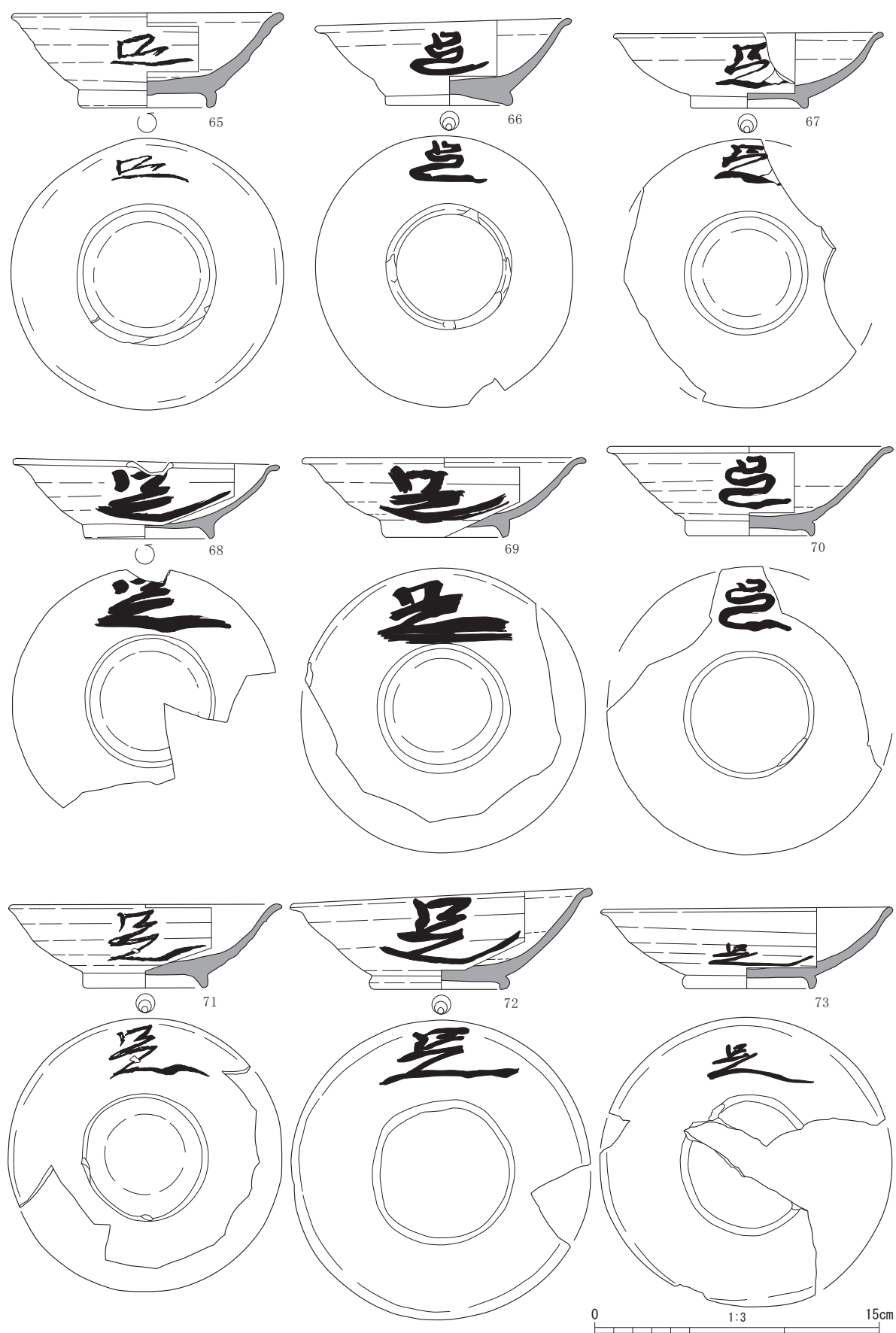


Fig.174 SX01 西部 出土遺物 (8)

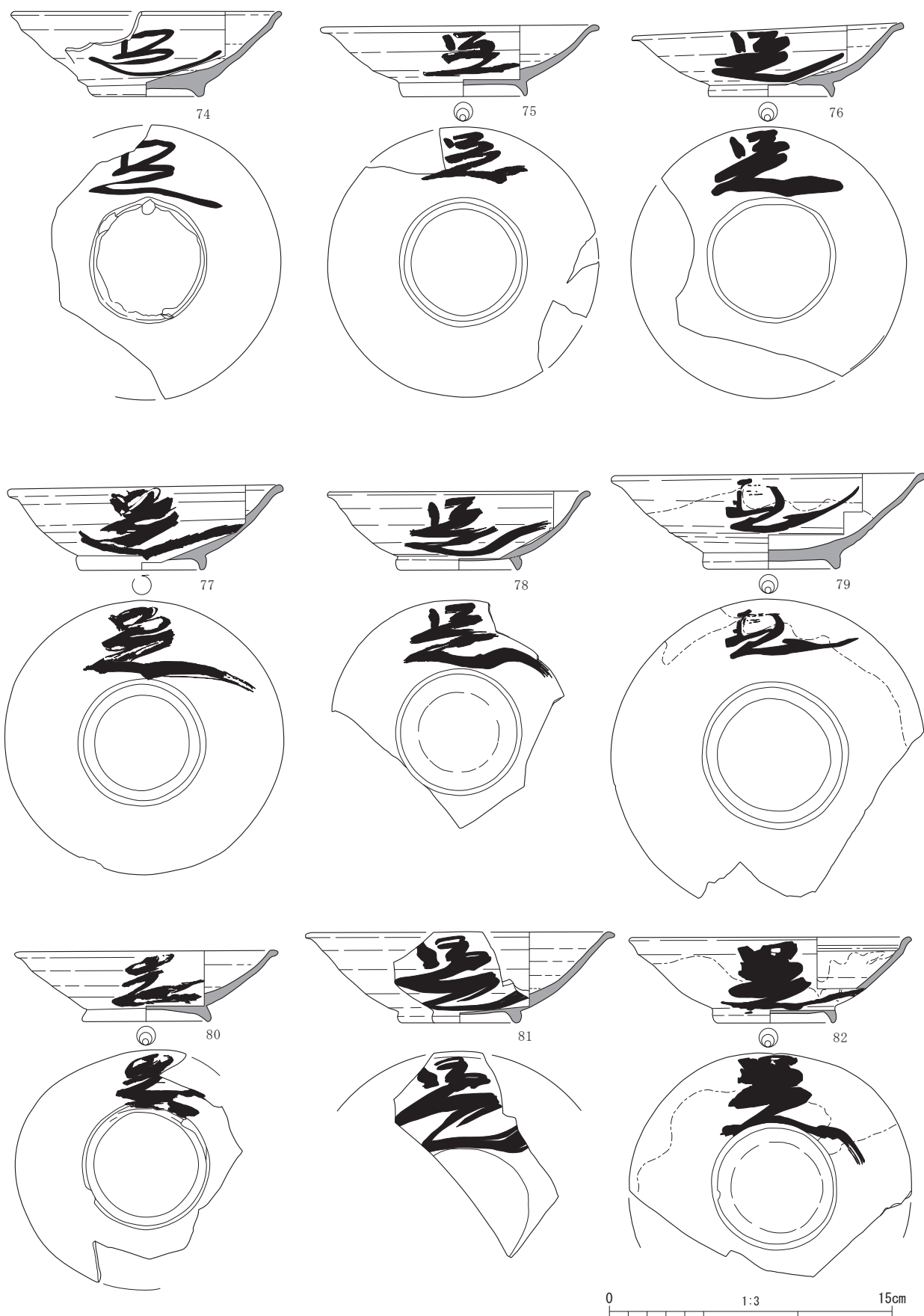


Fig.175 SX01 西部 出土遺物 (9)

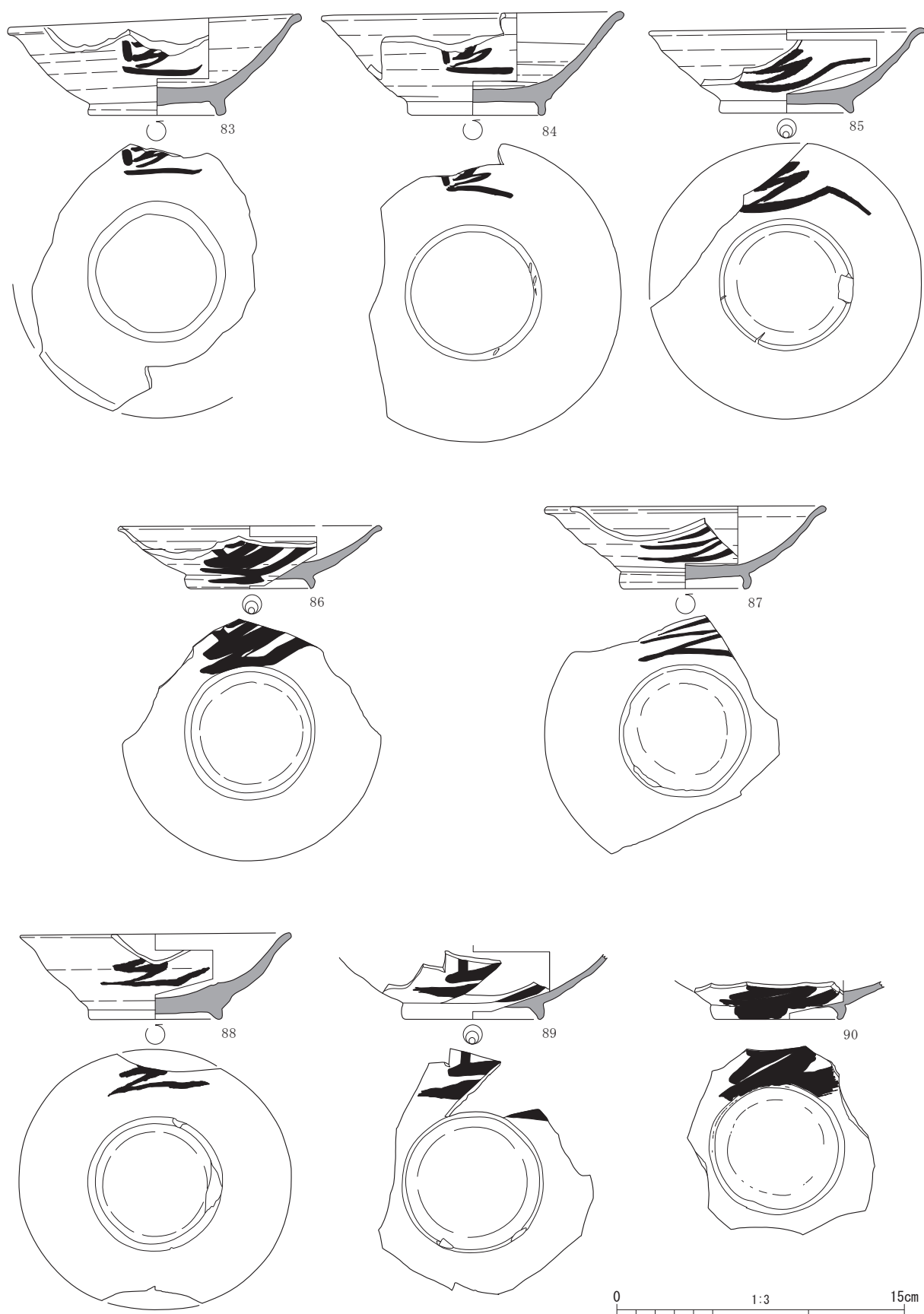


Fig. 176 SX01 西部 出土遺物 (10)

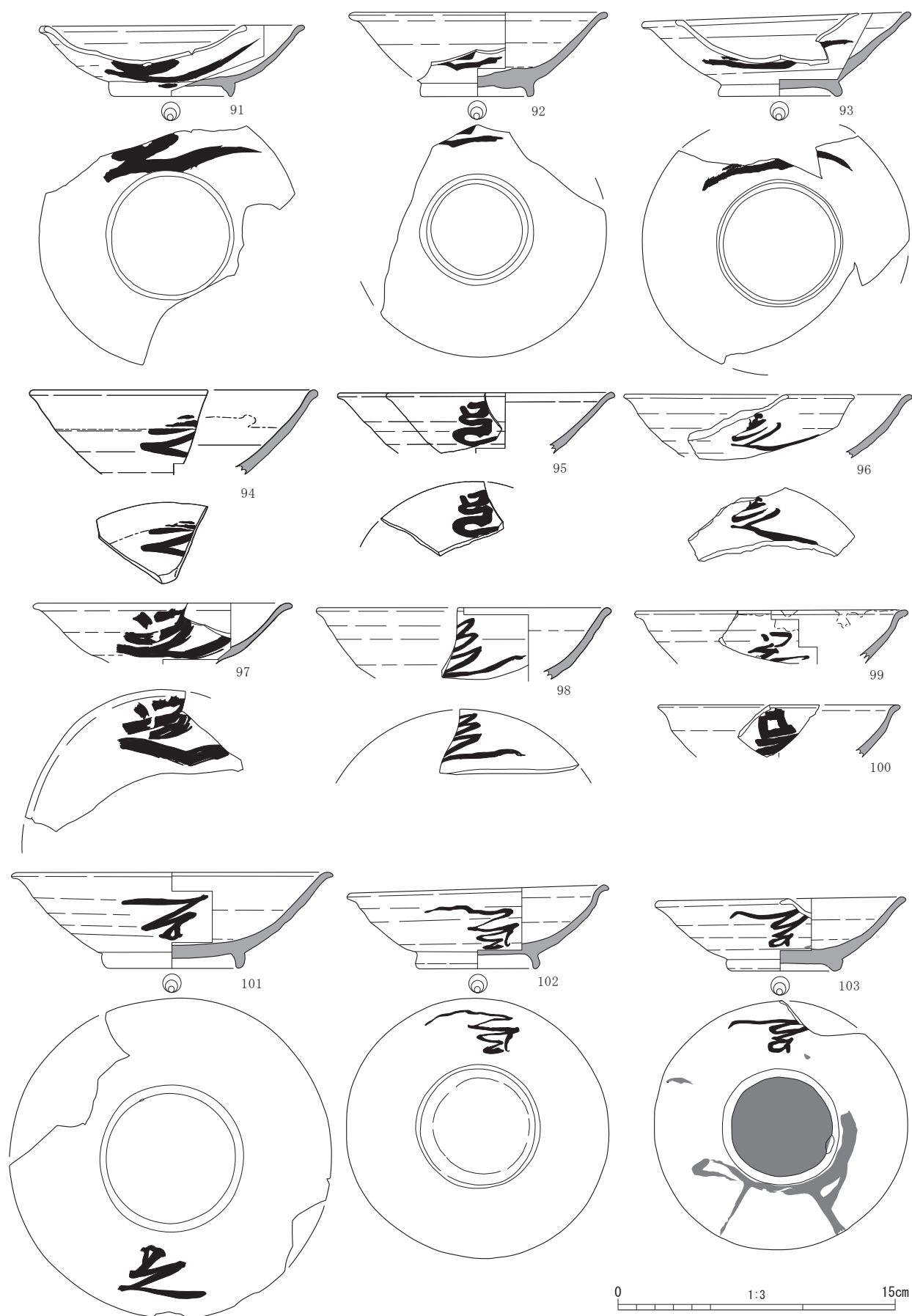


Fig. 177 SX01 西部 出土遺物 (11)

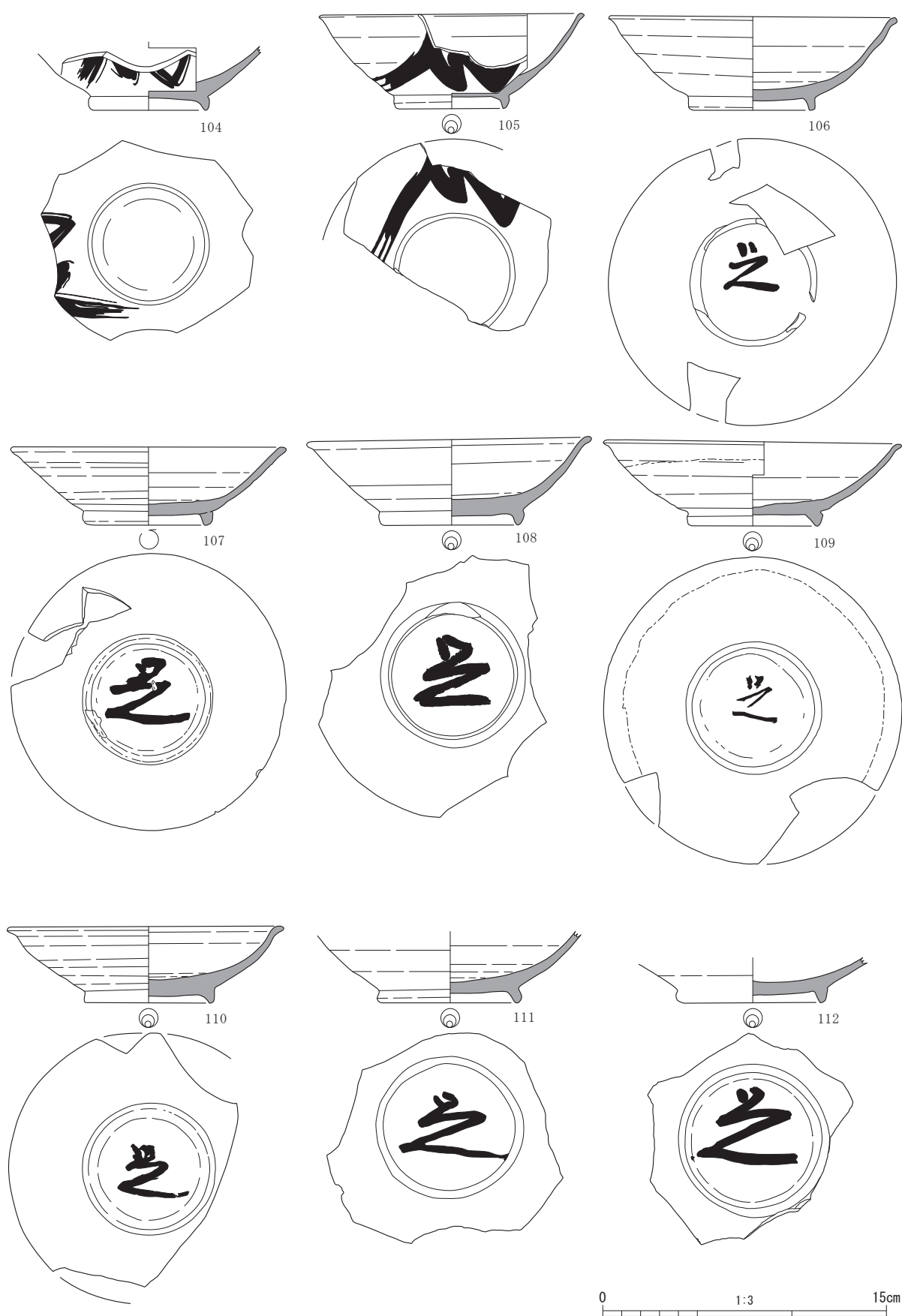


Fig. 178 SX01 西部 出土遺物 (12)

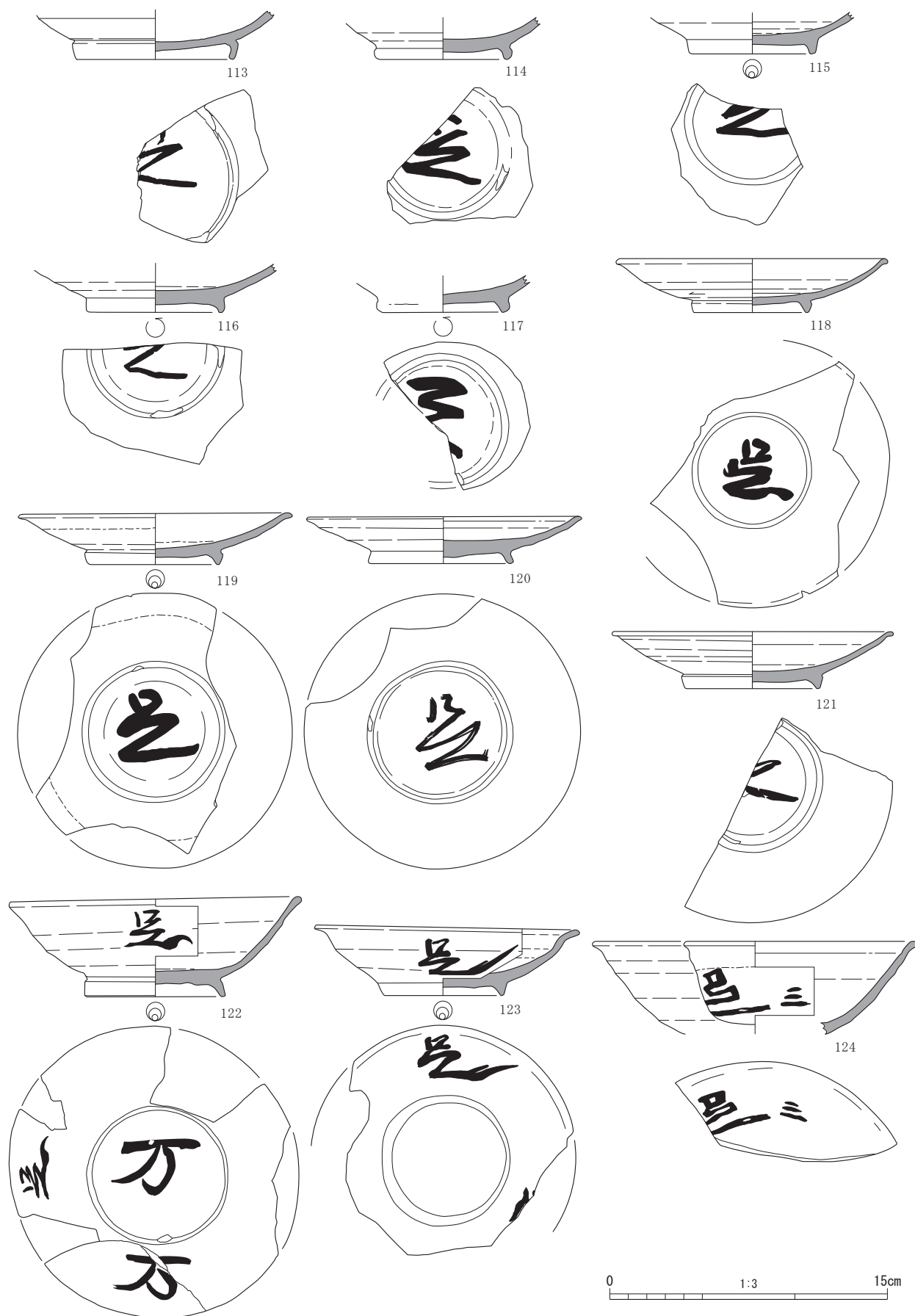


Fig. 179 SX01 西部 出土遺物 (13)

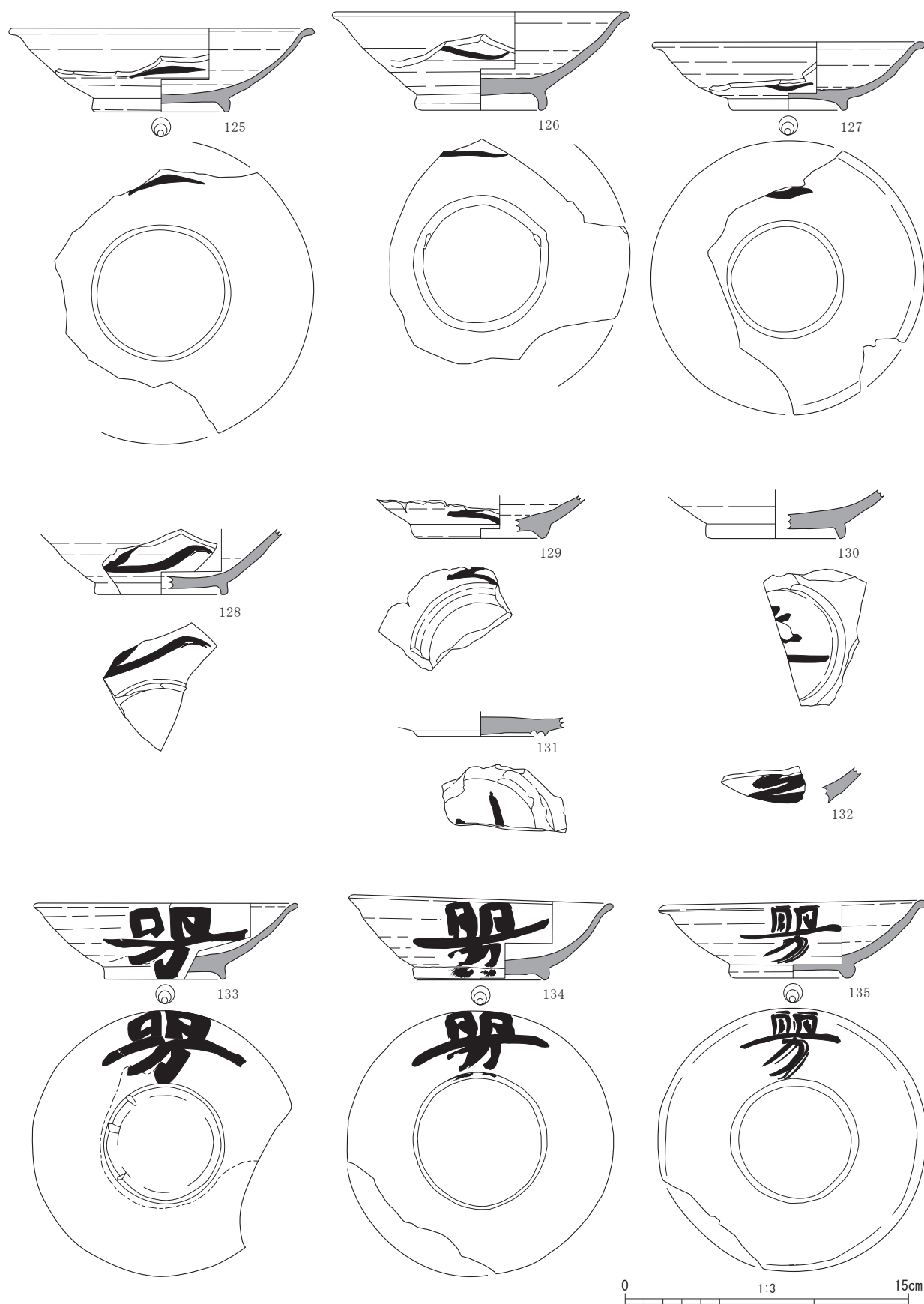


Fig. 180 SX01 西部 出土遺物 (14)

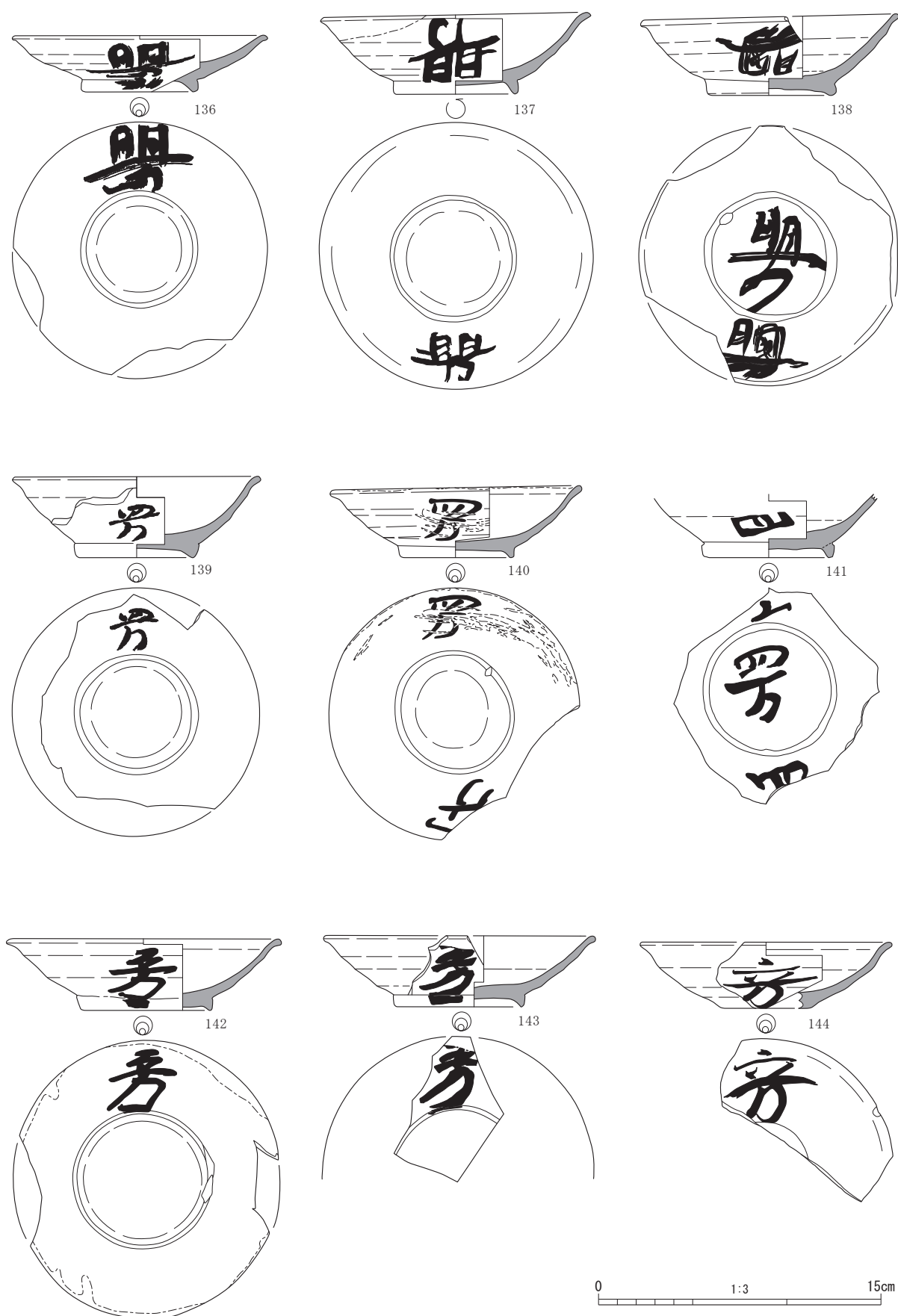


Fig. 181 SX01 西部 出土遺物 (15)

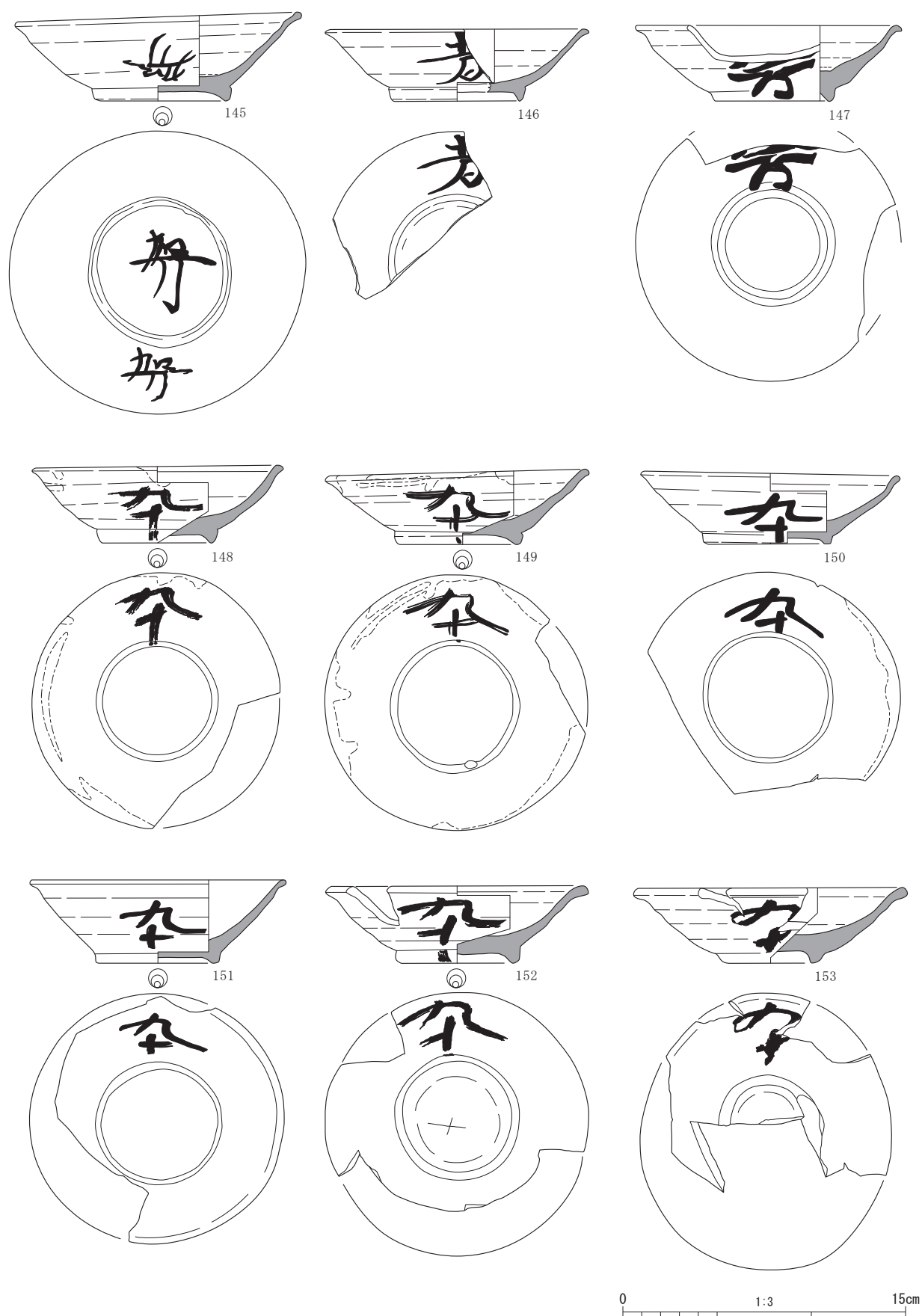


Fig. 182 SX01 西部 出土遺物 (16)

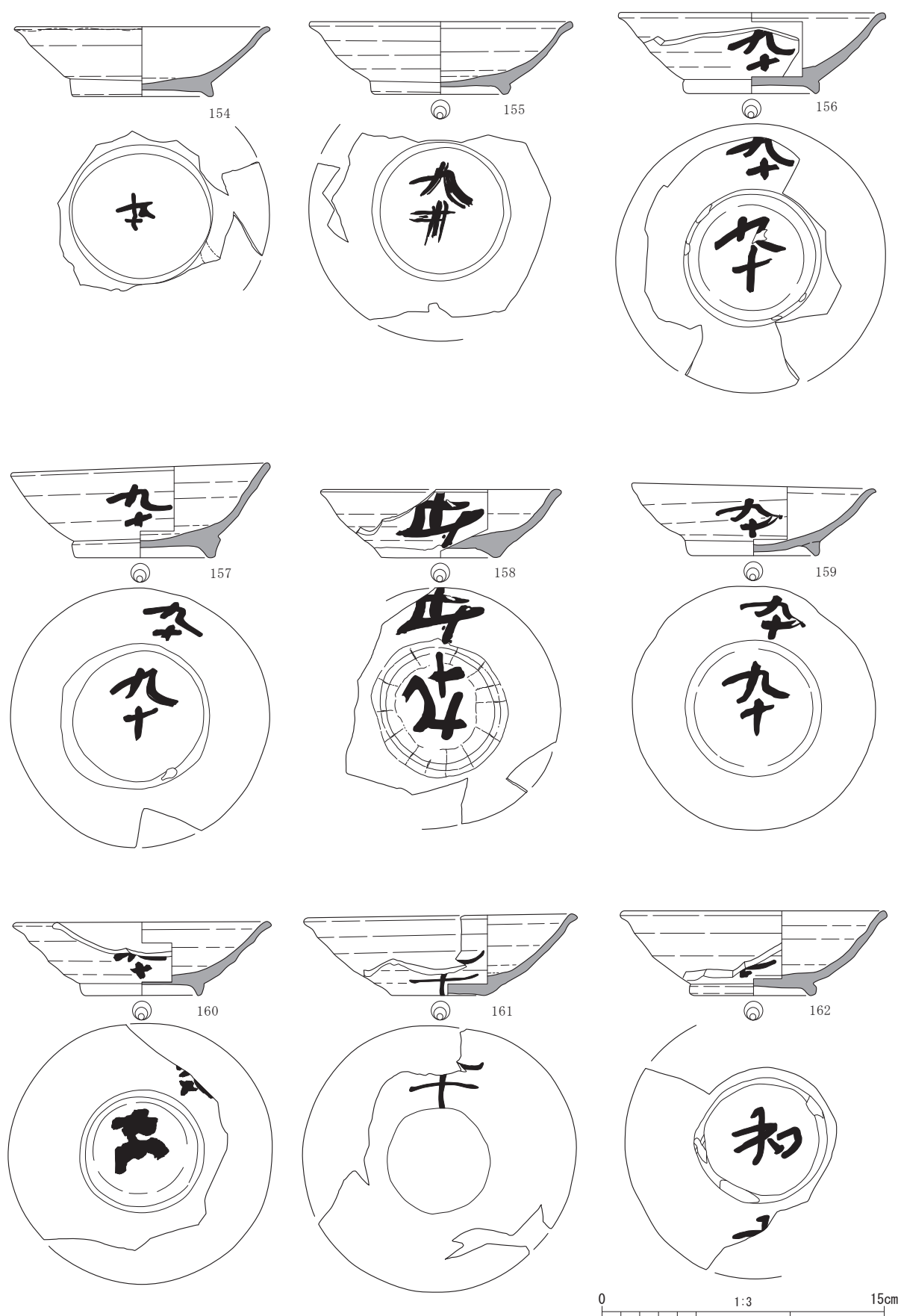


Fig. 183 SX01 西部 出土遺物 (17)

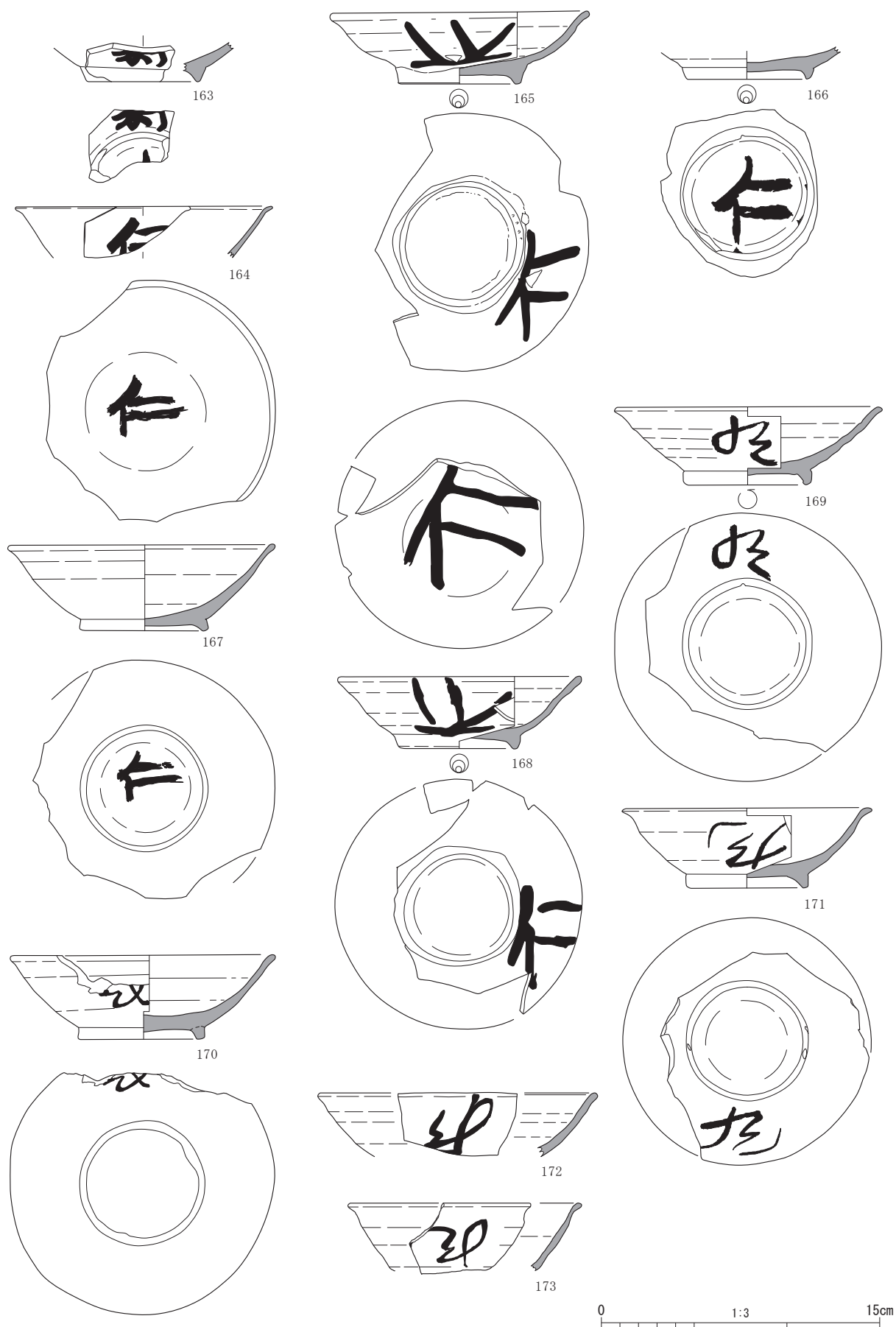


Fig. 184 SX01 西部 出土遺物 (18)